593.31
089

大妻技芸学校
大妻高等女学校 校長 大妻コタカ著

婦人服 子供服 洋裁の初歩より

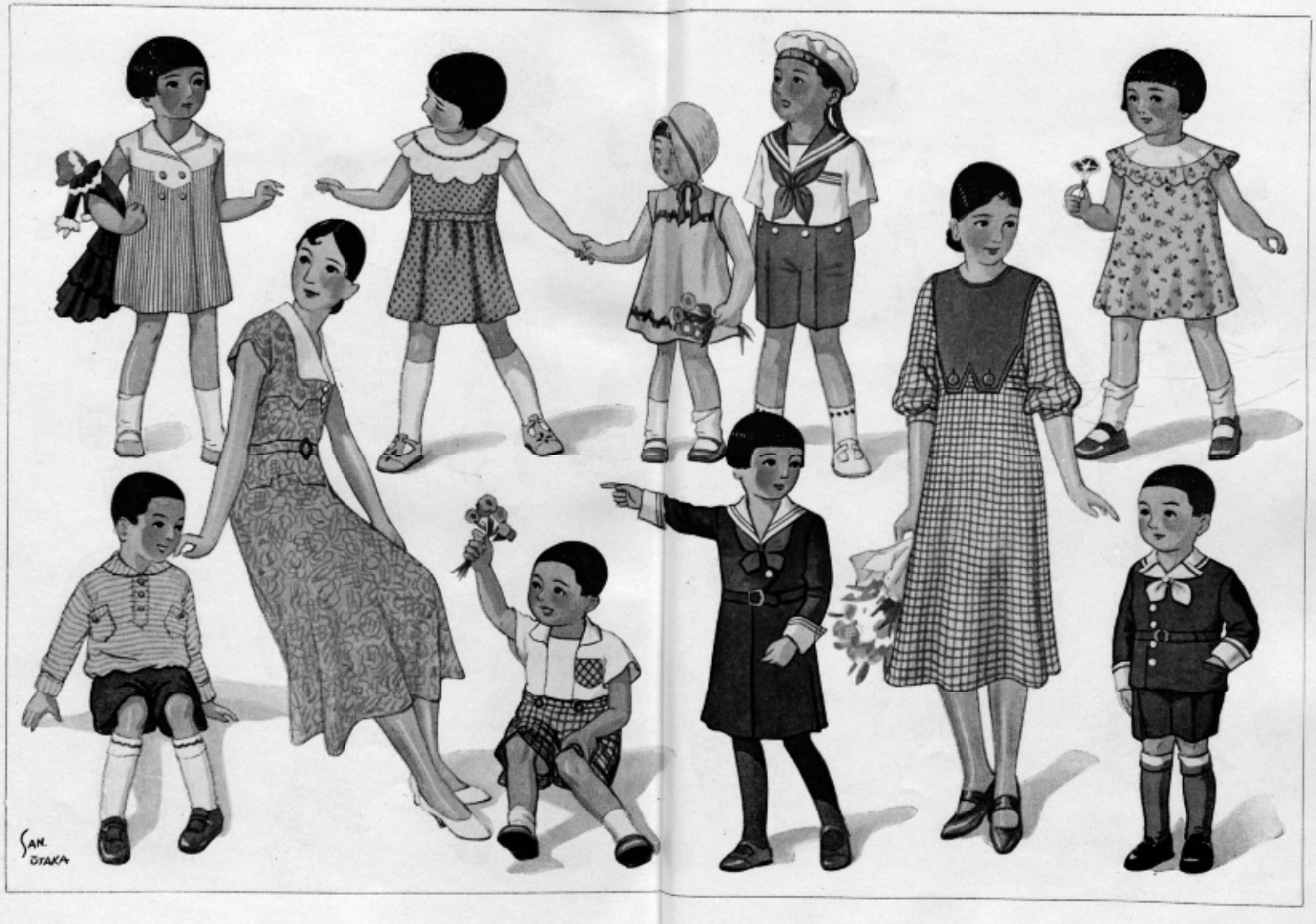
附ミシンの使方

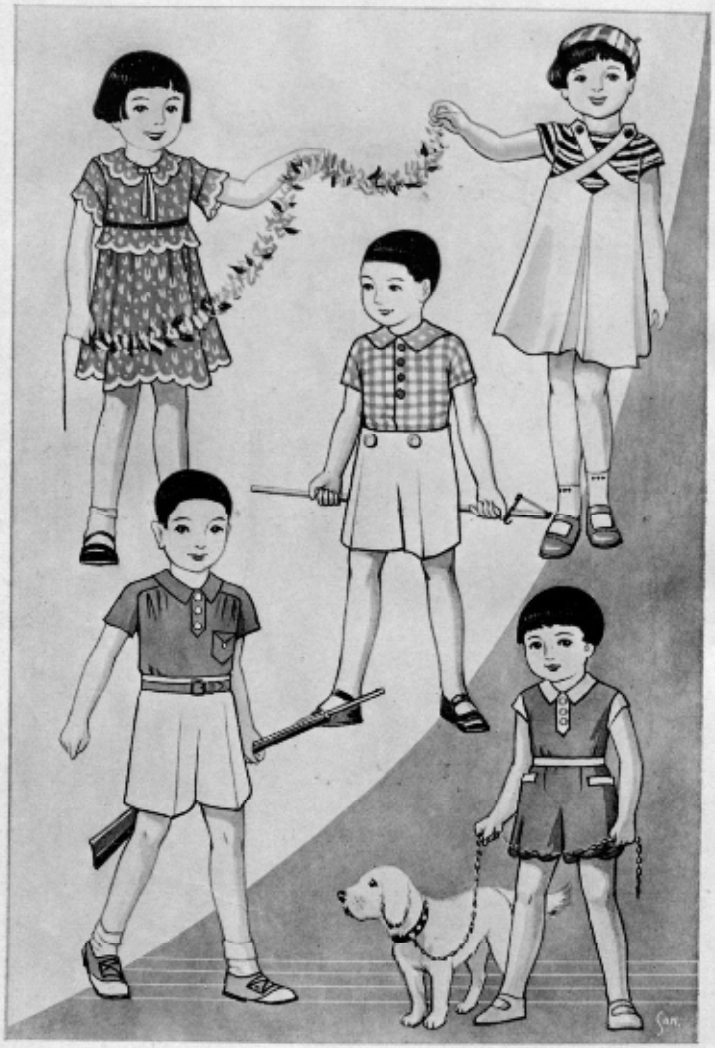
東京 研文書院

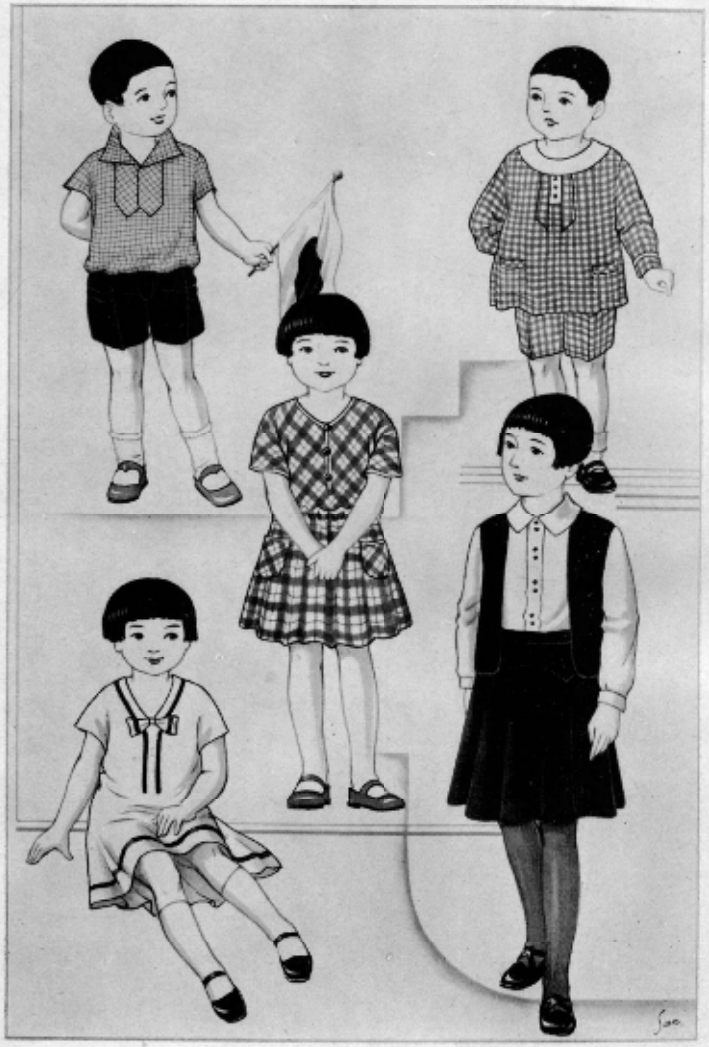
大東學校圖書之印

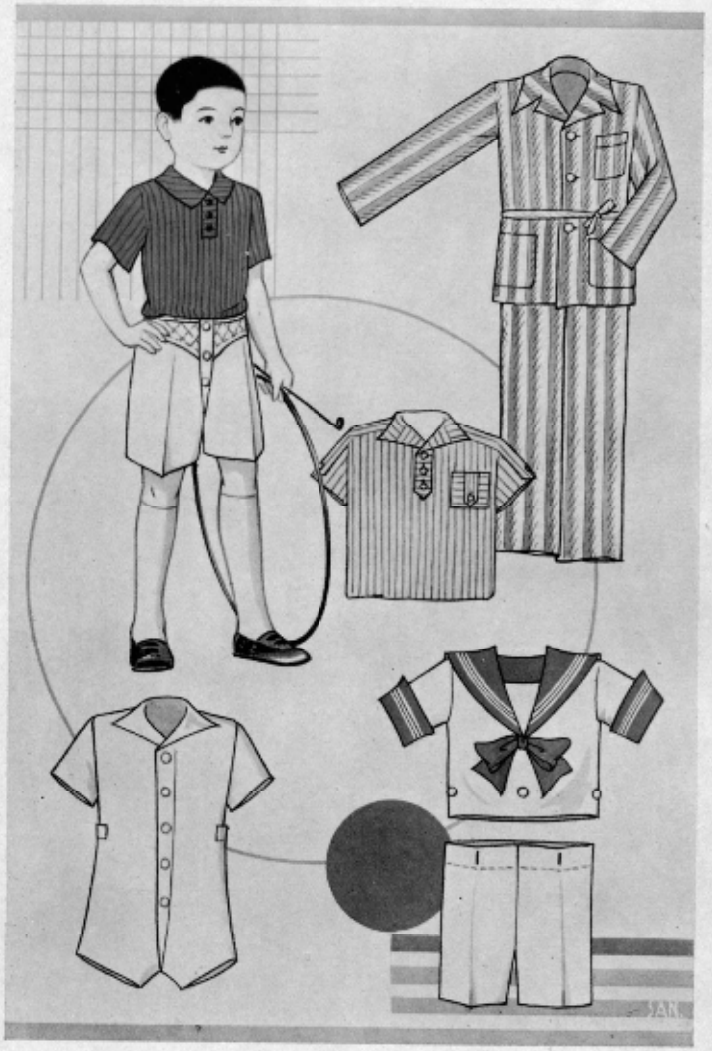
3638

東京都千代田區
3638
昭和
大東學院圖書館


SAN.
OTAKA






JAN

はしがき

一、近來洋服の需要は頓にその數を增して、年毎に洋服謳歌の聲を聞くやうになつて參りました。男子服は申すまでもなく、婦人服の流行も亦著しいものがありますが、それにも增して子供服の全盛は實に驚くべきものがございます。都會地の兒童は申す迄もなく、如何なる山間僻地にも洋服姿の兒童を見かけない處はないまでに、現今の兒童服は一般化し、また實用化されて參りました。それがために、各家庭でも、日常着としての子供着は、殆ど洋服と代り、和服を用ふる事の方が却つて珍らしくなつて來ました。

この驚異的な洋服時代の出現も全く洋服が運動上、衛生上、發育盛り

の兒童の體質に適して居ります事と、衣服の整理、手入の簡單な點とが兩々相俟つて、禮讃される所以となつたのであらうと思はれます。洋服は斯くの如く、最早外來のものではなく、完全に我國の着物の中に包含されて、必要缺くべからざるものとなつて參りました故、その裁縫、手入等も、從來のやうに洋服屋まかせにしてばかり置くことは許されなくなりました。それ故に、和服裁縫と同樣に、洋裁の練習が必要になりました。

一、洋裁の知識がありますと、和服の着古したものゝ良い處を取つて、洋服に仕立かへることも出來ませうし、また大人物の損じた所を除いて子供物に仕立かへる事も出來ませう。また安い生地でも手に入りますれば、僅かな時間で立派な着物に仕立て上げる事も出來ませう。

男子服、婦人服の面倒な仕立のものは、暫く措くとして、子供もの、婦人の家庭着程度のものだけでも家庭で仕立ることが出來ましたらばどんなに愉快で、どんなに經濟でせうか。一と針、一と針と運ぶ針目のその中にも慈愛に充ちた母の純情がこめられて居りましたらば着る子供達はどんなに幸でございませう。

一、本書はその意味で先づ兒童ものに重きをおき、婦人もの、下着類等初めて洋裁を試みられる方々に手のつけ易い簡單な、そして一番必要なものを掲げて、一讀しただけで直ぐに作ることの出來ますやうに、多數の挿畫をはさんで詳しく說明いたしました。

一、一般向として、手縫ひで出來る洋裁にかなり力を用ひました。またミシンを始めて使用する方々のために、ミシンの使用法、機械の說明

等なる可く詳しく說いて置きました。機械類はその構造を充分に了解いたして置きませんと損み易いものであります。

一、洋服の型の流行は、その年々によつて著しく異つて居りますので、本書では、流行になづまづに、專ら基礎的方面に意を注ぎました。然し基礎が確實に會得されて居りますれば、時々の流行によつて、部分的に多少の變化を試みることも容易に出來ますので、先づその根本練習を充分にいたすことが肝要であります。

一、洋裁の尺度には、在來吋等も相當に用ひられてをりましたが、本書は全部メートル法を用ひました。

著者識

婦人服 子供服 洋裁の初歩より 目次

附ミシンの使方

一、基礎の部

用具の種類……一
寸法の採り方……八
原型の割り出し方……一二
手縫の基礎……一四
なつり縫……一四
千鳥がけ……一六
袋縫……一六
伏縫……一七
三つ折縫……一七

切　鋏……一七
穴かゞり……一八
釦の附け方……二一
閂　留……二二
スナップの附け方……二三
鈎ホックの附け方……二四
ミシンについて……二五
ミシンの種類……二四
構造と各部の名稱……二五
運　轉　法……二六
針　と　糸……二八
基礎練習……二八
本縫の準備……三〇
本縫の練習……三二
使用についての諸注意……三三

起り易い故障とその直し方……三五
ミシン縫の基礎……三八
直　線　縫……三八
曲　線　縫……三九
三つ折縫……三九
伏　縫……四〇
割　縫……四〇
袋　縫……四一
タックの取り方……四二
ギャザーの取り方……四三
角の作り方……四四
劍型、丸型の縫ひ方……四五
縁取り布……四六
斜布の作り方……四六
縁の取り方……四八

地質による糸と針との定め方……四九

二、下着の部

ブローース……五四
シャツ……五七
コンビネーション……六二
シミーズ……六八
スリップ（其の一）……七一
スリップ（其の二）……七六
男女兒用アンダーウエアー……八〇
婦人ブルーマース……九一

三、簡單服の部

基礎型……九五
簡單服の衿刳の變化……九九
ラグラン袖型簡單服……一〇〇
衿ギャザー附簡單服……一〇五
肩下りつき簡單服……一〇八
脇ギャザー附簡單服……一一一
ヨーク附簡單服……一一四
婦人家庭着……一一八
女兒用運動シャツ……一二三

四、子供服の部

基礎型女兒服……一二七
セーラースーツ……一三六
單セーラー（上衣）……一三七
スカート……一四七
裏附セーラースーツ……一五一

男児服……一五四
ブラウス……一五六
ズボン……一六一
ジャンパーとブラウス……一六六
ジャンパー……一六六
ブラウス……一七四
サーキュラースカート……一七九
四五歳用春の女児服……一八二

五、婦人服の部

ブラウス……一九一
スカート……一九九
プレインスカート……二〇〇
プリートスカート……二〇四
ハウスドレス……二〇九

六、雑の部

大黒帽子……二一五
六つ接ぎ帽子……二一九
五六歳男女児用エプロン……二二三
涎掛……二二九
嬰児用ケープ……二三二
ベビー帽子……二三五
割烹着……二三九
ワイシャツ……二四四
ネクタイ……二四八

附

洋服の着方に就て……二六五
下着の着方に就て……二六五

靴下、靴下吊り、靴……二六八
着方の順序……二六八

——目次終り——

東京都立図書館蔵

婦人服
子供服

洋裁の初歩より

大妻コタカ著

一、基礎の部

用具の種類

ミシン　洋裁には第一になくてはならないものですが、それだけに和製、舶來等種類も澤山にあり、近頃は手ミシン、小型ミシン等澤山考案されて居ります。然し要は堅牢で充分使用に堪え得るものを擇ばなければなりません。詳細の説明は別項「ミシン」の項に掲げましたから、參照して適當のものを使用することにいたします。

型紙用紙　生地を裁つ前に、製圖する用紙で、一般にはハトロン紙を用ひますが、模造紙をも使ひます。或は包装紙の裏を利用いたすことも廃物利用として面白いものです。簡單なものなら手近な新聞紙でも差支へありません。

巻尺　身體の寸法を採る時に用ひる紐狀のもので兩面に目盛の印刷されて居るメートル尺を用ひます。

尺度　普通の裁縫用のメートル尺を用ひます。

ルレット　點線器、または別に、西洋筥などゝも云つて和服裁縫の時の筥と同樣の役目をいたします。金屬製の齒車樣のものですから、和服の筥よりは用途も廣く、型紙を幾枚も重ねて裁つ場合や、また出來上つた洋服から型紙を取るやうな場合に便利であります。

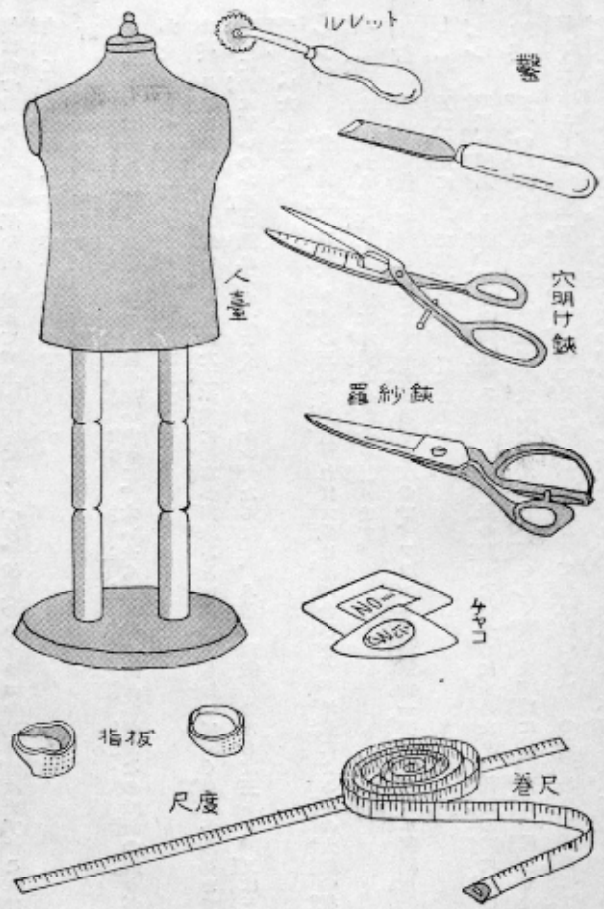
また布を裁斷する場合に、縫目の線を標附けたりいたしますが、絹・繻子地の場合は絹糸がルレットに辯みつきますので布地を痛めますから絹地には絶對に用ひません。

チヤコと筥　ルレットの利かない布地にはチヤコ（チヨーク）を用ひます。また布地によつては和服の筥を代用しても差支へありません。

裁ち臺　裁ち臺、即ち裁縫臺でありまして、朴の木で作つたものを一番よいといたします。和服と異つて用布が廣幅ですから、臺もなるべく廣い幅のものがよく、厚さは六糎位を適度とします。

裁ち臺の上は成るべく痛めないやうにするために、ルレットを使用する時にはボール紙の四粍厚味位のものを敷きます。これは常に入用ですから、一枚備へつけておきます。そして厚紙がそらないで平らになるやうに注意しながら上手に使ひならして置きます。

また婦人服などのやうに長いものを裁ちます場合には、ボール紙一枚では短いので二枚用ひます、この時にはキヤラコを横裂にして布目を通し、ボール紙二枚を突合せにして置いて、その合せ目に糊で貼りつけます。裏



第一圖

側は合せ目からボール紙を折り重ねて、上と下とに糊をつけ、横裂のキヤラコを貼り付けます。これは開閉を自由にする爲めに、折つてから貼るのであります。

縫針　メリケン針、或は和裁用の針。

メリケン針は針穴が細くて長いので、針の細い割合に、太い糸も通り、又針先が鋭敏なので針の通りが樂ですから、成るべくならばメリケン針を用ひます。

また、仕事の細い處ほど短い針を用ひた方が樂に仕事が出來るといふことも知つて置く必要があります。從つて常に針は短いのを使ひ馴れるのがよく、メリケン針ならば七、八番、和裁用針ならば三トメ、又は三ノ三を手頃といたします。

ミシン針　普通14番、11番、9番の三種を用意すれば大低は間に合ひます。地質による針の太細の撰擇は別項に掲げましたから參照して適當に地質との釣合を計ります。

刺繍針　洋服の裝飾に刺繍をほどこす場合がありますので、フランス刺繍用針一揃、及び日本刺繍用針を準備し、刺方及び用絲によつて適宜に使用いたします。

虫ピン　型紙を製圖する時、用布を裁斷する時などに型紙の動かないやうに止めたり、假縫の時に用ひます。

羅紗鋏　刃先の眞直ぐなものでなければ役立ちません、新らしく買ひます時には、刃先の眞直ぐなものを撰びます。そして布を二枚位重ねて切つて見て裁目がずれなくて切れ味のよいものを求めます。近頃は外見は立派に見えてもすぐに切れの止るもの、一寸落した位で折れるやうな粗惡な品が可なり出て居りますから、注意して求めます。

穴明け鋏　釦穴を明ける時にだけ用ふる鋏で、下のネヂを加減すれば任意の長さの釦穴を明けることが出來ます。

指抜　和服裁縫の指抜き一個。（西洋指抜きを強いて用ひなくてもよろしい。）

糸　カタン糸、羽二重糸、まつり羽二重、絹糸、躾糸、穴糸等。

カタン糸　は80番、60番、40番、30番、20番、8番などが一般に用ひられて居るもので、そのうち80番と50番とは綿織物をミシンで縫ふ場合に用ひます。又地質が木綿ならばスナップやホツクを附けるとき、襠等をまつる時には30番又は40番を用ひます。綿織物の薄地には40番を、普通には30番と地質に從つて糸をかへます。

羽二重糸　絹、毛の場合に用ひます。

まつり羽二重糸、絹糸　絹物、毛織物のまつり用に使ひます。又絹物のボタン穴かがりには絹糸を用ひます。

躾糸　洋裁用の躾糸で、各所の躾に用ひます。また代用としてカタン糸の50番、80番を用ふることもあります。

穴糸　毛織物の釦穴かがりに用ひます。

毛布或はアイロン布團　アイロン並に鏝をかけるときに下に敷くもので、毛布を用ひても又は金巾、キヤラ

コ地へ導く紐を入れた布團を用ひてもよろしい。

アイロン　電氣、瓦斯、炭火、など色々の種類のアイロンがありますが、一般にはだん〳〵と電氣、或は瓦斯アイロンを用ふるやうになつて來ました。いづれにしても、アイロンは洋服の仕上げの場合にはなくてはならないもので、重量も相當重いものがよく、家庭用としては三ポンド半乃至四ポンド位が適します。

鏝　和服用の鏝。

アイロン臺　マンヂウとも申します。アイロンを掛けるときに用ふる臺で、胸部、背部、腰部などの如く比較的平な箇所をあてるものと、袖、ヅボン等にあてるに適する細長い臺とが組合せられてゐるもので、最近は新工夫をこらされた便利なものが出來て居ります。

霧吹き　和服裁縫用の霧吹きで、布の皺を伸すために水霧をふくのに用ひます。

目打ち　先の尖つた目打錐。

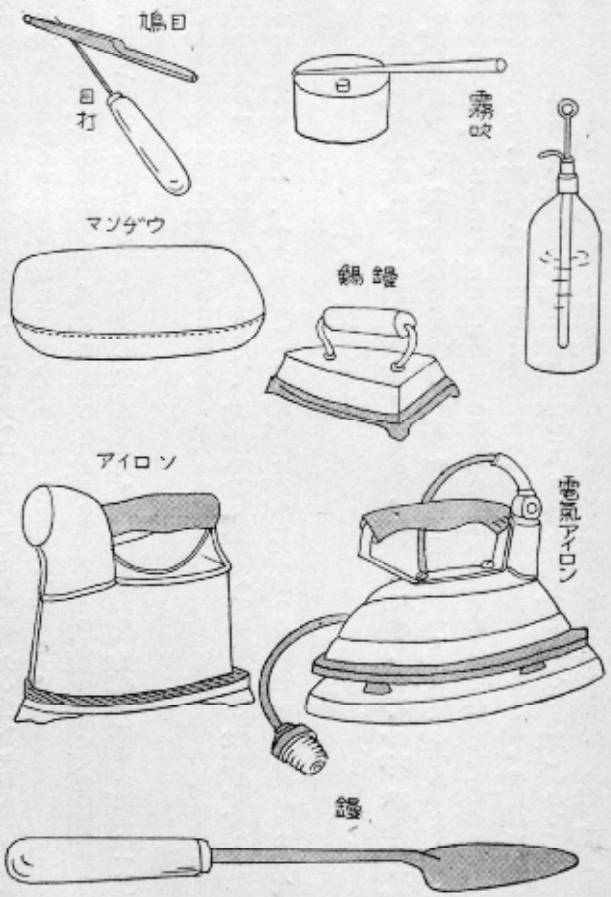
のみ　穴明鋏と同樣に釘穴をあけるのに用ひます。一糎二粍幅と二糎幅位の二種を用意しておけば足ります。尤も穴明鋏があれば強いて鑿の必要はありません。

鳩目鑿　圓形の穴を明ける鑿で、槌でたゝいて穴をあけます。大きさは直徑三粍乃至五粍位が手頃です。

毛抜き　切鋏や、鋏糸をぬき取るのに用ひます。

プラッシ　洋服の仕上げに糸屑や塵を拂ふのに用ひます。

人臺　スタンとも申します。人體の上半身形に足をつけた臺で、婦人服用、子供服用のそれ〳〵があります。



第二圖

人の體に大少各種がありますやうに、人臺にも例へば婦人服としても普通、大小の二、三種があり、子供用には三歳から十五歳まで各年齢に應じて各種の大きさのものが作られて居ります。

これは仕立の途中全體の均衡や、線の良否を見るのに必要なもので、この人臺にかけて充分に狂ひをとつたものは着くづれがいたしません。また新らしい意匠を工夫する場合などにも、人臺は必要なお道具の一つであります。

作り上げた洋服の陳列に用ふることは悉知の通りであります。

以上で用具の一と通りの説明は終りましたが、以上の種類を全部調へておかなければ洋裁は出來ないと申すことでは勿論ありませんが、本式に洋裁をいたす場合には出來るだけ揃へるやうにしたければなりません。

寸法の採り方

特別な型の物を作る時は別でありますが、普通には胸廻り、胴廻り、腰廻り、背丈、着丈、裄丈だけで自由に割り出しが出來ます。尤も女兒服などは背丈、着丈、胸廻り、裄丈が判つて居れば十分であります。

これ等の寸法を取りますには、上に着る物は下の物をつけた上から計ります。それでないと折角出來上つた物が裄が短かつたり、胸廻りが窮屈であつて着られないやうなものになることがあります。普通採寸をしますには卷尺を使ひますが、卷尺のない時は細い紐で計つて、それを尺度に當てゝ計つても宜しいのです。

なほ採寸の時は必ず背の方からか、或は横の方から採ることが禮儀になつて居りますから、前に廻つて採るやうなことをしてはなりません。

各部の寸法は次のやうに計ります。

1、胸廻り　乳の上で胸部の一番太い廻りを計る。

2、腹廻り　腰骨の上の細い所で計る。

3、腰廻り　腰骨の一番太いところで計ります、丁度腹廻りの線から十九糎位下になります。

第三圖

4、背丈　頸のつけ根（第二頸椎骨）から腹廻りまでの寸法。

5、着丈　第二頸椎骨から膝裏までを子供物とし、十歳以上の兒童は更に四糎位長くします、婦人服の場合は床上三〇糎位の所までゞ計ります。然しこの身丈は時の流行によつて幾分違ひます。

6、裄　第二頸椎骨から肩山を通つて自然に下げた手頸迄の寸法で、半袖、七分袖、三分袖などはこの裄丈を基として割り出します。

7、脇丈　スカート丈ともいひまして、腹廻りのところから極までの寸法、つまり着丈から背丈を引いたも

のと同寸。

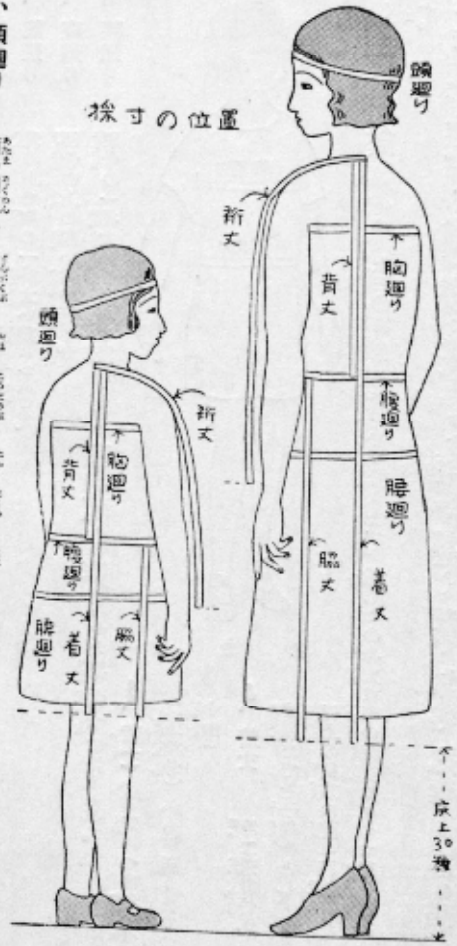
8、袖山丈

肩山袖附縫ひ目から手頸までの寸法。

9、頭廻り

頭の側面から前額部を通り後頭部の高い所を一廻りする寸法。

標準寸法



第四圖

標準寸法

寸法の採り方

	背丈	身丈	胸圍	裄丈
一歳	23cm	70cm ～60cm	46cm	34cm
二歳	24〃	48〃	48〃	36〃
三歳	25〃	50〃	50〃	37〃
四歳	26〃	52〃	52〃	39〃
五歳	27〃	54〃	54〃	40〃
六歳	28〃	56〃	56〃	42〃
七歳	29〃	58〃	58〃	44〃
八歳	30〃	60〃	60〃	46〃
九歳	31〃	65〃	62〃	48〃
十歳	32〃	70〃	64〃	51〃
十一歳	33〃	75〃	66〃	54〃
十二歳	34〃	80〃	68〃	57〃
十三歳	35〃	85〃	70〃	60〃
十四歳	36〃	90〃	72〃	63〃
十五歳	37〃	95〃	74〃	66〃
十六歳	38〃	100〃	76〃	69〃
十七歳	38〃	105〃	78〃	70〃

十六歳以上は下の婦人服の標準寸法に依る。

	背丈	身丈	胸圍	裄丈	腰圍	脇丈	腹廻り
	38〃	106〃	80〃	70〃	84〃	68〃	65〃

この寸法は字の通り標準の寸法でありますから人々の體格によつて幾分の相違はありますが、大きな誤りはありませんから、實際の採寸に馴れない人とか、或は實際に計るべき人の居らないやうな場合にはこれによるより外ありません。既製品などはこの標準寸法によつて作られてあります。

原型の割り出し方

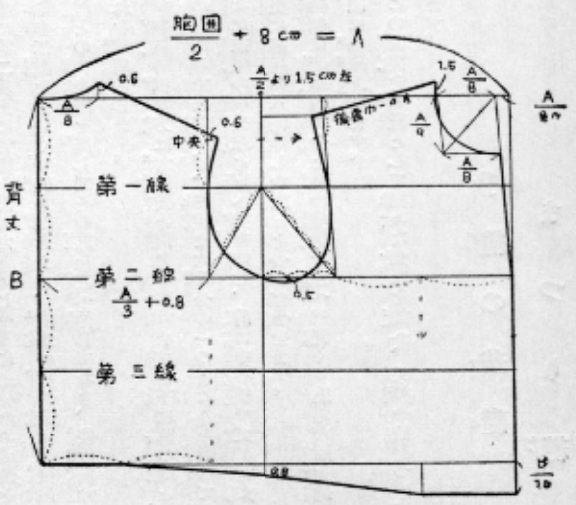
先づ最初に胸廻り寸法を半分にして半胸圍寸法を出し、それに弛み分として八糎加へた寸法を横線とし、背丈寸法を縦の線として四角を作ります。

次に横線の中央點を出して、その點から左へ三糎計つて下へ長く線を引きます。この線によつて、右側が前身頃、左側を後身頃と區別されるのであります。

それから第五圖のやうに背丈の線を四等分して得た線を假に第一、第二、第三、とします、製圖はすべて後身頃から始めます。

先づ左上角から横に半胸圍（假にAとします）の八分の一の寸法を計り、この點を眞直ぐに上へ六糎上げて、そこから圖のやうに後衿刳を曲線で引きます。

次に第二線上に背丈の線（假にBとします）から三分のAに八糎を足した寸法を計つて、この點を上へ引き上げます、そしてこの線上で第一線と上の線との中央に點を打ち、更にその點を右へ六糎出して、この點と後衿刳の六糎上げた點とに斜線を引きます、これが後肩幅の線になりますから寸法を計つておきます。



第五圖

袖刳線は圖のやうに脇の線と第一線の交叉した所から第二線と背幅の交叉したところへ案内線（斜線）を引いてその線の四等分の一のところを通り、上の六糎出した點つまり後肩の線の終りから、第一線と背幅の線との交叉點までは餘り刳らないで、四等分の一から脇線迄は後袖刳寸法で無理のないやうに引きます。

それから脇線は裾で八糎伸して、後裾幅の中央點へ斜線でつゞかせます。

次に前身にうつります。

前右上の角から横線へ二十分のAを計つて點を打ち、第二線に向つて斜線を引きます、この斜線のことを前ぐせの線といひます。

この斜線の上角から左と下へ八分のA寸法を各々計つてその二つの點を横と下へ伸して菱形の四角形を作り、その四角形の左の上へ一糎五糎突き出しま

す、（このつき出す寸法は何歳の場合でも同じ寸法で差支ありません）

次に第二線上に背幅を計つたと同じやうに三分のA寸法を計つて前幅をきめ、上の線上にも同じ寸法を計つてこの二點をつなぐ斜線を引きます、前肩の引き方は、後肩終りの點を點線で前身の今の斜線上にうつし、上の線との中央點を出してその點を左へ伸しておき、後の肩寸法より六粍少ない寸法だけに合せて斜線を引いてこれを前肩とします。

袖刺線の引き方は大體後と同じでありますが下は脇の線と前幅の線との間を三等分して、脇線に近い三分の一のところで五粍下げ、斜線は六等分の一のところを通つて前幅の斜線と第一線の交叉點から肩先に引きます。

次に前幅の中央點を下へ引き伸し、前口中心線で更に背丈の十分の一だけ長く引き下げ、この點とをつなぎ、更に脇線の八粍伸した點とをつなぎ合せます。

衿刺は斜線四等分と上の横線で左へ三粍くり込んだ所を通るやうに無理のない曲線を描きますと前身原型の製圖は出來上ります。

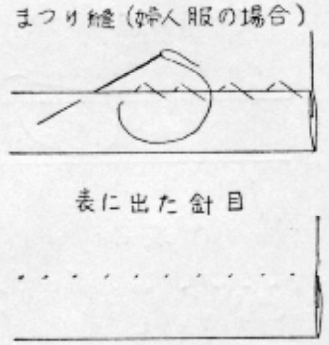
この原型を基礎として種々な意匠を加へ、又袖や衿をつけ、丈を長くしてはじめて洋服の型紙になるのであります。

手縫の基礎

まつり縫

まつり縫には二種類ありまして、一つは女兒服並に婦人服に用ふるものと、他は男兒の通學服や詰衿及び男子の背廣、オーバコート等に用ふるものであります。

女兒及び婦人服用のまつり縫



第六圖

女兒服や婦人服に用ふるまつり縫の仕方は第六圖のやうに折り山の角に針を出して下布をやゝ斜目にすくひ、又斜目に針を折り山の角から內側へ布目一本を抄つて更に下布を抄ひます。表布の針目は心持斜目になります。針目の長さは普通木綿物で八粍位、薄地ものゝ場合は一糎の間に三針の程度位にいたします。

糸は木綿物の時にも薄物の時にもミシン糸を用ひます。糸の引き加減は布地が左右に動く位を度として弛やかに軽く引きます。まつり目がわからない程強く引き過ぎますと、表の方の針目も自然きれいに揃はなくなります。

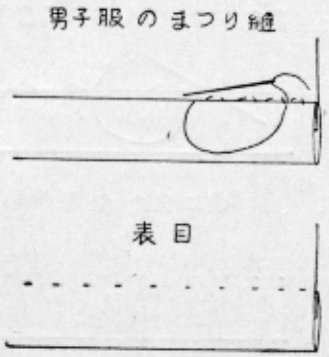
男兒及男子服用のまつり縫

男子用のまつり縫は、第七圖のやうに針を折山の角に出して直ぐ下布を抄ひ、次に針を折山の角に出すやうにします、このまつり縫は布が左右に動かないで堅くなります。

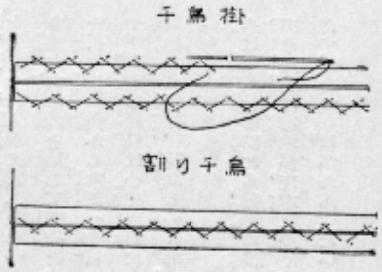
千鳥がけ

布地の厚目のものを仕立る場合に裁目が縫代になりました時にその裁目へかける仕方であります。又縫目を割つて第八圖のやうに、縫目の上にかけることもあります。

千鳥がけの方法は圖のやうに布の左の端に糸をかけて、表布と縫代とを交互に抄つてゆく仕方で、針目から針目までの間隔を揃へてゆきます。千鳥の大きさは品物と場所とによつて定めます。



第七圖



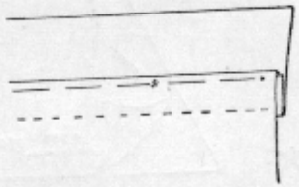
第八圖

袋縫

初めに中表に布を合せて淺縫をし、これに淺くきせをかけて引返し、更に普通の縫代で裏を見て縫ふ仕方で、和服の單衣物の裾下の縫方は即ちこれであります。

伏縫

第九圖のやうに一方の布の端を三粍位控へて縫合せ、縫込みの狹い方へ折つて裏には一糎位の針目を出して縫込みの端を伏せておく縫ひ方を申します。布の耳などに用ひます。



第九圖

三つ折縫

布の端を三つ折紙のときのやうに二度折つて裏折代の端を普通に縫ふ仕方で、風呂敷の端縫に用ひられて居りますのが即ち其れであります。

切躾

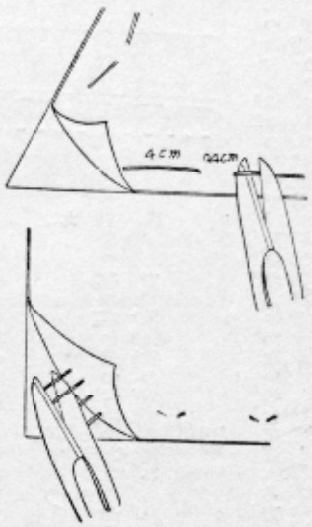
毛織ものなどの地厚のもので、點線器がきかない場合に用ふる方法であります。布地には初めチヤコで出來上り線又は合標を附けて置き、針に躾糸二本を通して標の上を四糎位づゝ間を置いて針を出し、下側は四粍位の抄ひぬひにします。次に表の糸の中程を鋏で切つて、靜に布と布の間を糸がぬ

けない程度にひろげて間に出てゐる糸を切り、布を上下に離して糸が布から出てゐる部分だけ鋏で切ります。

注意

1、糸を布から長く殘して置きますと物に引つかゝつて拔けることがあります。

2、布と布との間に鋏を入れて間の糸を切る時、鋏の先きが布の裁目の方にゆくやうにして布をおさえて切ります。鋏の先きが布に當つて生地を痛めることがあります。



第十圖　穴かゞり及び切れ目の鋏切

穴かゞり

種類　釦掛の穴には横の穴と竪の穴との二種類があります。これは釦の引かれる方向によつて、横にしたり竪にしたりするのであります。

穴の大きさ　穴は使用する釦の直徑よりも四粍長く切るのがきまりであります。

かゞり糸　穴かゞりの糸は下着でも上着でも、木綿地のものはカタン糸二十番を用ひます。但し同じ木綿地でも小倉地はカタン糸八番、極薄地ものは三十番、絹地物は絹糸でかゞります。毛織物の場合は穴糸を使用いたします。

糸の長さ　糸の長さは釦穴の三十倍位を要します。但し毛織物の厚地の時には三十一倍にいたします。釦穴の數だけ糸の寸法を揃へて切つて置いて、穴かゞりに取りかゝります。

白の絹糸又は穴糸でかゞる場合は切り揃へた糸に水をつけて、布の間に入れ、しごきながら何回もアイロンをかけてから後に使ひます。

その他毛織物の場合には、白蠟を糸今蠟に引き、前のやうに布の間に入れてしごきながら幾回もアイロンをかけて用ひます。面倒のやうですが、この手數を省くと穴かゞりが仕難いばかりでなく奇麗に仕上げることが出來ません。

穴かゞりの仕方　釦穴の位置は次のやうにあけます。

釦穴の位置のとり方

1、布の端から一糎五粍入つた所に必要な長さだけに直線を引く。

2、飾りミシンの都合によつて多少深くなることもある。

3、見返し布等には其の幅の中央にあける。

4、穴と穴との間隔は八糎以上にしない。

と云ふやうな注意が肝要です。

穴のあけ方

位置が定まりましたらば穴を中央にして左右に二粍づゝ普通は押へミシンをかけます。但しこれは手縫の場合にはその必要はありません。そして中央に眞直ぐに鋏又は壓で、奇麗に穴を切りあけます。

かゞり方

1、穴かゞりの糸の結び目を布の表側の穴の位置から四粍位離した所に出して、糸を一旦裏側へ引き拔き、穴のかゞり始めの所に針を出します。

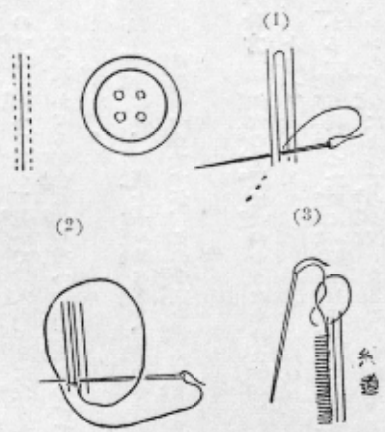
次に穴の縫ち目を平行に穴の先きまで針を入れてすぐ隣へ出し、穴の切り目に添つて力糸をかけます。

2、左手の人さし指の上に釦穴の布をかぶせて、拇指と中指とで釦穴が上向きになるやうにして押へます。

3、縫ち目から二粍すくつて、其のまゝ針を抜き、糸の輪を圖の如く少し殘しておきます。そしてその糸を手前の方から左側に廻し、又輪を作り乍ら最初に殘した輪の手前から向側へ糸を拔きます。

穴かがり

釦穴の長さ及び押へミシン



第十一圖

4、糸の締め方は釦穴と平行にして針足を揃へます。

抄ふ間隔は下着類は荒目にします。縫て穴かゞりは餘り間隔を細かくすると出來上りがきたなくなります。

5、釦穴の端のところは、縫針を左右に一針づゝ中央には縦に一針出して角を廻ります。

6、最後の留め方は、横に糸を表側と裏側とに三針掛けて表側と裏でこの針目をまとめて抄ひ、次に裏側を表側と同様に糸だけ抄ひ、よく糸を引しめて、穴かゞりの根の處を表側に針目の出ないやうに抄ひ、穴の中程で糸を引き出して切ります。

この時最初の結び目も裏側の穴の際の所から切り落します。

仕上げ方

穴の仕上げは日打を穴の先に入れて力を入れて、穴に平行して引張ります。

釦の附け方

釦の種類

釦の種類には大體表穴と裏穴との二種類あります。その他、くるみ釦と云つて木釦を好みの布でくるんだものもありますが、扱ひ方は裏穴と同様にいたします。

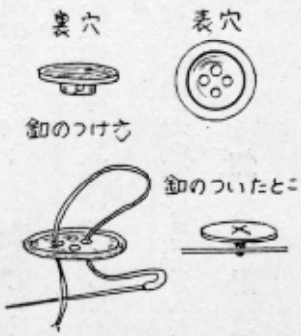
また各々の種類中には、形體の異つたもの及び大中小の各種があります。

裏穴は飾釦として用ふることが多く、表穴は實用本位のものとして用ひられて居ります。

つけ糸

釦づけの糸は、絹物の場合にはカタン糸三十番、又は絹糸を用ひ、毛織物には麻糸、（普通には吊糸といふ）又はカタン糸の二十番、木綿物にはカタン糸二十番を用ひます。

釦の種類



第十二圖

つけ方

1、針に糸を通してから二重にして先を結ぶ。

2、表穴の時は釦穴の裏側から針を入れて表に出し、別の穴から裏に出して糸の結び玉に針を通して糸をしめ次に布の表から針を差し、布の裏に小さい針目を出して釦穴に針を出します。

この時布地と釦との間を四粍にします。

3、釦の穴の上は十文字又は二の字等に二回づゝかけ、布の裏は十文字になるやうにします。

4、布地と釦との間の糸は、一まとめにして堅く數回糸を巻きつけて、針をこの間に二三回通して際から糸をかけます。

5、裏穴は釦の上に糸をかけることはありませんが方法は同様にいたします。

閂留

閂留は縫目の綻び易い處にします。糸は穴かがりと同様に用ひます。

第十三圖

1、閂留をしやうとする縫目を中央にして、糸を横に三回渡しますと、表側も裏側も同様に糸がかゝります。

2、針を表側の横糸の端の上に出して、三本の横糸を一緒に一巻きして、横糸の下側から針をさして裏側の横糸の上へ抜きます。

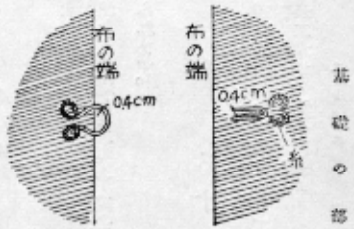
3、裏側も表側と同様に横糸の上の方に出た糸で、三本の横糸を一巻きして再び針を下側からさし、表側の横糸の上の方へ針を抜きます。

此の方法をくり返します。丁度糸は布に十文字に通つて居るやうになり、閂留めは布をはさんで裏と表とが縫ひつけられます。

スナップの附方

スナップは凸凹二ケで組合されて居りますが、かぶさる方に尖つたのを附けます。カタン糸二本で、第十四圖のやうに周圍の穴に二回づゝ糸を結み附けにします。

第十四圖



第十五圖　鈎ホックの附け方

鈎ホックの附方

ホックは上前に鈎の方をつけます。鈎は布の端から四粍給へて附け輪の方は、四粍出してつけます。第十五圖のやうに、付根の二つの輪をしつかりと糸でかがります。

ミシンについて

ミシンの種類

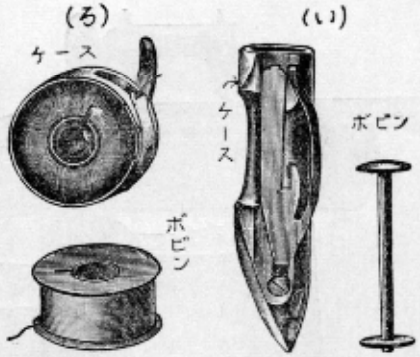
ミシンにはいろ〳〵の種類がありますが、家庭の裁縫用として一般に用ひられて居りますのは、シンガーミシン、ノーマンミシン、ハスクバナミシン、パインミシン、ホームミシンなどであります。これ等のミシンの中にも足踏もあれば手廻しもありますが、矢張足踏の方が實用に適つて居ります。手廻しのミシンは極く小さな物を仕立てるには宜しいですが、どうしても大きな物を縫ふことや速く縫ふことには適しません。

構造と各部の名稱

構造　ミシンの構造や使用法はどれも大體同じでありますから最も一般的に普及してゐるシンガーミシンの構造について説明してみます。

ミシンは丸舟型と蛇の目型の二種に分けることが出來ます、丸舟型といひますのは第十六圖(い)のやうに下糸を巻くボビンが細長くてそれを入れるケースが舟に似て居ります。又蛇の目型の方は(ろ)圖のやうにボビンが丸くて蛇の目に似てゐてそれを入れるケースも自然丸型に出來て居ります。

この二つを比較して見ますと、舟型の方は使用法が簡單で價格も幾分低廉でありますが、上下の糸の締り方が不平均になり勝てあるために自然に縫ひ上りがよくまゐりません。蛇の目の方は下糸の解け方が良くいきますから自然上糸との調子が合つて糸の締り方が平均にきれいに縫へますので紐物のやうな地薄物でも又毛織物のやうな地厚物にも適して居ります。



第十六圖

各部の名稱

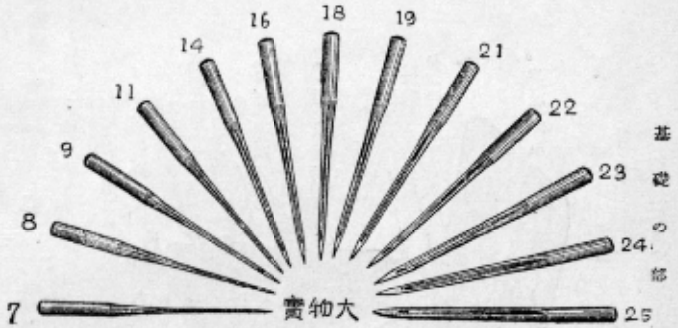
第十七圖

第十七圖、第十八圖を御參照下さい。

運轉法

ミシンを掛ける時の姿勢　腰を掛けるには眼が針の正面に向ふ位置に正しく足を揃へて掛けます。それから右手でハヅミ車を手前の方へ數回廻しますと、それにつれて踏板は上下に運動を起しますから、その運動につれて趾先と踵とで交互に踏板を動かしますと、自然に足だけで運轉するやうになりますから、これが圓滑に廻轉する事の出來るまで繰り返して練習して逆廻りしないやうに注意します、そして最初は針も糸も附けないで、所謂空縫の練習を充分しなければなりません。この練習が足りませんと本縫にうつりましても糸が切れて縫ふ

第十八圖



第十九圖

ことが出來ません。なほミシンは動搖するところへ置かないやうに脚車の下へは豪板を敷くことが必要であります。

針と糸

針と糸との關係は極く大切なことで、布の厚い薄い、又は軟かい地質、硬い地質などそれ〳〵の地質によつて、それに應じた適當なものを選ばなければなりません。(第十九圖は針の番號による實物大を示したものです)

針は普通十二番か十四番を使ひ、糸はカタン糸の六十番を使用します。然し地質の薄い物の時には針は九番を使ひ糸は八十番を使用します。

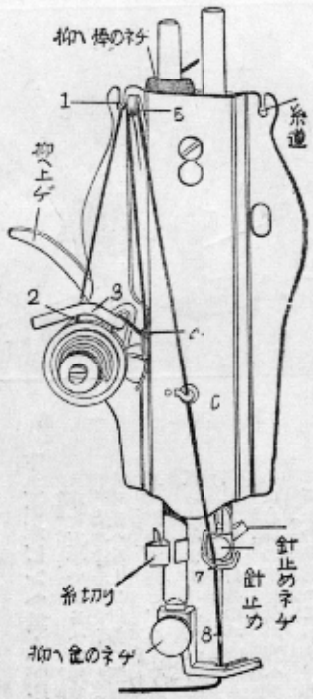
基礎練習

針のつけ方

ハズミ車を手前に廻して針棒が上にあがりきつた時止め、針止めのネヂを締め、ミシン針の面の平らな方を內側(右)に向けて針棒の穴に入れ、針止めネヂをかたく締めます。

直線縫の練習

ハトロン紙か模造紙を適當の大きさに切つてこれに直線を何本も引き、最初は糸をつけずにこの線の上を眞直ぐに縫ふ練習をします。ミシンと針足が大きければ運轉速力は早くなりますから、はじめの中は餘り針足を大きくせずに練習します。この針目の加減は右の方にある針目加減ネヂでします。ネヂを上に上げると針目は細かくなり、下げれば疎くなります。



第二十圖

曲線縫

矢張り前のやうな練習紙を用意して同じ間隔に正しく渦卷形に縫ひます。

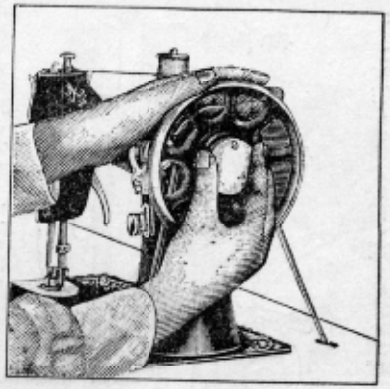
角縫

角を正確に縫ふことの練習でありまして、角のところは抑へ金をゆるめて縫ひます。

地質によつて抑へ金の壓力の加減

絹織物のやうな地質の薄いものを縫ふ時には抑へ金の壓力を弱くし、反對にラシヤ地のやうな厚なものの場合は壓力を強くします、然し實際には一つ〳〵の生地によつて幾分づゝの違ひがありますから手加減が大切であります。

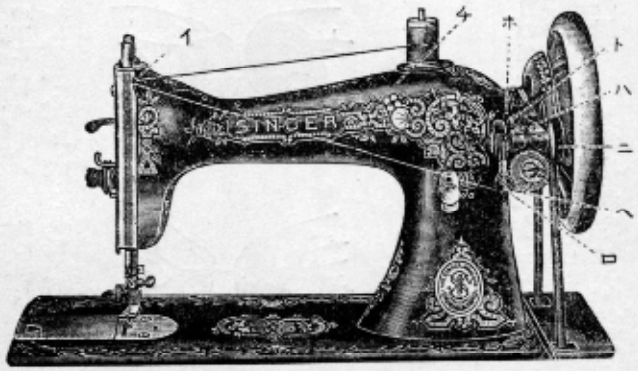
抑へ金の壓力の加減の仕方　抑へ金の壓力の加減は針棒の向ふにある抑へ棒の上の抑へネヂによつてします。左へ廻せばゆるんで壓力は弱くなります。普通抑へ金の壓力は抑へ棒を下した時抑へ棒の上とネヂの上とが平らになるのが適度であります。（第二十圖と實物とをよく參照して下さい）



第二十一圖

本縫の準備

下糸をボビンへ捲く順序　第二十一圖のやうにハズミ車を左手でおさへて外側にあるネヂ（運動止めのネヂ）を手前へ廻して針棒の運轉を止めてから、ボビンに糸を五六回手で捲き、心棒の根元にある小さな栓にボビンを嵌め込みます。それから糸卷を糸立棒にさして糸を引き出し左側の針棒の手前にある糸道（第二十二圖イ）にかけ、次に右側の糸卷具の方へ引張り、糸振の下の糸道（ロ）に通して上の糸道（ハ）にかけ、糸卷具の小車（ニ）をハズミ車の中心に押し下げ、掛金（ホ）を落してから機械を運轉すれば自然に糸振が左右に運動してボビンへ平均に糸が捲かれます。糸がボビンへ十分捲かれますと掛金は自然に外れて運動が自動的に止ります。



第二十二圖

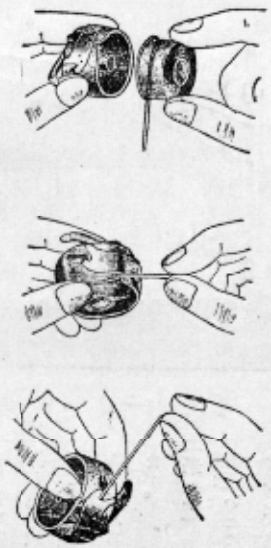
ケースにボビンの入れ方　第二十三圖のやうに右手にボビンの糸の端が上から手前に來るやうに摘み、左手にケースを持つてボビンを嵌め込み、糸端をケースの刻目に通して調子バネの下をくゞらせ、バネの下にある糸穴から下糸を引き出します。

シヤトルへケースを入れる方法　ケースの中央のバネを起して左手で摘み、蛇の目の穴をシヤトルの中心の栓へ押し込み、シヤトル受けの上の方の凹みのケースの角を入れて強く奥へ入れてからバネを放します。そしてケースから出てゐる糸はそのまゝ垂しておいて縫床の滑り板を閉ぢます。

上糸の通し方　右手でハズミ車を手前に廻して天秤を一番高いところまで上げ、次に腕の右上にある糸立棒に糸卷を押し、糸を左の方へ引き出して面板の左上の端にある糸道へ通し、更に糸を下へ引いて二枚の調子皿の間へ挾み入れて手前側に引き上げ、次に上糸調子の糸掛に引掛け、そ

大圖書

の下にある糸取上バネの鈎に通し、糸を引き上げて天秤の穴へ向側から通し、又糸を引き下げて面板の中程にある糸道に通して更にその下の針棒の端にある糸掛に掛け最後にミシン針の穴へ左側から右内側へ向けて通します。



第十二　下糸の引き出し方　左手で上糸の端を緩く取り、右手でハヅミ車を一廻轉しますと針が下つて下糸を抜つて出ますから、それを引き出して上下の糸を摘んで抑へ金の下へ並べて向側へ糸端を出しておきます。

この糸の掛け方に少しでも誤りがありますと糸が切れたり針目が飛んだりしますからよく順序を間違はないやうにかけます。

本縫の練習

針目の調子　基礎練習のところで述べたやうに針目加減ネヂの上下によつてします。一般に木綿物はあら目に、絹物、毛織物は細か目にします。

糸の調子　上糸と下糸とが布の中心で結び合つて、上糸と下糸の緊張の力がよく調和しますと、自然縫ひ目は表裏とも美しく整ふものであります、若し調子のよくそろひません時は大概上糸の調子を加減すれば直りますが、なほそれでも悪い時はケースの調子をも加減します。このケースのネヂは極く小さい物でありますからネヂ廻しも小さい物を使つて、徐かに捩ります。なほ小さい爲めに紛失し易い物でありますから取扱に注意したければなりません。

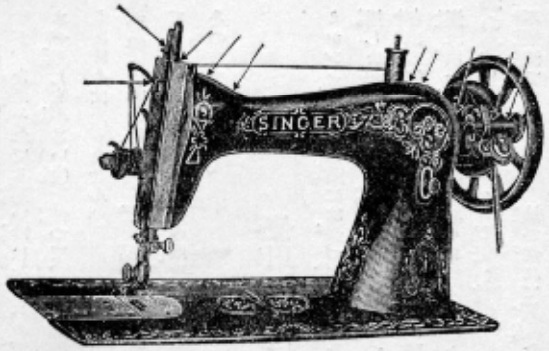
縫ひ終り糸の始末　縫ひ終りの時には針棒を一番上まで上げて、必ず上糸と下糸とを一緒に摘んで糸切に當てゝ切ります、縫つた糸の端は縫ひ目の中に入るものは一方へ引出して針に通し、二三回布の中をくゞらせてそのまま切ります。

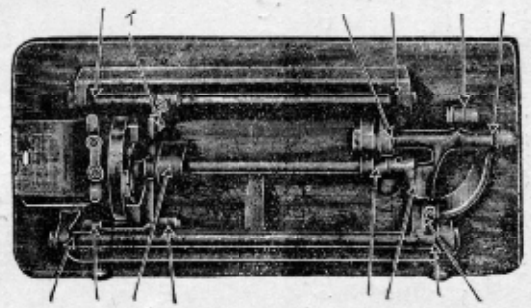
使用についての諸注意

ミシンを使用する前には先づ各部の塵を拂ひ、針や糸を揃へ、針目の大小や上糸下糸の調子等を調べてから使用します。又使用の後は各部の塵を拂つて油布巾で機械の大事な部分を拭つて置きます。滑り板の下に當つた各部の穴やその他摩擦するやうな所は時々油をさして數回迅速に廻轉して油が全體に行き渡るやうにし、外に溢れ出た油はよく拭き取ります。又時々機械を取り外して掃除をします。

油の注し方　ミシンの運轉を輕く滑らかにする爲めに油を注すことが必要であります。餘り度々注すことは不經濟でありますが、油が切れて異樣な音がするやうでは機械を損じますから仕事の前に一回位注すのが適度であります。ミシンに注す油は特別に製した鑛物性の油を用ひます。掃除用として純石油を使ふこともありま

すが、これは運轉を滑らかにする爲めでありません。





第二十四圖

から極めて大切なことであります。

油を注す部分は第二十四圖の矢印の孔へ極く少しづゝ注すのであります。ミシンの裏側へ注す時には調革を外して向ふへ倒し、ハズミ車を動かしながら注します。すべてミシンの掃除を良くし、手入を怠らないやうにすることは運轉を輕くして仕事の能率を高め、美しい仕事が出來、その上ミシンの保存もよく見た目も氣持のよい物であります

起り易い故障とその直し方

ミシンを使用してゐますとその間にいろ〳〵な故障が起きるものであります、その都度ミシン屋の手を煩はすことは不便でもあり不經濟でもありますから簡單な故障は自分で直し得る位の知識が必要であります。

上糸の切れる場合

1、上糸の掛け方順序の違つてゐる時、
　順序を正しく掛けかへます。

2、針の挿し込み方の足りない時、
　針の位置を直します、それでも直らない時は針棒を上げます、その仕方は面板止のネヂをゆるめて面板を外し、右でハズミ車を靜かに手前側へ廻し針棒を下げます。

3、用布と糸の釣合の悪い場合、
　前に掲げた表によつてなほします。

4、シヤトルに糸の引つかゝつた時、
　引つ掛つた糸をはづします。

5、糊氣の多い生地を扱つた時、
　用布に一寸蠟を塗つてから縫ひますか、太い針にかへます。

下糸の切れる場合

1、ボビンケースの糸の通し方の違ふ時、
　通し方を正しくなほします。
2、ボビンケースのネヂの締め過ぎの時、
　ネヂをゆるめます。

針足が飛ぶ時

1、上糸の掛け方順序の違つてゐる時、
　糸の掛け方を改めてなほす。
2、スプリングが正しく運動しない時、
　指先でスプリングの尖を軽く擦ね上げて見て隣の糸調子皿を左右に動かす時はスプリングの運動の不正確なのですから取りかへます。
3、針の位置が高すぎる時。
　針棒を下げます。
4、用布とミシンの釣合の悪い時、
　表によつてなほします。

針の折れる場合

1、針の位置が下過ぎる時、
　針の位置をなほします。
2、針が喉板の針穴へ正確に落ちない時、
　針棒を左右何れかへ静かに動かして穴の眞中へ針が這入る位置でネヂをしめます。
3、用布を針の運びよりも早く手で向側へ引きする時、
　引き方を加減します。
4、用布が何枚も重つてゐる場合、
　右手でハズミ車を手前へ静かに廻して針の通りを助けます。

縫ひ物が送られぬ場合

1、送り金の位置が低い時、
　送り金加減ネヂをゆるめてネヂの位置を下げて見ます、そして送り金が喉板の上へ出た時ハズミ車を静かに廻して適當に加減します。
2、抑へ棒の力の弱い時、
　加減ネヂを右へ廻してしめます。

シヤトルが動かぬ場合

1、シヤトルに糸が絡んだ時、

シヤトルネヂを兩方共抜き取つてシヤトル受を外して中の糸屑や塵をよく掃除します。

運轉が重くなつた場合

1、ベルトがブレーキカバーにふれる時、

ブレーキカバーの位置を少しかへます。

2、油が切れた時、

機械の擦れ合ふ各部分に油をさします。

以上のやうにミシンは非常に細かい組立てゝ出來てゐる爲め使用に無理がありますと故障が起りますから、絶えず手入れを怠らないで無理な扱ひ方をしないやうに注意しなければなりません。

ミシン縫の基礎

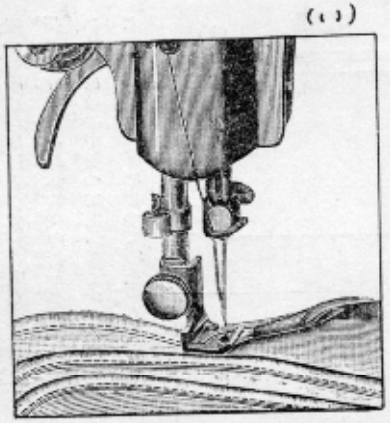
直線縫

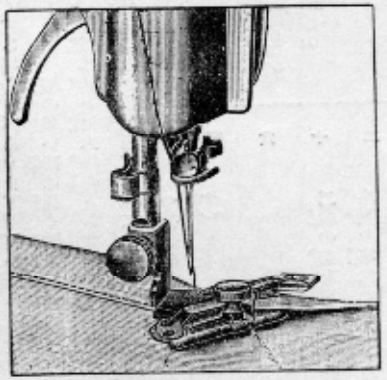
基礎縫の中で一番大切な縫ひ方でありまして、然も應用の範圍は非常に廣く、ミシン裁縫の大部分はこの直線縫によるのであります。突縫の時申しましたやうに眞直ぐに縫ふことの練習でありまして、最初慣れない間は附屬器具の定規を用ひるか又は布の上に眞直ぐに筐附をするかしてその上を縫ひます。熟練してからは押へ金の右側の端と布の端とが平行するやうに縫ひます。和服の運針練習と同じやうにこの直線縫の上手に早く縫へるやうになれば自然仕事が早く出來ることになりますから充分練習しなければなりません。

曲線縫

直線と併せて大切な縫ひ方であります、角ばらないで縫へるやうに練習しなければなりません。

三つ折縫

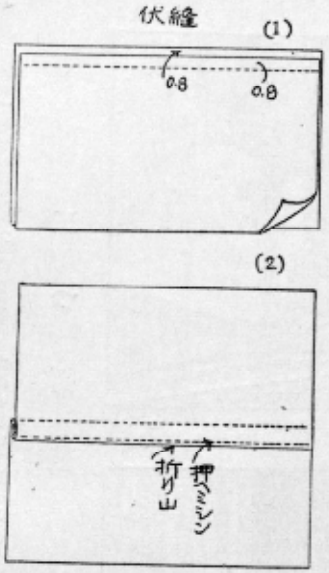




第二十五圖

三つ折縫は場所によつて幅を廣くする場合と、又狹くする場合とがあります。幅の廣い時は初め折り代を八粍折り曲げて、それから次の折を必要な寸法だけに折ります。幅の狹い時は極く狹く三つ折にします。これを縫ひますには手で折つて上からミシンをかける場合と、附屬器具を使ふ場合とあります。

この三つ巻はネチによつて幅を廣くも狹くも自由に縫ふことが出來ます。（第二十五圖（い）は三つ巻で、（ろ）圖は三つ折縫の幅を廣く縫ふ場合であります）

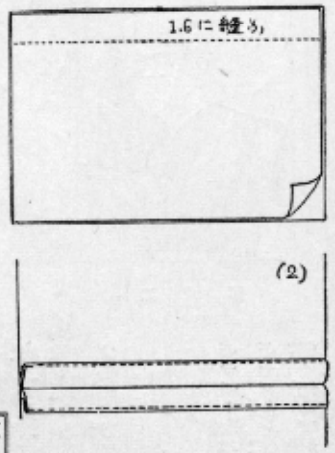


第二十六圖

伏縫

二枚の布を中表に合せて、一方の裁ち目を第二十六圖（1）のやうに八粍ずらせて、このずらせた布の端から八粍のところを縫ひます。そして（2）のやうに二枚の布をひろげて縫ひ代の多い方の布で縫ひ代を包んで押へミシンを折り山にかけます。

割縫

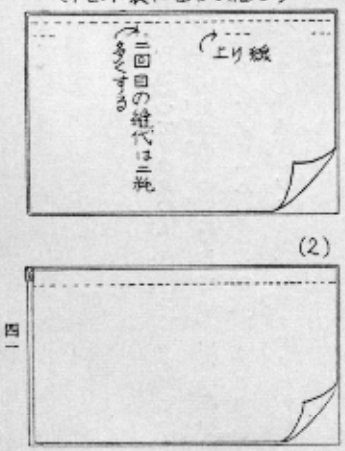


第二十七圖

二枚の布を中表に合せ、一糎六粍位の縫ひ代に縫ひます、そして布を擴げて縫ひ目を割り、裁ち目を八粍づゝ折り曲げて折り山に押へミシンをかけます。（第二十七圖參照）

袋縫

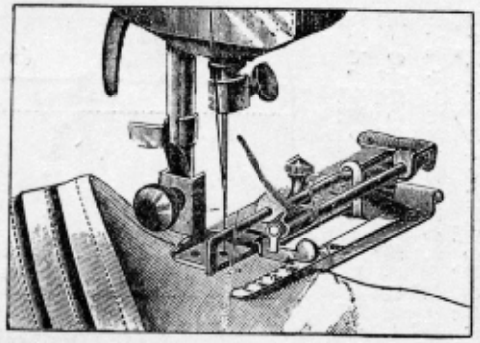
最初は第二十八圖（1）のやうに外表に布を合せて、全體の縫ひ代より二粍を取つてその殘りの寸法の半分を初めの縫ひ代として縫ひます。そして裁ち目のほつれを切り落して裏側を出して（2）のやうに所定の縫ひ代に縫ひ上げます。例へば一糎二粍の縫ひ代のある時は二粍を引いた殘り一糎を二分した五粍が最初の縫ひ代になつて、次に裏返してから七粍の



第二十八圖

深さに縫へば丁度一糎二粍の縫ひ代で縫つたことになります。

タックの取り方



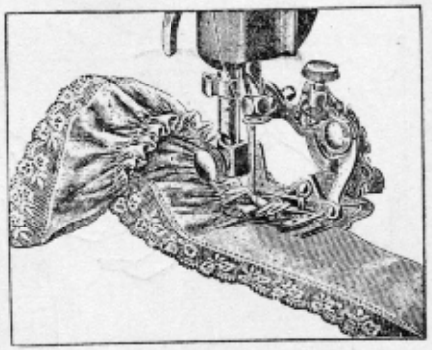
第二十九圖

布の折り山から計つてタックの幅を見計つてミシンをかけます。凡てタックはその出來上りの幅によつていろいろの名があります。例へばピンタックといふのはピンの細さにタックを取るのでさういひますし、八粍タックとか、一糎タックとか恆タックの幅をいふのであります。

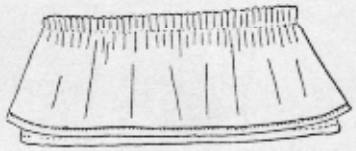
第二十九圖のやうに附屬器具を使つてタックを取る時は器具の向ふ側にある目の細かい度盛りで定め、折り山と折り山の間隔は手前の方にある目のあらい度盛りで定めます。

ギヤザーの取り方

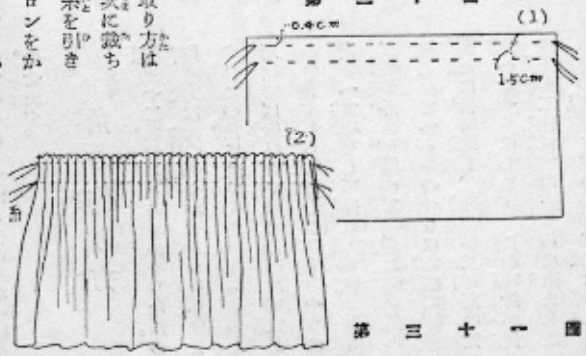
ギヤザー取の仕方は四通りあります。つまり第三十圖のやうにギヤダ金を使ふ時と、ミシンの針目をあらくして上糸の調子を強く締めて縫ふ時と、ミシンをかけてから下糸を引き締めて縮



ギヤダ金を用ひたもの



第三十圖



第三十一圖

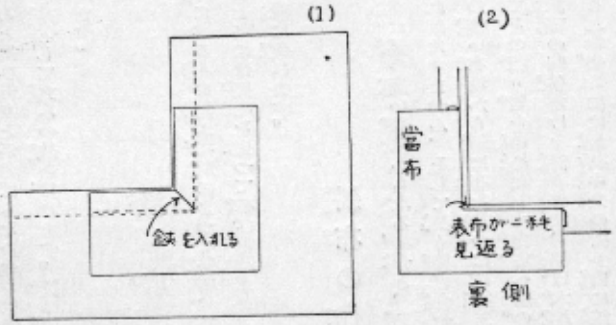
める場合と、又手縫でする場合とがあります、ギヤダ金を使はない取り方は第三十一圖のやうにどれも最初は裁ち目から四粍入つた所を縫ひ、次に裁ち目から一糎五粍入つた所を縫ひます。そして寸法通り縫つた上下の糸を引き締め、兩端を張り加減にして針で止め、裁ち目から八粍だけにアイロンをかけて落ちつかせます、この時ギヤザーを針で正しく整へながらアイロンをか

第三十二圖

けて平らにしてから他の布地へ縫ひ合せます。

角の作り方

第三十二圖のスタイルのやうな角の作り方は次のやうにミシンをかけます。この角は縫ひ代だけ裁ち切つただけでは縫ひ目がすぐほつれて穴があきますから第三十三圖(1)のやうに表側へ當布をして出來上り線よりも二粍位外側を縫つて、角に切り込みを入れてから(2)のやうに當布だけを裏側に折り返し、表布が二粍だけ見返へるやうにします。この時針が角の手前二糎位のところに來ましたら車の廻轉をゆるめて、前に申しま

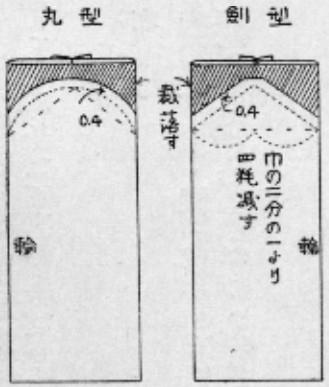


第三十三圖

したやうに抑へ金の壓力を弱くして眞角に針を運びます。

劍型、丸型の縫ひ方

主にバンドの先きやカフスに應用する縫ひ方であります。劍型は餘り先が尖らないやうに第三十四圖右のやうに幅の二分の一の寸法よりも心持短かく、幅の中央から出して劍型にします、劍型にするには縫つた角の縫ひ代を斜に裁ち落してから表へ返してよく揉み出すやうにしてアイロンをかけます。丸型の方は縫ひ



第三十四圖

始めと縫ひ終りとが角ばらないやうに消し縫にします。標はあらかじめ創型と同じやうにつけて圖のやうに斜の線を基として丸みの線を描きます。縫ひ代は四粍位にして裁ち落し表へ返して丸味を整へ仕上げのアイロンをかけます。

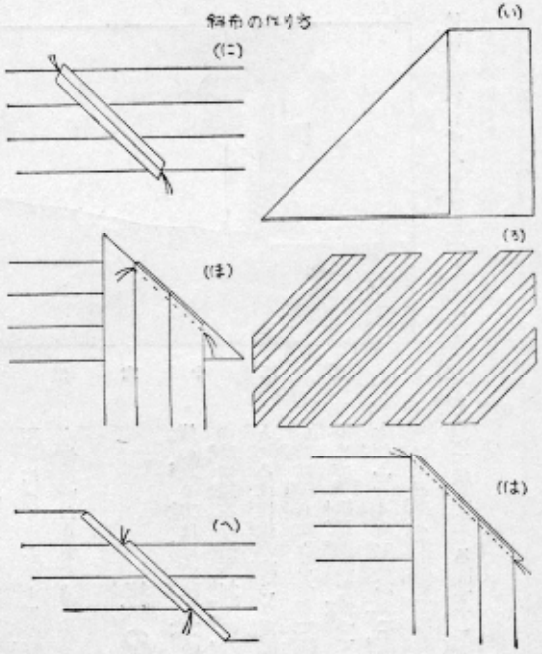
緣取り布

緣にする布は用ふ場所によつて斜布、竪布、横布と區別して使ひます。斜布は曲線のところに使ひ、延び易いところには竪布を使つて延びを防ぎます。又横布は袖附の縫ひ代とか脇の縫ひ代とかいふやうに目立たない所の緣に使ひます。

斜布の作り方

斜布は幅の廣い布地から取る場合と、又裁ち落しの小布から取る場合とがありますが、いつでも必ず眞斜でなければなりません、そして長く接ぎ合せる時は必ず布目通りに接ぎ合せます。

幅の廣い布地から斜に布を裁つには第三十五圖(い)のやうに三角に折つて中央に折り目をつけ、それから布を擴げてその折り目を中心にして左右へ斜の幅を計つて中央の線と平行に何本も線を引きます、斜布の幅は出來上り緣幅の四倍だけを計ります、標は木綿物の時は鉛筆でつけても宜しいですが、絹物には筆を使ひます。そしてこれを切るには最初中央の折り山に鋏を入れて布を三角形に切り離し、次に(ろ)圖のやうに三本づゝ幅をきと



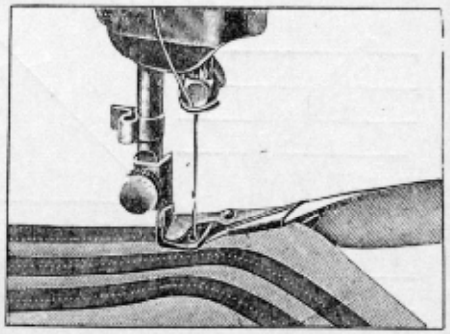
第三十五圖

めて裁ちます、それからこれを接ぎ合せるには接ぎ代だけ幅をずらせて接ぎその縫ひ代は割つておきます。

このやうにして幾本かを全部長く接ぎ合せ、最後に(ほ)圖のやうに兩端を接ぎ合せます、が、この時に限つて一幅分だけずらせて縫ひます、さうして鋏をこゝから入れて輪になつてゐる布を切り廻すと一本の長い斜布が出來ます。

裁ち落しの小布から取る時は先づ布目通りに折り目を竪横に入れ、これを目あてに斜を正しく折り目を附けてから布を擴げ、この折り目を中心にして幅の標をつけ

て幾本かの平行線を引き端面は、布目通りに線を引きます。この時は長さが不揃でありますから一本づゝ切つて、接ぐ時は四種だけずらせて縫ひ目は矢張り割つておきます。現今はバイヤステープの寛品がありますからそれを使用するのも便利であります。



第三十六圖

縁の取り方

縁の取り方は布の裁ち方の形によつて伸縮を加減します、直線の時は縁布を張り加減に附けます。又枠刺のやうに刺り込んだところは直線の時より更に心持強く張氣味につけます。スカラの時は平らになるやうに縫つて、縁布を延し乍ら丸みの縁を取ります。附屬器具を使つて縁取をすることもありますが、器具を使ふとミシン目が上に出て目立ちますから下着の類や、エプロンなど度々洗濯をするものにはよく使ひますが、上着の類には餘り使ひません。（第三十六圖は附屬器具を使つて縁取をする圖です）

地質による糸と針との定め方

地質	針（シンガー／ミシン針） 新番號	針（シンガー／ミシン針） 舊番號	糸（カタン）	（羽二重）
木綿類（厚地）				
小倉	14	2/1	40番	
ギヤラテヤ				
スレン				
斜子				
カツラギ	11	B	50番	
綿セル				
綿サージ				
木綿類（普通）				
ビケ	11	B		
スポンヂ、ポプリン				

トブラルコ ゼツフア ギンガム クレープ キヤリコ	9	0	40番 50番 60番 70番 80番
木綿類（薄地） ホーラルド フラツクソン フジエツト オーガンヂー ナインスーク マドラス ボキル	9 8	6 00	80番 90番 100番 120番

ラシヤ類 メルトン ヘルホームスパン ファー、ライク モヘア グレン、チエック オテロ トルコブルーン ベローア ブロードクロウス ビロード	16 14 11	1 $\frac{1}{2}$ B	30番 40番 50番 60番 70番 80番
セル類 ウオーステツド			普通の羽二重糸及び地縫糸

パンピース	11	B	50番 60番 70番 80番
マロ・ケイン			
ギヤバヂン			
カシミヤ	9	0	
サーヂ			
オツトマン			
ネル類			
本ネル	14	$\frac{1}{2}$	普通の羽二重糸
裏毛ネル			
オンブル			
イタリア	11	B	50番 60番 70番 80番
フランネル			普通の羽二重糸
絹地類			
ジョーゼット			

シヤムーズ			
紋バレス	9	0	
クレープデシン			
フランス縮緬			
輸出羽二重	8	00	
朱子羽二重			
富士絹			普通又は細き羽二重糸

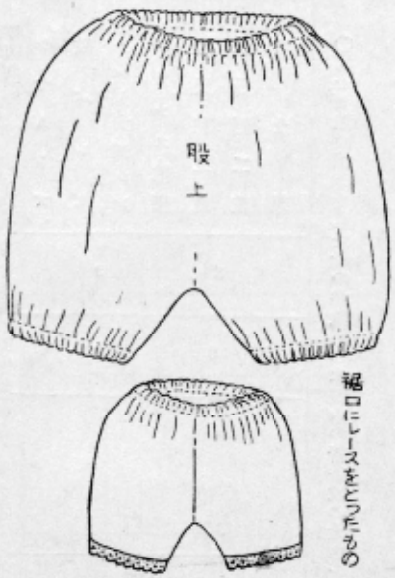
○第十九圖に掲げました針の番號は、本表中の新番號の太さを示したものであります。

二、下着の部

ズロース

用布の地質

綿ネル、綿メリヤス、キャラコ、絹、ネンスーク等季節によつて適當に用ひますが、肌付のものですから毛織物はさけます。



第一圖

型紙の作り方

採寸 着用者の身體を元として腹廻り、臨丈（上は腹廻りの下から、下は十歳以下の小兒ならば上着の丈は膝裏までを標準としますから、上着より六、七糎短く、十歳以上の場合にはそれよりも四糎ぐらゐ長く、大人用の場合には各自の好みにより適

當に）腰廻りを計る、これが基礎の寸法となります。

製圖

1、型紙用紙を縦二つ折にして、輪を左に第二圖のやうにおき、輪の方で基礎臨丈を標し、幅は腰廻りの四分の一に四糎の弛みを加へたものを標して長方形を描きます。

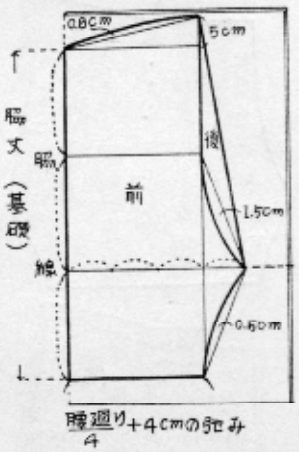
2、臨丈を三等分して圖のやうに横線を引き下の線を股上、股下の區分線とします。

3、下の區分線を三等分して、一つの長さ、（即ち區分線の1/3丈）を右外へのばします。その點から裾口へ斜線を引き、斜線の中央で五粍削り落します。

4、股上の中央から區分線の右端へ斜線を引き、中央で一糎五粍削り落します。これが前中心の線であります。

5、初めの長方形の右の縦線を上へ五糎のばし、それから臨丈の頭へ斜線を引き、中央で八粍の丸みをつけます。

6、五糎のばした點と區分線の右端へ斜線を引きます。これが後中心の線となります。

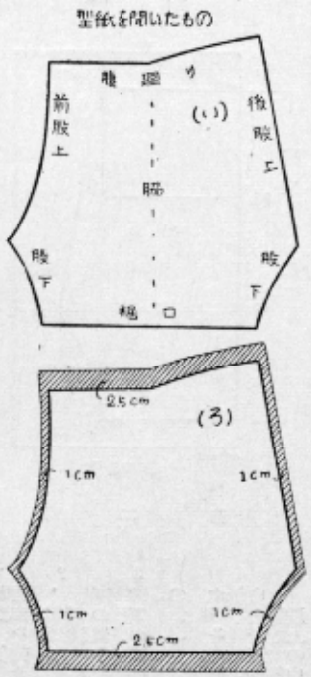


製図

第二圖

型紙の數方

後型の太線の通りに、型紙を切つてから型紙を擴げて前型一枚を太線の通りに切りますと、第三圖（い）のやうな型のものになります。



第三圖

布の數方

用布を縦に二つ折にして、（ろ）圖のやうに、腰廻りと裾口には二經五糎、その他には各一糎づゝの縫代をつけて裁切ります。

縫方

前後の股上　十分のばして袋縫にします。

縫目は後は背縫と同樣に折り、前は其の反對に折り返します。また地質によつては割縫、伏縫にすることもあります。

股下　同樣に袋縫にします、折目は前身へ倒します。

腰廻り　三つ折縮にします。初め八糎折り曲げて一經二糎幅の三つ折縮にします。但しゴムテープを通す穴だけ縮け殘しておきます。

裾　一經五糎幅の三つ折縮にします。ゴムテープを通す穴をあけることは腰と同樣です。

仕上げ　縫ひ上つたらば、アイロンで仕上げをして、腰廻り、裾口にゴムテープを通します。

附

1、ヅロースは肌付のものですから、あまり裝飾を加へることはいたしません。ゴムテープで裾口を縮めない型のものゝ時にはレースをつけます。この時は裾の縫代を一糎位とし先にレースを付けてから、股下を縫ひ合せます。

2、腰廻りのゴムテープの長さは、腰廻りより一割五分短く、裾口はその二分の一で脚に合ひます。

3、運動用としては黑毛繻子、白ギンガム等を用ひます。

運動用には、裾口は勿論ゴムテープでくつゝて、ニッカース（運動用の下穿）のやうな心持で、幅も丈も一層ゆつくりいたします。

シャツ

用布の地質

天竺木綿、キャラコ、メリヤス、綿ネル、晒木綿、縮等の白。

型紙の作り方

採寸　着用者の身體を元として、

背丈（頸の付根から腹廻りまでの寸法）
胸廻り（乳の上の所で胸の廻りの寸法）
衿刳（上着より大きく、約一糎外廻りをする）
身幅（上着より綴みを少くする）
袖幅（上着より一糎つめる）

1、型紙用紙を四つ折として先づ輪の方で背丈に一糎加へた寸法を標し、次に胸廻りの四分の一を標して長方形を作ります。

2、上着の衿丈を計つてそれよりも長くならないやうに衿丈の標をつけます。尙袖丈は背丈の二分の一といたしますから、第五圖（いのやうに線を引きます。

3、袖下の線の所で胸廻り四分の一の點線から右へ四糎の弛みをとります。

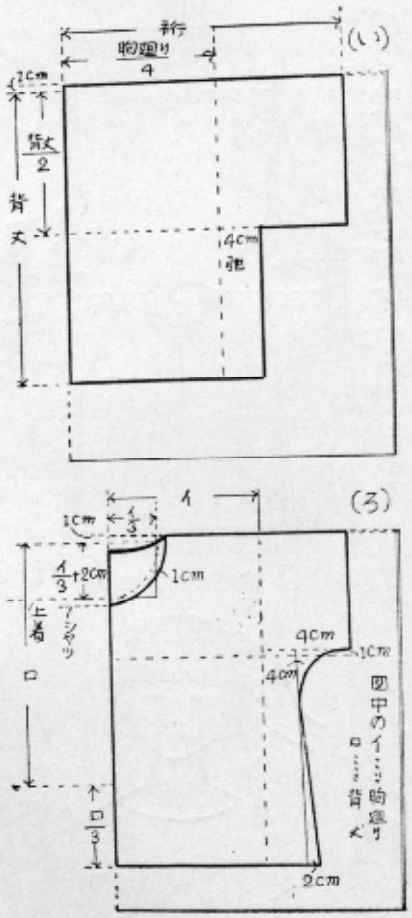
以上で（い）圖の原型が作れました。

出来上り圖

第四圖

4、次に背丈の三分の一を（ろ）圖のやうに伸して着丈といたします。

5、脇は裾口で二糎出し、袖口では圖のやうに一糎とつて、脇の下では四糎の丸味で刳つておきます。



第五圖

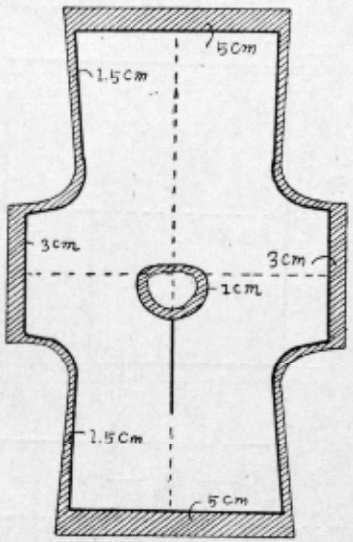
6、衿刳も圖のやうに上着よりは一糎づゝ大きく刳ります。

裁方

型紙を用布にあてゝ第六圖のやうに、周圍に縫代をとつて裁ち切ります。

衿刳には斜布をつけますから、一糎の縫代をとります。

前明きは頭廻りの寸法から衿刳を引いて殘りだけ明けます。つまり衿刳と前明きのところから頭が出ればよろしいのですからこれで充分です。頭廻りは圖のやうに計ります。



頭廻りの計り方

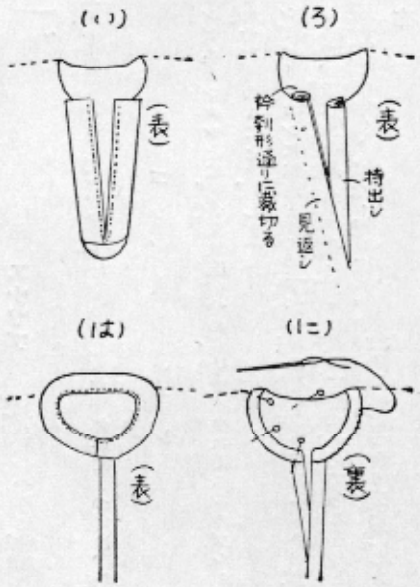
第六圖

持出し、見返し及び斜布は脇の殘り布を利用いたします。

縫方

前明き　前明きには下前に持出し布を、上前には見返し布をつけます。これは脇の裁ち落しを利用いたします。

この布は續けて用ひますので幅四糎、丈は前明の二倍に三糎を加へた寸法を用意します。丈が足りない場合には接ぎ合せて用ひます。

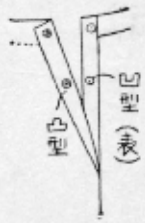


第七圖

見返しと持出しは幅一糎五粍、縫代は五粍とし、第七圖(いのやうに前明きにつけます。次に見返しと持出しの方へ一粍のきせをかけ、裏の方へ五粍の折代をとつて(ろ)圖のやうにまつりつけます。

衿刳　衿ぐりは斜布の見返しをつけます。これは伸縮自在になるために用ひますので、衿刳に合せて、斜布をのばし、(は)圖のやうに、中表に衿刳と合せて、持出し布の端からぐるりと廻して付け、折りきせをしないで裏にかへして(に)圖のやうにまつります。

脇縫　袖下と脇との間の刳は出來るだけ淺く少々伸し加減として袋縫にします。



第八圖

袖口　三つ折縮又はきつり縮といたします。

裾口　裾は折込み一糎、折返し四糎としてきつり縮（或は三つ折縮）にします。

スナップ　第八圖のやうに前明きの所へ上から八糎おき位に二個乃至三個をつけます。

以上で出來上りましたから仕上げをいたします。好みによつては、前を全部開いてもよいと思ひます。

コンビネーション

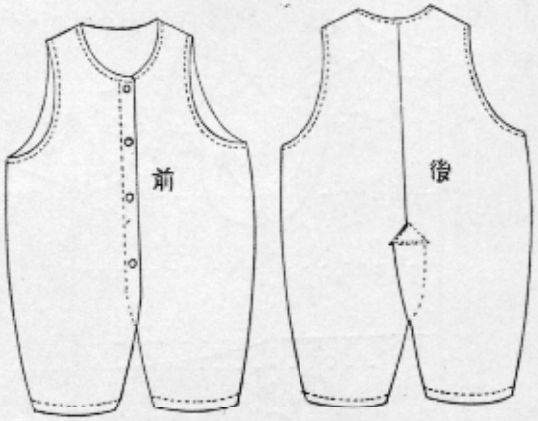
コンビネーションとは組合又は組合せの意味で、ウエーストルブルーマース、又はウエーストルヅロースを接ぎ合せたものゝことを申します。

コンビネーションには前も後も上下が一枚の布で出來てゐるもの、前だけが一枚の布で、後は上下別になつてゐるもの、及び上半身と下半身と別々に裁つて縫ひ合せてあるものとがありますが、男女兒用にも婦人用にも亦男子用にも向く、上下一枚の布で出來てゐるものゝ作り方を記します。

用布

夏季用　縮、キヤラコ、ローン、ナインスーク、天竺木綿、富士絹。

冬季用　綿ネル、フランネル。



第九圖　出來上り圖

製圖の仕方（上下續いたもの）

必要寸法、上胴、背丈、身丈（女兒物は洋服より四糎短く、婦人物は膝頭まで）

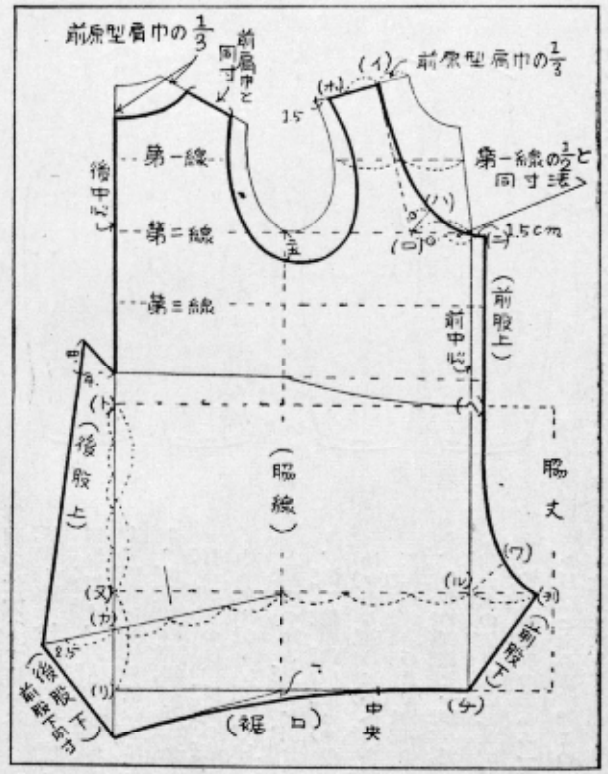
1、原型を型紙用紙の上にピンで止めて置きます。

2、前原型の肩幅を三等分して第十圖のやうに衿刳の標をつけ、原型の第一線の二分の一と同寸だけ前中心から第二線上にとつて（ロ）とし、肩（イ）と結びつける點線を引きます。

3、第二線の前中心と（ロ）の間の二分の一と同寸だけ（ロ）から斜めに（ハ）へ持ち出し、（イ）（ハ）を通つて第二線の前中心まで衿刳の線を引きます。

4、今の衿刳線を一糎五粍圖のやうに持ち出し、前胸上の重り代とします。

5、前肩の袖刳の方から一糎五粍とつて（イ）（ホ）の間を肩幅と定めます。この一糎四粍をとることは年齢の如何にかゝわらずこの裁方はすべて同寸法を採るものと致します。



第十圖

6、後肩幅は原型の衿刳の方で、前肩幅の三分の一をとり、それから前肩幅と同寸に後肩幅をとつて、袖刳の標を附ます。

7、袖刳は脇で二糎五粍原型より深く標をつけ、前後の肩から、原型にならつて袖刳の線を描きます。

8、後衿刳は、後中心で前原型の肩幅の三分の一と同寸をとり、原型にならつて衿を刳ります。

9、原型の前中心と後中心の直線及び脇線を垂直に脇丈寸法よりやゝ長めに引きます。

10、原型の前下り(ヘ)から裾線に並行して點線(ヘ)(ト)を引き、それから下へ脇丈寸法だけ計つて(チ)(リ)の線を引きます。

11、(ト)(リ)の三分の一(ヌ)から、(ヘ)(チ)の三分の一(ル)に直線を引き、脇線との交叉點から(ル)迄の間を三等分して、三分の一だけ延して(ヲ)へ直線を引きます。

12、(ル)(ヌ)の四分の三を(ル)から斜めに出し、前衿刳の持出しから(ワ)(ヲ)へ圖のやうに前股上の曲線を引きます。

13、(ヲ)(チ)の間に斜線を引きます。

14、後中心の(ト)(ヌ)の五分の一だけ(ヌ)から(カ)へとり、(カ)から(ル)と脇線との交叉點へ斜線を引き、その斜の線の三分の一の寸法に、二糎五粍を加へたものを(カ)から斜線なりに伸して後股上の持出しとします。

15、後中心の裾線を左へ四糎伸し、これから、(カ)の延長線へ斜線を引き、上部で斜線のまゝ四糎のばします。

そして圖のやうにそこから裾線と後中心線の交叉點へ斜線を引きます。

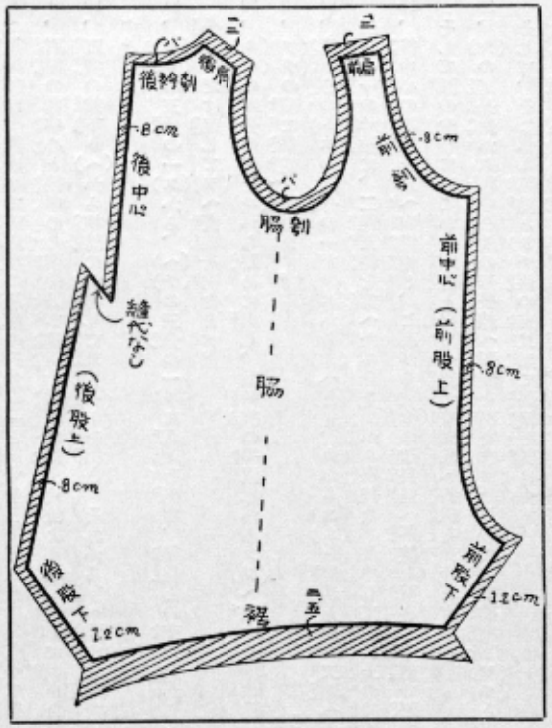
16、(カ)の延長線から後中心(リ)の延長線へ斜線を引きます。その長さは前股下(ヲ)(チ)と同寸にいたします。

そして、そこから脇線とり(チ)線の交叉點に斜線を引きます。

17、この線の端から脇線の一糎下つた點へ曲線を引き、前幅の中央までのばして圖のやうに袖口線を引きます。

下着の絵

18、以上周囲の太線を型紙といたします。



第十一圖

材料の積方

用布 六十八糎幅にて

身丈十15糎×2

藤田市

附属品 直径一糎の貝釦五個。

縫代の附け方

第十一圖のやうに前後の肩及び前後の股下は一糎二粍の縫代に、裾口は二糎五粍、その他は全部八粍とります。

以上の寸法にして、二枚裁ち切ります。

縫方

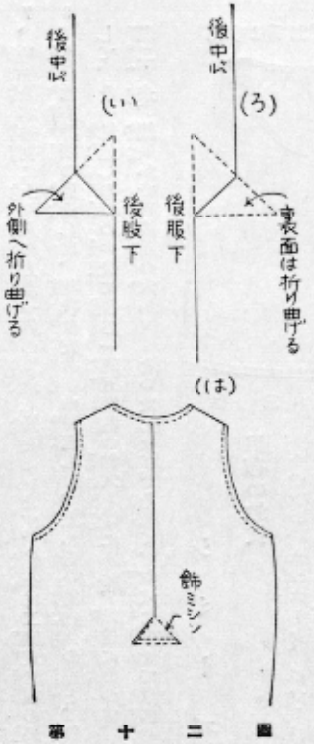
1、前後の股下を合せます。薄地ものゝときは袋縫に、厚地ものゝときは割縫いたします。

2、裾を折り返してミシンをかけます。但し裾へゴムテープを入れますときには、テープの通し口を二糎ほどミシンをはづしてかけます。

3、前中心の股上の上端から後股上の三角の處まで中表に斜布を合せて八粍の縫代にミシンをかけます。そして斜布は裏面へ折り返して見返しとし、其の端を八粍程折り込んでミシンをかけます。

斜布は薄地ものゝときは身頃の裁殘り布で、地厚のものゝときは、別布の薄地のもので作ります。

4、後中心の背縫は地厚ものゝ時は割縫か伏縫にいたします。地薄ものゝ時は袋縫として、男物は左身頃へ、



第十二圖

女物は右身頃へ折り伏せておきます。

5、背縫の下部の三角のところは、女物は左身頃の三角を外側に、右身頃の三角は裏側へ第十二圖（いろのやうに折り、二つを合せては圖のやうに飾ミシンで抑へておきます。男物のときは、反對にして左身が上になるやうにいたします。

6、左右の肩を合せます。袋縫または伏せ縫といたします。

7、衿刳及び袖刳に上り八粍乃至一糎の見返し縁をとります。縁布は二糎五粍幅の斜布を用ひます。

8、女物は右身頃の見返しに、男物は左身頃の見返しに、上から一糎内側の處と、股下の縫目との間を四等分して、その見返しの幅の中央に長さ一糎五粍程の釦穴を横にあけ、地質によつて、カタン糸の三十番、又は羽二重糸、絹糸かで五箇所の穴かがりをいたします。そして、釦穴に合せて貝釦をしつかりとつけます。

第十三圖　シミーズ

用布の地質

キャラコ、ネンスーク、ジャージ、晒木綿等。

用布と附屬品

用布はキャラコ巾で一丈半、スナップ二個。

製圖の仕方

今迄は一つ〳〵簡單な型紙をその場〳〵で作りましたが、こゝでは正式の原型を作つてそれから製圖をする仕方を揭げます。

第十四圖

原型は各自一つ〳〵作つておきますと、すべての洋服に役立つものですから十三頁の方法でまづ原型を製圖いたします。

1、製圖した後の原型を他の紙に寫します。次に原型の背丈よりも下へ十糎伸します。それから右へ裾線を引いて、原型の脇の線を裾の線まで下ろします。これで原型よりも丈だけが十糎長くなつた型になりました。

2、原型の衿刳幅を三等分して、その三分の一をイとし、このイと同寸だけ後衿刳の中心でとり、肩幅のイまで第十四圖のやうに刳ります。

3、原型の肩幅の三分の一をシミーズの肩幅とし、脇で二糎おとして、袖刳線を引きます。

4、裾幅は二糎攝げます。そして脇の線は脇で直角になるやうに切上げます。

5、前の原型を後と同じやうに寫します。

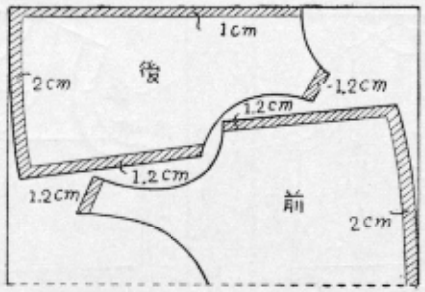
第十四圖

前を前下りの線から十糎長くし、脇の線も伸して裾の線を引きます。

6、肩幅を三等分し、前刳は原型の第二線まで下げて衿肩から平らに刳ります。

7、後肩幅に合せて、前肩幅をとり、脇は二糎落して袖刳を引きます。

8、裾幅は脇の線から二糎擦げます。袖刳から斜線で脇の線を引きます。後脇丈と合せて切上げをつけます。



第十五圖

布の裁ち方

用布を縦二つ折として、その上に型紙を第十五圖のやうに、前型の前中央を用布の輪の方にあて、後型の背は耳の方に置いて、それぞれ圖のやうに縫代をとつて裁ち切ります。

幾り布で見返しと持出しを取ります。

縫方

1、背を刺縫にします。

2、右の肩及び脇を袋縫にします。

3、左肩の前身に見返しをつけ、後身の方に持出しをつけます。幅は一糎五粍といたします。

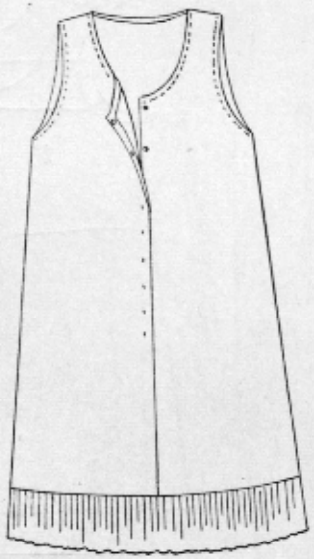
4、衿刳、袖刳に出來上り八粍の見返しをつけます。

5、裾は一糎五粍幅の三つ折り縫といたします。

6、肩へスナップをつけて出來上りとします。

スリップ（その一）

スリップは和服の長襦袢に相當するもので、女兒並に婦人のおもに夏季用の下着であります。第十六圖のやうにシミーズを長くしたやうな型のものや、また圓筒型をして、肩を襷で吊つたものたともあります。そして、レースなどの裝飾をほどこします。



第十六圖

用布の地質

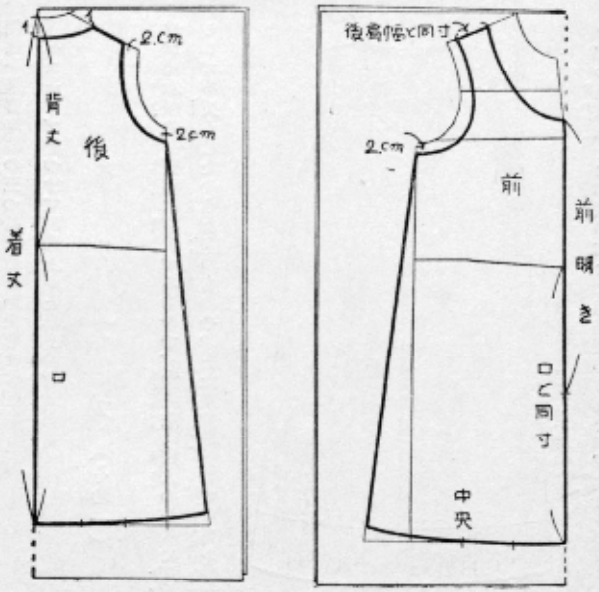
キャラコ、ネンスーク、富士絹。

用布と附屬品

キャラコ幅で出來上り丈に上下の縫代を加へた丈、飾りレース編廻りの一倍半、スナップ。

製圖の仕方

スリップの出來上りは洋服の丈より四糎短かくします、故にレースなどを附ける場合には、用布の着丈はレ



第十七圖

1ス幅を除いたものになります。

1、型紙用紙を縦二つ折にしてそれに後型の原型を寫し、着丈を計つて、背丈をのばします。この伸した丈の寸法を(ロ)といたします。脇の線も同様に下し、裾の線を引きます。

2、原型の肩幅を三等分して、その三分の一(イ)と同寸法を後の中心で第十七圖のやうにとります。

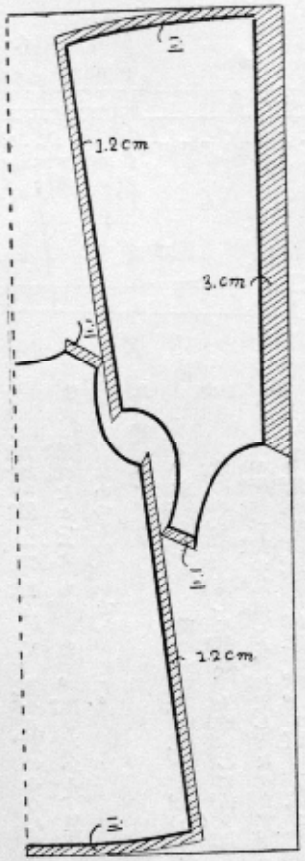
3、原型の袖刳で二糎をとり、脇で二糎おとして袖刳を引きます。

4、裾は三等分して、その一つだけを脇へ出し、袖刳へ斜線を引いて脇の線とします。

5、裾は脇で直角になるやうに切上げますと圖の太線のやうな型になります。

6、前原型を寫して、前下りから下へ後型の(ロ)と同寸法を引きのばします。

7、原型の肩幅を三等分し、原型の第一線と第二線の中間へ、圖のやうに原型の前ぐせにならつて前衿刳を引きます。



第十八圖

8、前肩幅は、後肩幅と同寸にします。

9、袖刳を脇で二糎おとし、原型の袖刳にならつて線を引きます。

10、後裾幅と同様に前裾幅を定めてから、脇の線を引き、次に前脇丈は後脇丈と同寸にして多いだけ裾を切上げます。

げます。

11、裾幅の中央から臨丈で線の上で直角になるやうな斜線を引き、角をおとして圖のやうに仕上線を引きます。

12　前明はロ線の二分の一の處まで明けます。

裁方

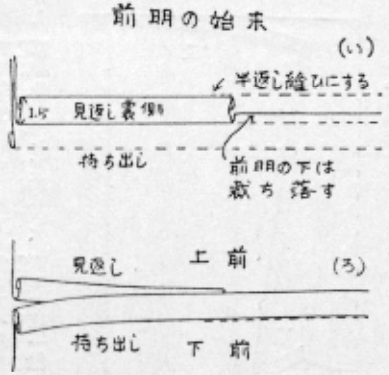
用布を縦に二つ折として、第十八圖のやうにおき、周圍に縫代をとつて裁ち切ります。殘り布から、見返しをとることはいつもの通りであります。

縫方

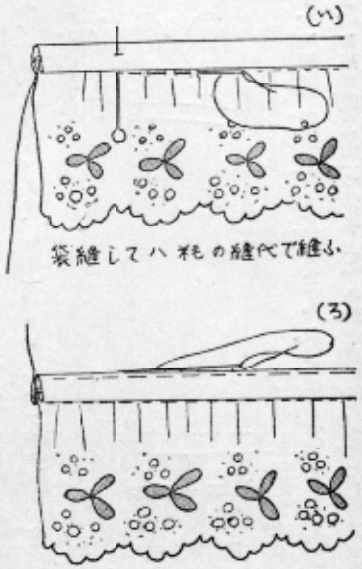
1、前明の始末　前明から下は第十九圖(い)のやうに、左右の中心を半返しに縫ひ、上前(右)に折り返します。この縫代が前の見返しと、持出しとなります。

2、前明の部分は、上前は縫目の山から裏に折り、二糎幅の見返しにし、下前は縫合せた處から二糎先を折山として裏に折り返し、持出しとします。

3、(ろ)圖のやうに、前明下だけ見返し布の內側を切り落し、左右を重ねて縫でおさへ、八粍位の針目でまつり紐をします。



第十九圖



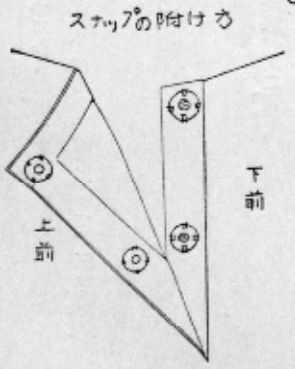
第二十圖

次に前明どまりの處で表から見返しの幅だけ本返し縫ひでとめておきます。

4、肩及び臨　袋縫にして、前に折り返します。

5、袖ぐりと衿刳に出來上り八粍幅の見返しをつけます。これは斜布を用ひ、後でまつり紐でおきます。

6、裾はレースをつけます。きゞレースの兩端を縫ひ合せ、縫目を割り、端は折つてまつり紐でおきます。次に裾廻り幅に合せて縫ひ縮め、各々表を出して四粍の縫代で縫ひ合せ、身頃の方に折返し、次に縫ひ代を表の布で包み第二十圖(い)のやうに折り、更に先に折つた折り山の直ぐ下の處を縫ひます。針目は小針で



第二十一圖

處々に返し針をします。

次に(ろ)圖のやうに再び身頃に折つて襟で縫代をおきへ袋になつてゐる折山をまつります。

7、スナップを第二十一圖のやうに前明につけます。凸形は上前に、凹形を下前につけて、三十番位のカタン糸でとぢつけます。

スリップ（その二）

用布の地質

キャラコ、ナインスーク、ローン、クレープ、フヂエット、富士絹、羽二重等。

用布と附屬品

出来上り圖

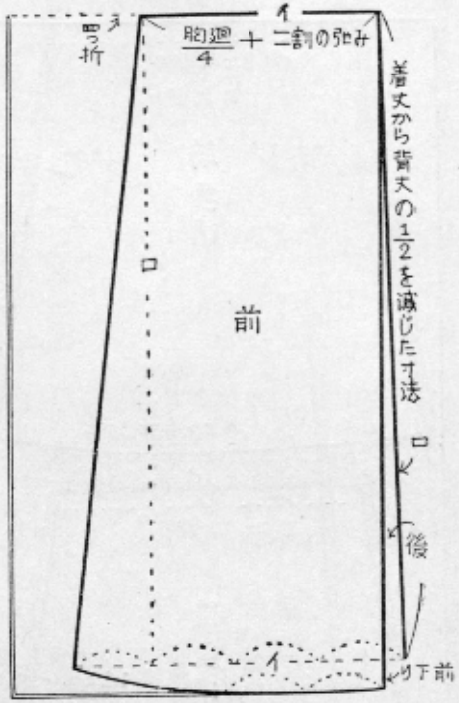
第二十二圖

キャラコ幅ものにて着丈から背丈の二分の一を引き、それに折返しを加へたものを二倍し、前下りを加へたものが用布の總丈となります。附屬品は要しません。

製圖法

1、胸廻り、背丈、着丈を計ります。（着丈は下着の場合には洋服の丈よりも四糎程短かくいたします。）

2、型紙用紙を縦二つ折として、それを更に横二つ折にし第二十三圖のやうに置きます。



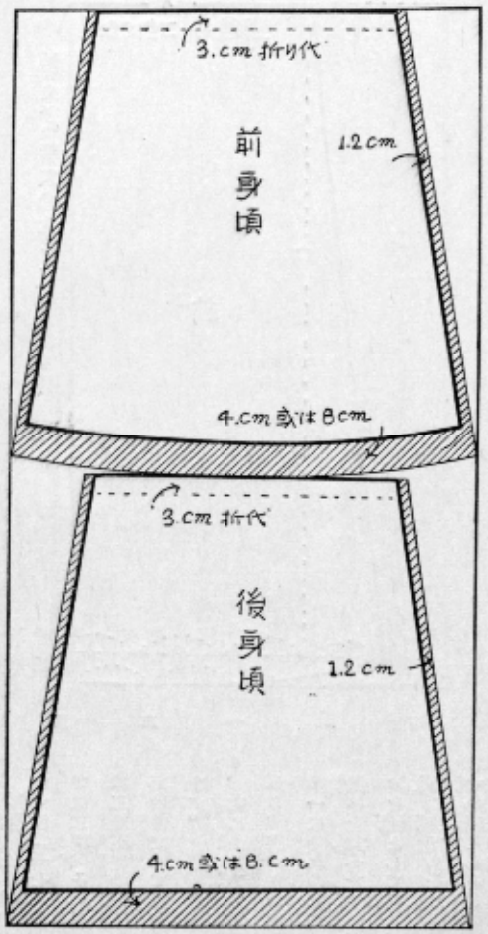
第二十三圖

3、右の輪の方で、後身となる下の紙へ、着丈から背丈の二分の一を減じた殘り丈の寸法を標し、上の紙即ち前身の方は、前下りの寸法（十七八歳までは二糎、それ以上は二糎五粍の前下り）だけ伸ばして標をします。

4、次に上の方で右端から、胸廻りの四分の一にそれの二割の弛みを加へた寸法だけを幅として標し、下の方でもそれと同寸の幅にしるしをして直ぐに點線のやうに線を引きますと長方形が出來ます。

5、次に下の紙ロ（イ）線の三分の一を左にのばし、上の（イ）線へ斜線を引き縫といたします。

6、前の裾口は後の裾口の二分の一だけ右の端から眞直にして、あとは脇の線に斜線で連ぎますと、圖のやうなものになります。



第二十四圖

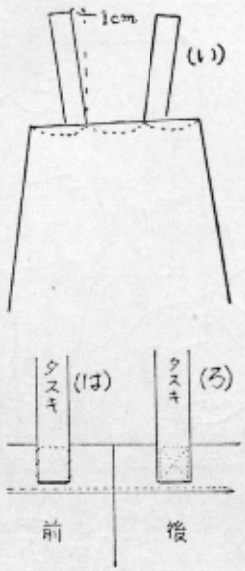
丁度前身の方は前下りだけ多いのみで他は後布と同樣になります。

裁方

第二十四圖のやうに周圍の縫代をとつて、上端には三糎の折返し代を附けます。

縫方

1、兩脇を袋縫に致します。



第二十五圖

2、上端と裾の折返し代とを折り返してミシンをかけるか或はまつり附けておきます。

3、川布の殘り布から幅五糎長さ四十糎のものを二枚たち、二糎幅の襷を二本縫ひ上げます。

4、身頃に襷を附けます。

襷は身頃の上端を三等分して、其の外側につけますが、第二十五圖(い)のやうに上の端で一糎ほど外側へ斜に曲げます。尙丈は二つ折として背丈の二分の一よりも二糎程短かく致します。

附け方は後部の位置の裏面に、襷の端を二糎程かさねて、(ろ)のやうに縫ひつけ、前の方は(は)のやうに縫ひつけます。もし襷が長過ぎた場合でもその餘分は切りとらずに其のまゝ縫ひつけておき、何時でも長短の加減が出來るやうにしておきます。

男女兒用アンダー、ウエア

これは二三歳ぐらゐから十二三歳位までの下着で、男女兩用に用ひられ、第二十六圖のやうに上下が釦でつないでありますから、下穿だけを度々とりかへることも出來ます。

チョッキとブロース

チョッキとブルマース

第二十六圖

チョッキとブロース又はブルーマースの一組で、手輕に作れます。

用布の種類

夏季用　綿、キャラコ、ネンスーク、ベニス等。

冬季用　フランネル、キャラコ、ギャラテヤ、ネンスーク等。

附屬品

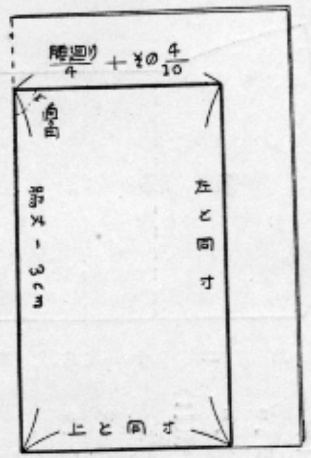
チョッキとブロースの一組には、直徑一糎の貝釦三個乃至四個、直徑一糎五粍の貝釦或は角釦四個、レース（衿と袖、及び裾の周圍の合計寸法）

同ブルーマースにはゴムテープを背丈の約二倍。

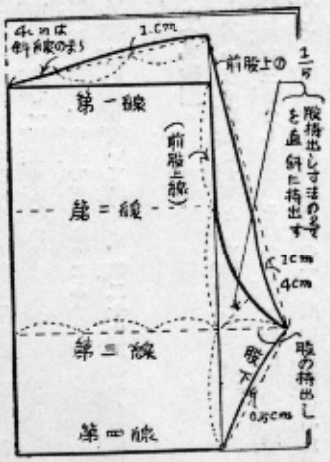
先づ基礎寸法として左の寸法を計ります。

1、胸廻り、　2、腰廻り、　3、背丈、　4、着丈。

型紙の作り方



第二十七圖



第二十八圖

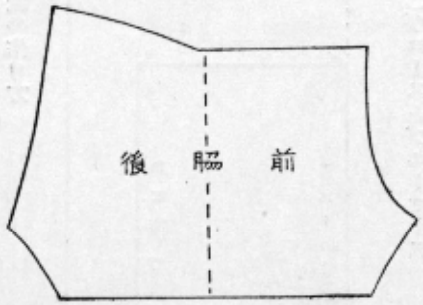
(一)ブロースとブルーマース

1、製圖用紙を縦二つ折としてその上に第二十七圖の如く基礎線を引きます。

2、第二十八圖の如く基礎の長方形を横に三等分して點線を引きます。

3、第三線を三等分してその1/3だけを股の持出しとします。

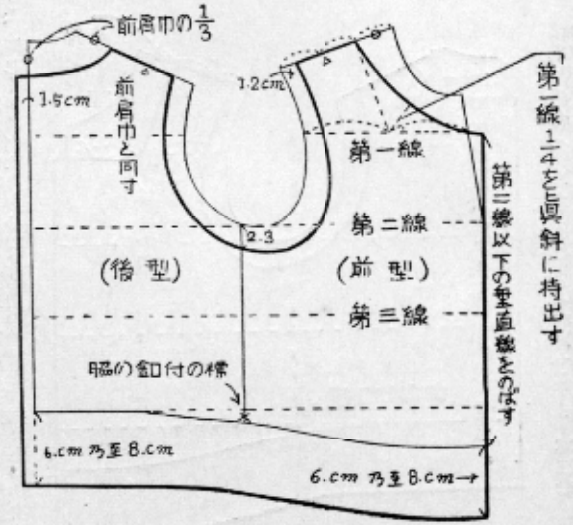
4、股の持出し寸法の2/3を圖のやうに眞斜に持ち出して、前股上の刳といたします。
5、基礎線の右上から第二線まで眞直ぐに、それから先を斜に刳りながら前股上の線を引きます。
6、前股上の1/5を、その線の上にのばし、それから左基礎線の上まで斜線を引きます。左の方そして四糎程は斜線のまゝに殘りの中央の處で一糎の膨らみをつけます。
7、今膨らみをつけた端から股の持出し線まで斜線を引き、持出し線の上四糎の處で一糎刳り込みます。
8、股下の斜線を引き、中央で五糎刳りこみます。
9、型紙の太い線を切り抜いて開くと、第二十九圖のやうな型紙が得られます。



第二十九圖

(二)チヨツキ(丸衿型)

1、第三十圖のやうに原型を土臺として製圖します。
2、原型の前肩を三等分します。それから第一線(原型の胸廻り)を二等分して、圖のやうに肩幅三分の一の處から點線でつなぎその線の交づた三角の角から、眞斜に第一線の1/4を持出します。
3、前の中心は第二線以下の垂直線を上にのばして第一線の處まで引き、圖のやうに前衿刳線を引きます。



第三十圖

4、前肩幅の左端で一糎二粍とります。
5、後肩幅の衿刳より の方で前肩幅の1/3だけをとり、又後中心の上で同樣とります、そして原型にならつて衿刳を描きます。
6、後肩幅は、前肩幅と同寸にします。
7、脇線上で二糎三粍くり、原型にならつて袖刳線を描きます。
8、後中心から一糎五粍の持出しをして後の重り代とします。
9、裾は六糎乃至八糎長く、原型にならつて線を描きます。

(三)チヨツキ(角衿型)

丸衿型と同樣の處は省略して、異つた處だけを示します。

1、角型衿の前刳は、前肩線の1/3と、第一線(胸廻り)の中央とを第三十一圖のやうにつなぎ、第一線の右を

前中心の垂直線まで伸して引きます。これは丸型衿のときに引いた點線と同一になります。

2、同じく後衿刳は後中心では原型の衿刳と胸廻りとの中央まで衿刳線を下げて圖のやうに直線を引きます。

第三十一圖

3、肩幅は前と同寸ですが衿刳の線は肩の斜線に直角になる直線を引き、先に引いた直線と交叉させます、そして圖の太線を切りますと後の衿刳は出來上ります。

4、次に後の裏りは一糎五粍といたします。

用布の積り方

六十八糎幅の用布で

1、チョッキの前と脇とが輪になるやうに裁ちますのには、

丸型衿の場合（腰巾＋19cm）×2＋背巾＋11.5cm＝總用布

角型衿の場合（腰巾＋19cm）×2＋背巾＋11cm＝總用布

2、チョッキの前のみを輪として、脇に縫目をつけますのには

第三十二圖

丸型衿の場合（腰巾＋22cm－ヒ＝巾）×2＝總用布

角型衿の場合（腰巾＋背巾＋25cm）×2＝總用布

二　裁方

一、ヅロース

1、ヅロースの裾口にレースを付けますから、第三十二圖のやうに型紙の裾口を、レースの幅だけ切り落しレースをつける縫代として二糎三粍を附けます。

2、上の腰廻りは型紙通り裁ちきります。脇の上部にチョッキとの合印×を附します。

3、股の上下には一糎五粍の縫代を附けます。

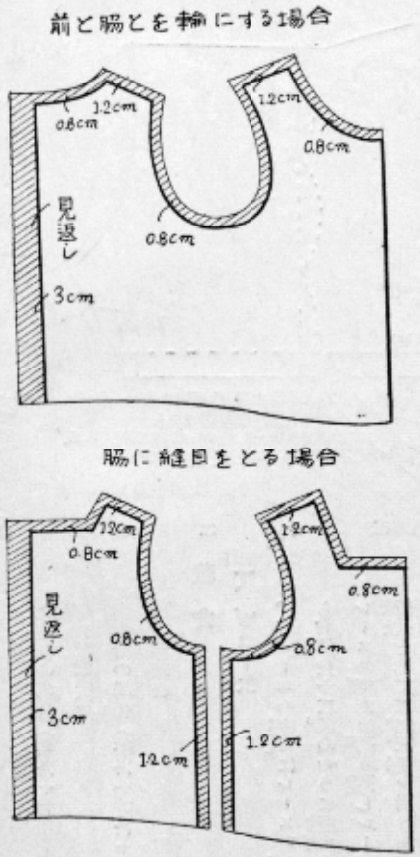
4、同様にして二枚裁ちます。

ブルーマース

ヅロースと異る處は、

1、型紙の裾口へ折返し代を二糎五粍附けます。

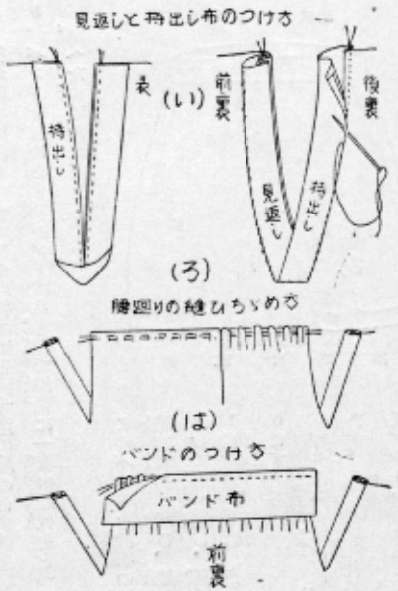
その他はヅロースと同様です。



第三十三圖

二、丸型、及角型衿のチヨツキ

1、第三十三圖のやうに兩方とも前中心は輪になつて居ります。



第三十四圖

2、背中心には見返しを三糎裁ち出します。

3、前後の衿刳と袖刳には八粍、肩は一糎二粍の縫代をつけます

4、脇に縫目を附けるときには一糎二粍を縫代分としてとります

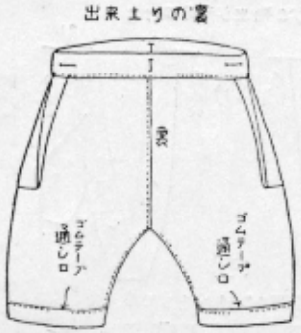
縫方

一、ヅロースとブルーマース

1、兩脇の切込みに、第三十四圖(いのやうに見返しと持出しをつけます。

布は裁ちきり四糎幅の共布で、切り込みに中表に合せ、四粍位の縫代で端から縫ひ、見返し布の方に折り返します。次に共布の他の端を四糎幅に折つて、前の縫目の上にまつり縫ひします。見返しになる方は前布に圖のやうに輪の方もまつりつけますので、表布がつれないやう注意しながら付けておきます。

2、次に股上を袋縫にします。
縫代は、男兒は右身頃側へ、女兒は左身頃へ、折り伏せます。
3、上部は端から四糎の處にぐし縫を細かく二條して、チョツキの前と同寸になるやうに縮めます。
4、後の幅も同樣に、チョツキの後身頃と同寸迄に縮めます。
5、バンドを付けます。バンドは八糎幅で周圍に一糎の縫代をとつておきます。長さは、前後の布幅に縫代を加へた丈けあればよろしい。



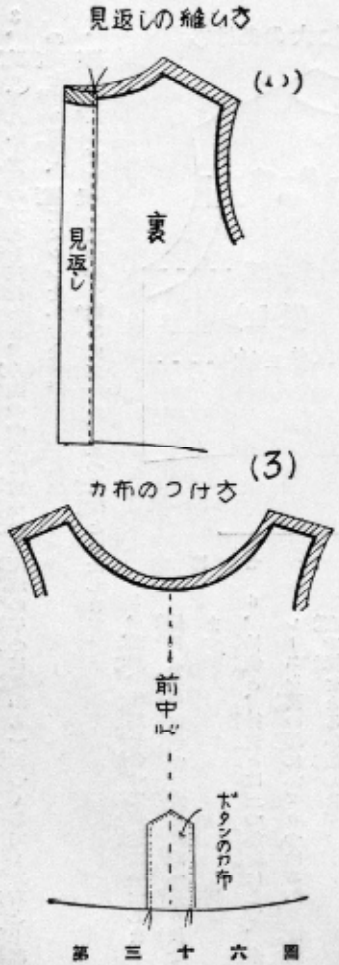
第三十五圖

このバンドを前布の縫縮めた處にあて、(圖のやうに一糎の縫代で細かく縫ひ、縫目はバンドの方へ返し、兩端も一糎の縫代にして裏へ返し、裏側へまつり付けます。
6、後も同じ方法で付けます。たゞ後は持出し布の分だけ長くなります。
7、ヅロースの時には、レースを縫につけてから股下を袋縫にします。
又ブルーマースのときには、股下を先に袋縫にしてから裾を折り上げて、ゴムテープの通るやうに二糎位縫ひ殘してまつりぐけいたします。

8、以上出來上りましたらば釦穴をあけます。後、前とも中央には縦二糎に、左右には端から一糎入つた處へ一個所づゝあけ、全部穴かゞりをいたします。
ミシン縫の場合でしたらばバンド、股上、下及び裾口に飾ミシンを第三十五圖のやうにかけておきます。

二、チョツキ（丸型袴）

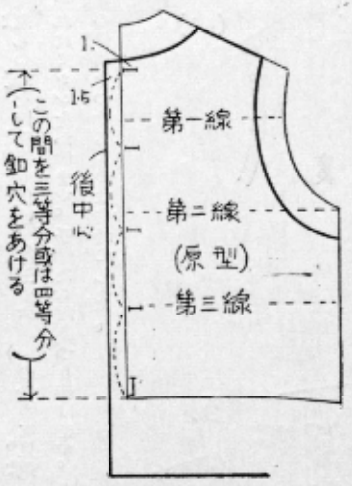
1、見返しの端を四糎折り曲げ、第三十六圖(い)のやうに見返しの分だけをきちんと折つて、身頃の裏へ折りつけそれにミシンをかけます。手縫ならばまつり縫けます。
2、脇の縫目をつけるものは袋縫にします。



第三十六圖

3、殘りぎれから釦の力布を三枚とり、(ろ)圖のやうに前中心と兩脇の中心に裏から一枚づゝあてゝ左右と上部の端を折り返し、端にミシンをかけます。

4、裾は出來るだけ細く三つ卷き縫ひにするか、三つ折縫といたします。



第三十七圖

5、前肩、後肩を合せて袋縫にいたします。縫目は男兒は後へ、女兒は前へ折り伏せます。

6、衿刳と、袖刳とは三つ卷縫にして、糸レースを裏の端にかゞりつけるか又は斜布で緣をとるか致します。

7、後の重りの左身頃側（女兒は右身頃側に）第三十七圖のやうな割合で釦穴をあけてかゞります。奥の方からかゞつて行くやうにします。

縦の穴は二糎に、横の穴は一糎五粍にいたします。

8、片方の重り（男兒は右、女兒は左）（釦穴に做つて下部には直徑一糎五粍の釦を、その他は一糎二粍の釦をつけます。

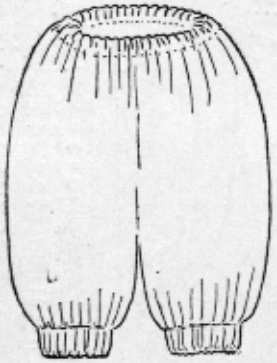
又前中心と、兩脇中心の（×標の處）三個所にも直徑一糎五粍の釦をしつかりとつけて置きます。これはヅロースを吊るための釦です。

三、チョッキ（角型衿）

1、衿刳の緣は斜布でとります。角は縦を下に横を上にして、丁度額縁のやうにして疊み、綻くない程度に輕くまつります。糸は八十番カタン糸を用ひます。

2、その他は前と同樣です。

婦人ブルーマース



第三十八圖

これは膝頭まである長いもので、婦人用の下穿として用ひられて居りますが、冬季などは防寒用として和服に用ひても非常によいものです。

用布の種類

夏季用　クレープ、キャラコ、富士絹、等。

冬季用　綿ネル、フランネル、等。

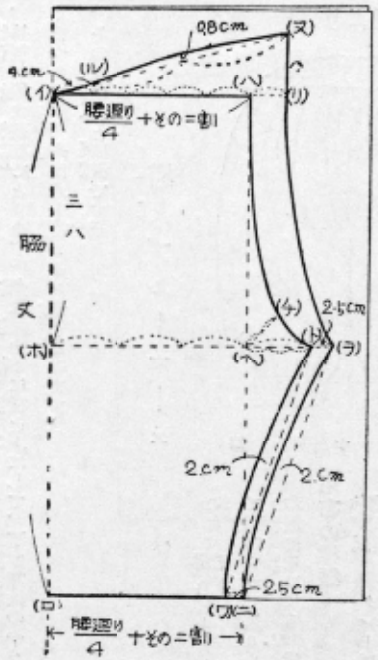
製圖の仕方

1、腰廻り寸法、脇丈（普通膝頭迄ですが、各自の

東京大圖

好みによつて適宜に定めます。)

2、製圖用紙を第三十九圖のやうに縦二つ折として、輪の方で、脇丈を定め、幅は腰廻り寸法の四分の一にその二割を加へたイロ)(ハニ)の長方形を描きます。



第三十九圖

3、脇丈を股上と股下とに分ちます。股上の分としてイロの線をイの方から三十八糎とり眞直ぐにホヘの線を引きます。

4、ホヘの三分の一をトまで伸ばし、ヘトの三分の二をハからチへ出します。

5、ハからチトをなつぐ圖のやうな股上の線を引きます。

6、イハの五分の一をリまでのばし、リから計つて八糎上にヌを標します。

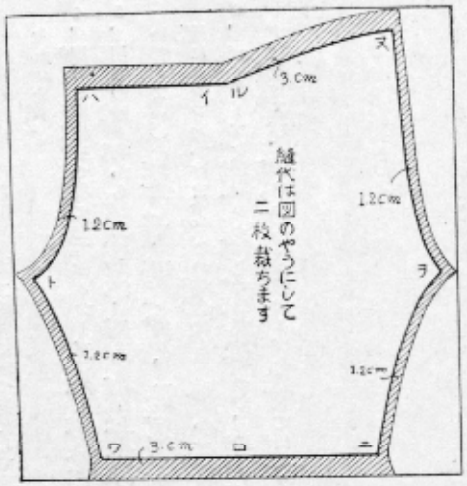
7、イヌ間に斜線を引きます。

8、イから斜線の上四糎の處ルまでは斜線の通り、ルヌの中央で八糎の丸味をとつて、圖の通りに線を引きます。

9、トからニ迄二糎五粍伸ばし、ヌリヲを接ぐ線を引きます。この線はハチトの線に副ふやうに圖を參照しながらいたします。

10、ヲニに斜線を引き、その中央で二糎の丸味をつけて圖のやうに線を引きます。

11、ニから二糎五粍の處ワへ標をつけワトの間に斜線を引き、中央で二糎出してこれも圖のやうに丸味をつけた線を引きます。以上で製圖が終りましたから太い線から切り離します。



圖四十

縫方

一糎二粍にいたします。

縫代のとり方

縫代は第四十圖の通りに上下三糎、その他は

1、股上を袋縫にいたします。地厚の布でしたらば割縫にします。
2、股下も同様に縫ひます。
3、上部の折返し代を出来上り二糎幅に三つ折にして裏面へ折りかへし、ゴムテープの通し口を残してミシンをかけます。
4、裾口も同様三つ折にしてゴムテープの通し口を残してミシンをかけます。
5、用布の残り布から幅二糎五粍、長さは裾口上八糎の周囲の寸法と同寸に、（縦布でも横布でもよく、また接いでもよい。）を用意して、両側を折り、一糎五粍の幅に鍛をかけ、裾口から八糎ほど上の裏側へあてゝ、両端にミシンをかけます。この場合にも、どこか一個所テープの通し口をあけておきます。
6、ゴムテープを腰廻りと同じ寸法だけ切つて、折返しに通し、テープの端と端とをしつかりと接いでおきます。裾口及び、裾口上にも同様テープを通して仕上りといたします。

三、簡單服の部

基礎型

種々の洋服の中でこの簡單服位裁ち方、縫ひ方共簡單なものはありません、しかしこれを基礎として應用工夫すれば種々の型を作ることが出來て嬰兒服から始めて男女兒服、婦人服、下着類等自由に割り出して仕立てることが出來ます。

用布の地質

夏季用　ギンガム、クレープ、ポプリン、富士絹、トプラルコ、ボイル等。

冬季用　サージ、セル、薄地メルトン等。

積り方と附屬品

積り方　（身丈＋袖折り返し10cm）×2＋前下2cm＝用布

八歳嬰兒寸法　（60cm＋10）×2＋2cm＝142cm

（婦人服になりますと前下りは二糎五粍とします。）

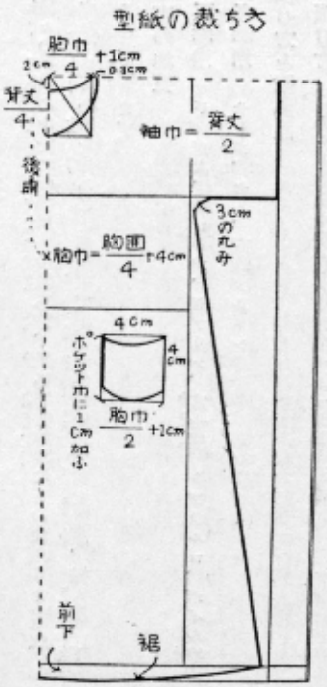
これはシングル幅で普通六八―七二糎位の幅のものの積り方であります。

附屬品　バイヤステープ（袖口、衿刳だけ）スナップ。

製圖の仕方

先づ型紙用紙を縦二つ折にし、次に後を背丈寸法にし裾で二糎の前下りの差をつけて丈を二つ折にします。つまり紙が四つ折りされるのであります。そして次のやうに寸法を計つて第一圖のやうに製圖します。

1、胸幅は胸圍の四分の一に四糎加へた寸法で、直直ぐに縦の線を引く。



第一圖

2、袖幅は背丈の二分の一か又はこれに二糎加へただけの寸法にし、袖丈は胸幅の二分の一にする。但し女分袖三分袖など適宜に和は決め、そして腋下に三糎の丸味をつける。

3、裾は胸幅の線より胸幅の二分の一又は三分の一を開くのでありますが、年齢によつて加減して圖のやうに斜線を引く。

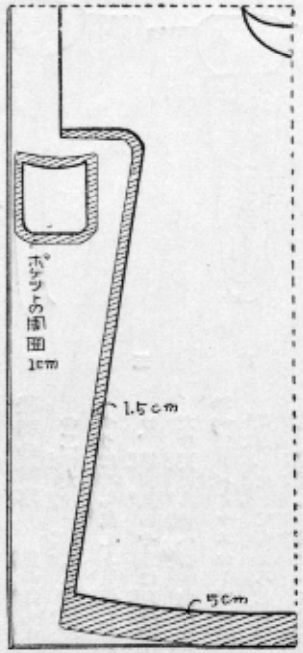
4、後衿明は胸幅の四分の一に一糎加へ、後へ二糎を剃る。

5、前衿剃は背丈の四分の一にして圖のやうに三糎の剃をつけて衿剃の線を引く。

6、前下りは二糎。

7、後明は背丈の四分の三。

8、ポケット



第二圖

位置　背丈から下に四糎下げ、脇縫から四糎離す。

幅　胸幅の二分の一に一糎加へる。

深さ　幅よりも一糎深くする。型は各自の好みによつて種々工夫すれば面白いものが出來ます。

布の裁ち方

きづ布を中表になるやうに幅を二つに折り、更に丈も前下りだけ差をつけて二つに折ります、それから型紙をあてゝ第二圖のやうに縫ひ代をつけて裁ち切り、最後に衿剃をします。この衿剃は先きに後衿剃を四枚重ねた

まゝ裁ち切り、その後で前衿刳を前の二枚だけで裁ち切ります。この衿刳はうつかりすると前の刳を先にして四枚切りますと取り返しのつかない事になりますから充分注意しなければなりません。

縫ひ代は衿刳にはつけませんで袖口にはつける時もありつけない時もあります。袖下から脇の縫ひ代は一糎五耗とし、裾は折り返しは八糎乃至一二糎附けます。

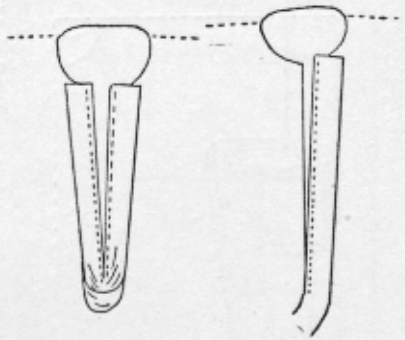
縫ひ方

後明の始末　脇の裁ち落しの布で裁ち切り幅四糎、丈は明の二倍だけを用意して見返しと持ち出しにします。第三圖のやうに持ち出しと見返しとを縫けて縫ひつけ、裏側で綴けつけ、第四圖のやうに左身頃はそのまゝ持ち出しとし、右身頃だけ更に裏側へ折り曲げて身返しとします。

衿刳　バイヤステープを附けます、附け方は縁取りにしても見返しにしてもよろしい、縁取の時はテープをつらせ加減にし、見返しの時はゆるめ加減につけます。

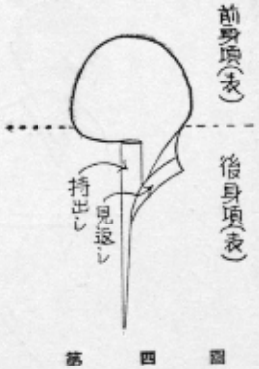
脇縫と袖下の始末　脇下の丸みをよく伸して兩脇を袋縫にします。この時、丸みのところは縫ひ代を淺くし、折りは前身頃に倒します。

袖口　折り代を取らない時は縁取りにしてバイヤスで包み、折り返しのある時は裏に返してまつります。



第三圖

第四圖



第五圖

裾絎　出來上り丈だけに折つて、表がつれないやうにまつり附けます、或はまつらずにミシンをかけても宜しい。

ポケツト　第一圖に示した位置に附けます。

出來上りましたらアイロンで仕上げして最後に後明を三等分してスナツプを三個、見返しに凸形、持出しには凹形を縫ひつけます。

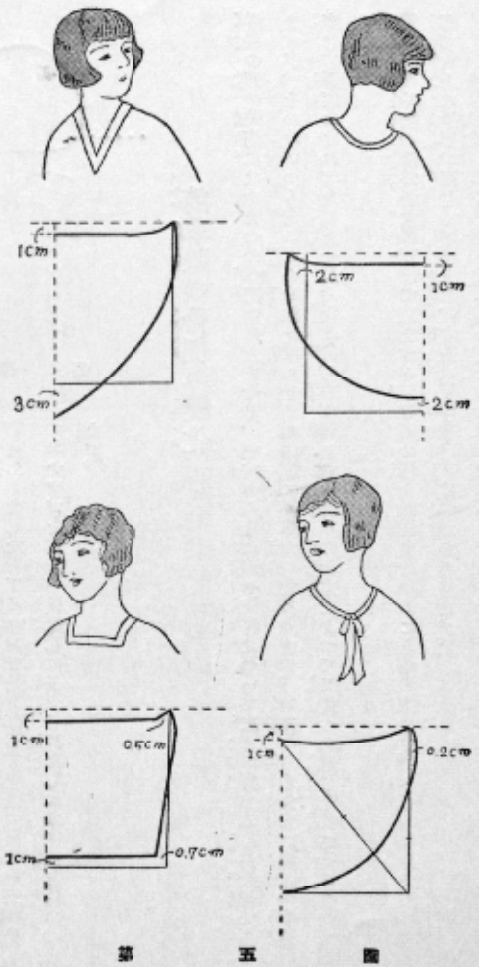
簡單服の衿刳の變化

洋服の形や裝飾にはきまつた規則はありません、ですから常に形や裝飾について工夫考案する事が大切であります、その時いつも着る人の缺點を補ふやうにすることが大切であります。衿刳の形も丸形に限らず個性に應じて選ばなければなりません、なほ裁ち方は同じでも飾りの仕方によつて又變つた感じを起させるものであります。

簡單服の衿刳の恰好を大體別けて見ますと第五圖の樣な四種に分けることが出來ます。

即ち右上は船形、同じく下は丸形、右上はV字形、下は角形であります。

前にも申した樣に之等はどの形の服に取り入れても宜しいのであります。



第五圖

ラグラン袖型簡單服

肩から腋下に斜に縫ひ目のある型で、縫ひ目は摘み縫ひにすることもあり、或は全く身頃と袖を切り離して元

の位置に縫ひ合せることもあります、どちらもその縫ひ目によつて自然に肩下りが附くやうになります、身頃と袖を別々に裁つ時には袖の布目を縦に裁ちます、縞物などの時はこの方が全體の調和が取れて美しく見えます、又無地の物でしたら袖と肩の縫ひ目に布と配合のよい刺繍糸で十字刺繍でもしますと一層引き立ちます。

この洋服は五、六歳から十三、四歳位までに適當した型であります。

用布の地質

夏季用　ギンガム、クレープ、ポプリン、富士絹、トブラルコ、ボイル等。

冬季用　セル、サージ、メルトン、ビロード等。

積り方と附屬品

積り方　シングル幅で着丈に裾の折り返し分を加へた寸法の二倍に前下りを加へただけの寸法、ラシヤ幅の場合は着丈に裾の折り返しを加へた寸法の一倍半。

入数の算出

(60cm+10cm)×2+2cm=142cm

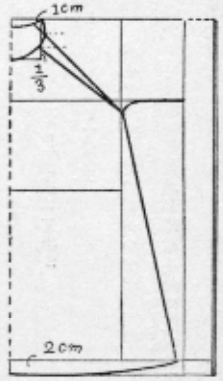
(60+10)×1.5=10.5cm

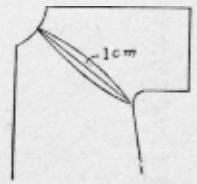
附屬品　バイヤステープ、スナップ。

バイヤステープは服地が無地の時はそれに配合のよい柄物か色物を、服地が柄物の時は配合のよい無地物が宜しいやうです。

製図の仕方

簡單服の部





第六圖

胸廻り　六〇糎
背丈　三〇糎
着丈　六〇糎
裄丈　四六糎

標準寸法

七、八歳。

リボン　四分の一吋幅の繻子織のもの六〇糎。

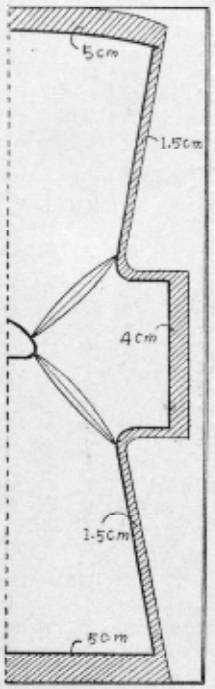
製圖の仕方

型紙用紙を前と同じやうに線を二つ折にし次に前下りの差をつけて丈を二つ折にして第六圖のやうに製圖して第七圖のやうに布を裁ちます、第八圖、第九圖は袖と身頃を別々に切り離す裁ち方であります。

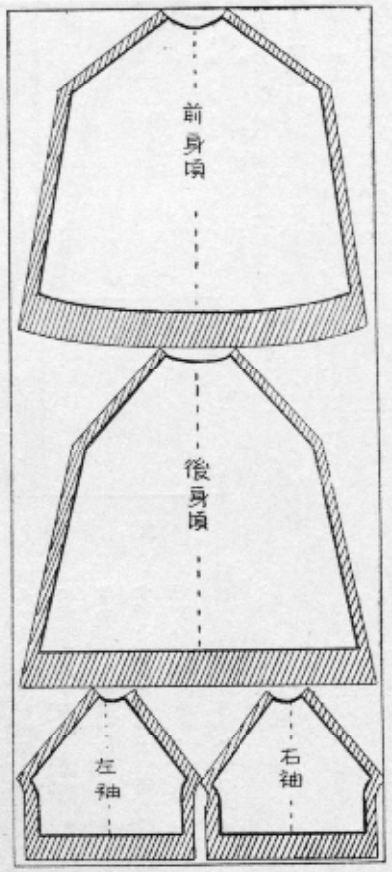
縫ひ方

袖　身頃の彎線の摘み縫は標通りに縫つて袖の方へ返します。別々に裁ち切つたものは身頃と袖を縫ひ合せて、鎖で縫ひ目は割り、ほつれ易い布地の場合は共色の糸で裁ち目を絡げておきます。

布の裁ち方



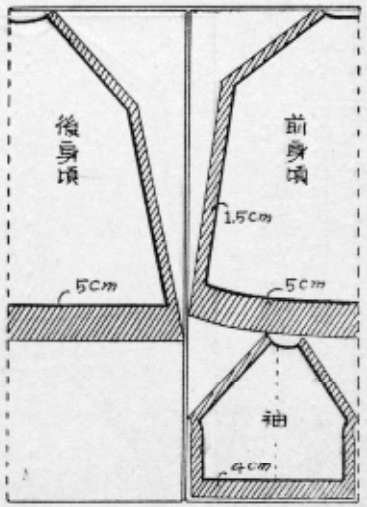
第七圖



第八圖

ポケツト

好みの型に裁つて、第十圖のやうに口に表見返しをつけます。見返し布は共布でも宜しいし、又白布で恰好のよい幅に裁つて口を縫ひ合せ、一方の裁ち目を折り曲げて四糎幅にミシンをかけます、そしてつける位置を定めて身頃に當て、三方を折り伏せて際ミシンをかけます。口元には止めミシンをかけます。



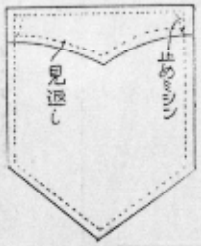
第九圖

表から縫ひつけ、縁取りにします。

袖下と脇縫　袋縫にして折は前へ倒します。脇下の丸味のところは出來るだけ布を延ばしながら淺く縫ひます。

裾の始末　裾は身丈だけに折りまげてまつりつけるかミシンをかけます。

ポケットの作り方

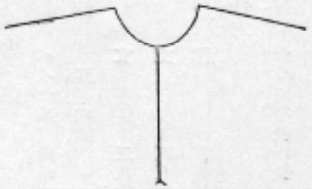


第十圖

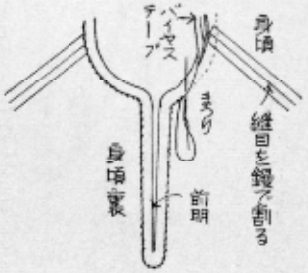
前明と衿刳　前身頃の中心を衿刳から下へ背丈の三分の一より二糎ほど長く切り明け、明の下に第十一圖のやうに四粍の切込を斜に入れます。それから背の中心からバイヤステープを表側に當て第十二圖のやうに前明の角を撫げて前明に縫し附にし、つゞいて上前の衿刳の角から背中まで附けます。そしてバイヤスで縫ひ代を包んで裏縫でまつりつけます。

袖口　衿縫りと同じ色のバイヤステープで

方ルの入れ込み切前明



第十一圖



第十二圖

飾　リボンを恰好よく結んで前明の右端上の端に結び目を綴ぢて端は下へ下げておきます。

ホック　前明の上端の裏側にホックを附けます。右身頃に鈎、左身頃に輪の方をつけ最後にアイロンで仕上げます。

衿ギヤザー附簡單服

二、三歳から五、六歳の幼兒に相應しい型で簡單服應用型の一種であります。袖を三分袖にしたり、ラグラン型を取り入れたり、又肩

出來上り圖

第十三圖

下り附の型にしたり種々變つた型に仕立てる事が出來ます。明きは後明でも又肩明でも宜しい。

用布の地質

縫ひ縮めのある型はどの場合でも同じでありますが、縫ひ縮めの縦横がたるべくしつとりと柔かみの出るやうな地質の生地を選ぶことが必要であります。

富士絹、羽二重、メリンス、水玉模様ローン、ボイル、フランス縮緬、の類の外、トブラルコ、ギンガム、ポプリン、なども宜しい。

積り方と附屬品

積り方　ヤング氏法　(身丈+1.2cm+肩の折り返し巾)×2+前下り=用布

五・六歳標準寸法　(55cm+1.2cm+10cm)×2+2cm=134.5cm

附屬品　バイヤス、鈎ホック。

標準方法　五、六歳。

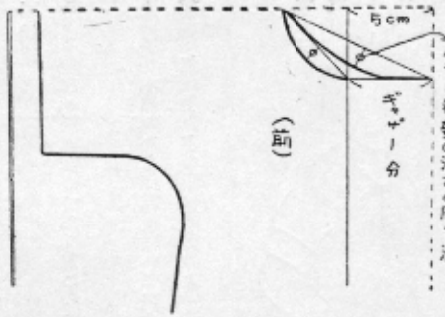
背　丈　二八糎

身　丈　五五糎

胸　圍　五五糎

製圖の仕方

其礎と同じやうに型紙用紙に前下りをつけて四つ折にします、さうしてギヤザーの分に輪の方を五糎だけ廣くしておいて他は前と同じにします。但し袖の型は好みの型にかへることは自由であります。大體の製圖が出來ましたら衿刳のところを第十四圖のやうにギヤザー分だけ廣くなつてる爲め前の刳だけかへます。



第十四圖

裁ち方

布の置き方も縫代のつけ方も其礎と同じであります。

縫ひ方

明きの始末　明は後明にして縁取りをして鈎ホックで止めるやうにします。

衿のギヤザー　縫ひ縮めは丁寧にしないと綺麗なギヤザーが寄りません。ギヤザーは片身宛で衿刳の中心から三分の二の間だけ縫ひ縮めをして、肩から三分の一はギヤザーを寄せません

この縫ひ縮めははじめ裁ち目から四糎入つたところを三糎位の針目で縫ひ、次に裁ち目から一糎五糎入つたところを前の針目と針目を揃へて縫ひ、そしてこの二本の糸を引いて縮めます。

このはじめに縫つた縫ひ目は衿刳の縫ひ代の中へ入れてしまひ、後の縫ひ目の糸は仕立て上げてから抜き取ります。かうして縫ひ縮めたギヤザーは縫ひ代になるところ、つまり端から七糎位の間だけ焼鏝をかけてギヤザ

ーを落ちつかせておきますと縫ふときに大變樂にきれいに縫ふことが出來ます。

脇と袖下縫　袖下から脇へつゞけて袋縫にします。いつも袖下の刺は充分布を伸し、且縫代を濃くします。

袖口　袖口明は折り曲げて裏にまつり紐にするか、又は緣取りをします。

裾の始末　出來上り丈に裾を折返して折返しの幅をきめ、曝ミシンをかけるか又はまつり縫にします。前下りの布の斜になつてゐるところは強み勝になりますから、小さい襞を二つ三つ取つて平らになるやうに整理します。

仕上げ　木綿物ならば霧を吹いてアイロンをかけ、毛織物は濡れた布をあてゝアイロンをかけます。

裝飾　無地物などの時は配色のよい糸で簡單な刺繍をするか、又配合のよい色の別布をあてゝアップリケなどするのも面白いものです。

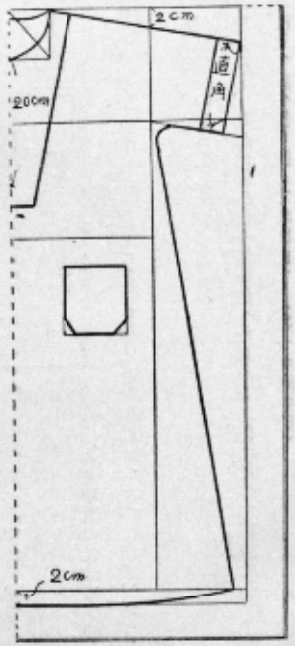
肩下りつき簡單服

矢張り前の基礎簡單服と殆んど同じであれを基にして肩を切り下げ、明を前につけて衿をつけ、袖にカフスをつけた第十五圖のやうな型であります。前と同じでありますが、衿布と袖口布はどちらも飾になるものであります

出來上り圖

第十五圖

から、形、色、柄、地質等大抵同じ物を使ひます。身頃との關係は、同じ物にする時もありますが別布を用ひる時の方が多くあります。別布の時は、衿、袖口布は身頃と別の色にする方が多く、そしてお互ひに引き立つやうに取り合せることが大事であります。



第十六圖

第十七圖

地質も裝飾の意味があるから身頃より幾分よい物の方がよろしい。

製圖の仕方

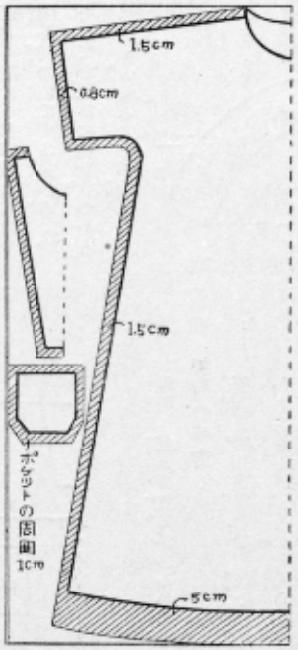
製圖も殆んど同じで、第十六圖のやうに肩の下りは袖幅の線上で上から二糎下げ、それを通る斜の線を引いて肩山、袖山の線とします。袖口は肩下りの線に直角に引きます。

衿は丸型でも角型でも適宜でありますが、すべて衿をつける場合は第十七圖のやうに前身頃の衿刺は圓くせずに殆んど斜に直ぐに裁ち

ます。

布の裁ち方

第十八圖のやうに縫代をつけて裁ちます。



第十八圖

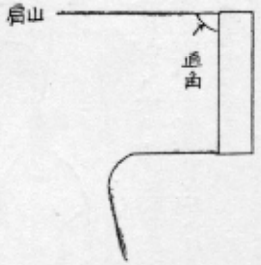
縫ひ方

前明の始末　丸衿の時は縁取りにし、スポーツ衿の時は後に出てゐます女兒運動シャツの前明のやうに胸當布をあてます、つまり胸當布の中央と前身頃の中央とを中表に合せて中心から三粍の縫ひ代で明を縫ひ、前明を切つて毛抜合せに折り返して裏で胸當布を身頃にまつりつけます、さうして持ち出し布を下前につけます。

肩と脇　肩も脇も袋縫にして縫ひ代は前身の方へ倒します。

袖口　袖口布は出來上り幅二糎五粍位にし、これに縫ひ代一糎を加へたもの〻二倍に裁つて裏側につけ、表側でまつりつけてから袖と毛抜合せにして表へ折り返しておきます。（第十九圖參照）

裾　身丈の寸法通りに折り曲げてまつりつけます。



第十九圖

衿の縫ひ方　表裏の衿を中表に合せて縫ひますが、この時裏衿を稍々釣り加減に縫ひ合せて出來上つてから裏の方が表に吹き出ぬやうにします。縫ひ代は四粍位に裁ち落としてしまふと、曲線が綺麗に出來ます。

衿附　身頃の表に衿を載せ、衿全體をつらせ加減に針を打ち假綴をします。そして衿の上にバイヤステープを載せ、八粍の縫ひ代で衿を挾んでつけます。バイヤステープは幅を六粍に折つて身頃に見返してまつり縮にします。

ポケツト　好みの型に作つてつけます。

仕上げ　アイロンで仕上げます、そしてからスナツプを衿元に一つ、前明を四等分して三ケ附けます。

脇ギヤザー附簡單服

少女向の簡單服で第二十圖のやうに兩脇にギヤザーを取つた型であります。

積り方と附屬品

積り方　やゝゆるい型（身丈十糎の縫代）×2＝四倍丈

附屬品　バイヤステープ、スナップ。

製圖の仕方

原型を使つて第二十一圖のやうに製圖します。脇の切り込みは後身頃は背丈の線を眞直ぐに後幅の中央まで切り込み、前身頃は前幅の中央で背丈の線から二糎下つた點へ脇から斜めに切り込みます。そしてギヤザーの分は切り込寸法だけよせます。

出來上り圖

第二十二圖

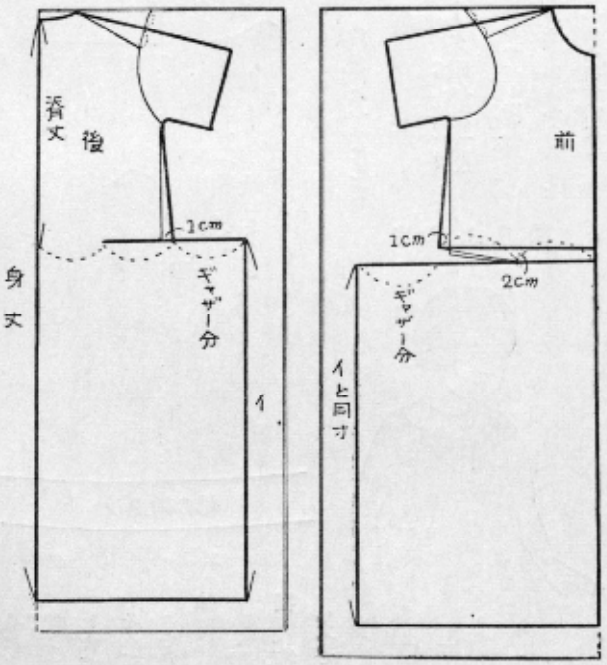
袖は衿刳から横に眞直ぐに引いた線と原型の肩の線との間を二等分して肩の線を引き、袖口は肩の線に直角に引きます、袖下の線は脇の線へ三糎の丸みでつとけます。衿刳は丸型でも角型でも好みによつて適當の型にいたします。

布の裁ち方

肩及脇には一糎五粍、裾に八糎の縫ひ代をつけて布を裁ち切ります。

縫方

製図の仕方



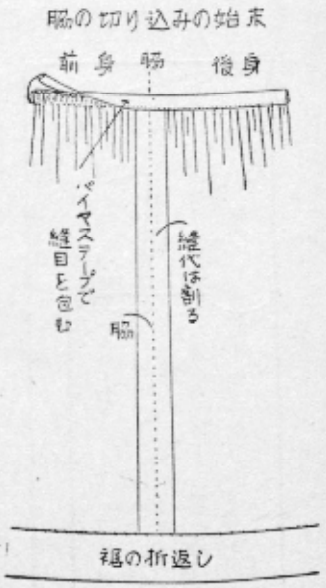
第二十一圖

肩　肩は袋縫にして縫ひ代は前身頃の方へ倒します。

衿刳　衿刳の裏側に出來上り幅が六粍になるやうにバイヤステープで見返しをつけます。

脇縫　上半身と下半身とは別々に脇を縫つて、上の縫ひ代は前身頃の方へ倒し、下のまひ代は割つておきます。

脇の切り込みの部



第二十二圖

分は上半身の身幅だけに縫ひ縮め第二十二圖のやうに上下の脇縫目を合せ、薄地のバイヤステープをそへて三枚を一緒に縫ひ、バイヤスで縫ひ代を包みます。

袖口　バイヤステープで絲取にするか見返しにします。

裾　第二十二圖のやうに身丈だけ折つてまつり縮にしておきます。

第二十三圖

仕上げ　前と同じやうにします。

ヨーク附簡單服

これは袴ギヤザー附簡單服の應用で、三、四歳から六、七歳位の子供の平常着にも、外出着にも適してゐる型であります。

ヨークは身頃と配合のよい別布をつけるか或は身頃と共の布を用ひてもよろしい、そしてこのヨークの形をいろ〳〵工夫すれば變つた面白いものが出來ます。

用布　胸にギヤザーが附きますから矢張りしなやかな布地を多く用ひます。

積り方と附属品

積り方　(身丈+前の折り返し+袖の縫ひ代)×二

+肩下ヨーク巾

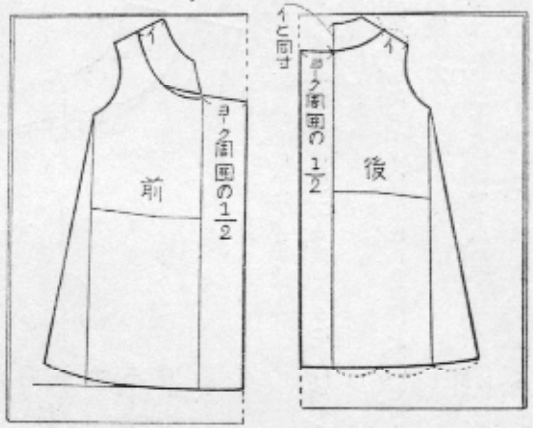
巾三ヨークの合計寸法

附属品　バイヤステープ、スナップ。

標準寸法　六、七歳。

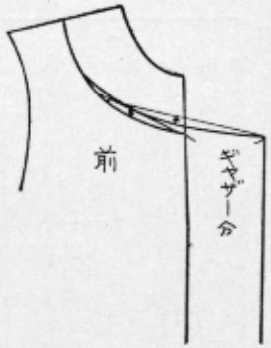
肩　丈　二八糎

身　丈　五六糎



第二十四圖

胸圍　五六糎
裄丈　四二糎



第二十五圖

製圖の仕方

ヨークの形は好みによつて適當でありますが、第二十四圖は肩幅の二分の一寸法の幅だけぐるつとつけることにしますから、その下にギヤザー分を出すやうにします、ギヤザー分はヨーク周圍の二分の一寸法だけ出して、前の方も同樣に出しヨークの引き直しの仕方は第二十五圖のやうに衿ギヤザー附の時の仕方と同じにいたします。

ヨークの型紙は別に第二十六圖のやうに、前ヨークと後ヨークとを並べて寫しとり、持ち出しを左身頃側に一糎五粍出します。

型紙を切る時ヨークの廻りは引きなほした線を切ります。

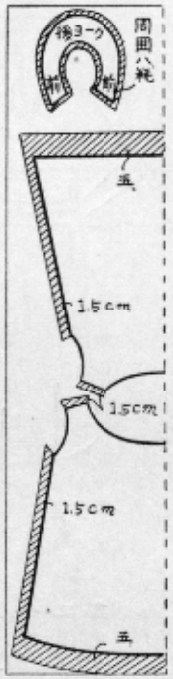
布の裁ち方

縫ひ代は第二十七圖のやうに衿刳と袖刳は型紙の通りにし、肩と脇は一糎五粍、裾は五糎つけます。ヨークは周圍八粍の縫ひ代をつけて表と裏を一枚づゝ取ります。

第二十六圖

縫方

身頃　後明にして明には見返しと持ち出しをつけます。次に肩と脇を袋縫にして折はどちらも前へ倒します。そして裾は身丈だけに折り曲てまつり縮にし、袖刳は共のバイヤステープで縁を取つて落しミシンをかけます。次に前後のギヤザーを前の衿ギヤザー附の時の要領で縫ひ縮めますが、この時ヨークの長さよりも身頃の方を一糎位長くなるやうに加減して縮めておきます。



第二十七圖

布の裁ち方

ヨーク　表裏二枚のヨークを中表に合せ、衿刳と周囲を八粍の深さに縫ひ、角を整へて衿刳縫ひ代を淺く切り落してから表に返します。そしてヨークの縫ひ代を表裏とも中に折り曲げておきます。このヨークの衿刳は縁取にするのも宜しい。

ヨーク附　表ヨークと身頃を中表に合せ（ヨーク持ち出しと身頃持ち出しとを合せます）ヨークを少し張り氣味にして附け、裏ヨークはまつりつけます。

仕上げ　いつもの通り霧を吹きアイロンで仕上げをして、それから後明のヨークに二箇、その下に三箇のスナップをつけて出來上りとします。

婦人家庭着

裁ち方も縫ひ方も極く簡單でありますから型紙を作らずに直ちに布に印をつけて裁斷しても宜しい。

用布の地質

ギンガム、ポプリン、スポンヂクロス、富士絹、トプラルコ等の無地物、格樣物、縞物など適當な物を選びます。

出來上り圖

第二十八圖　積り方と附屬品

積り方

シングル幅

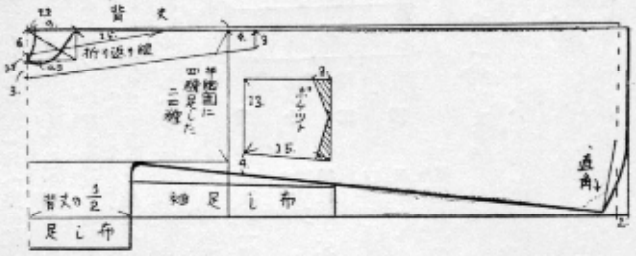
着丈＋裾折り代×2＋前下り＝用布　別に白無地50cm（衿、見返布等）

基準寸法

100cm＋10cm×2＋2cm＝122cm　巾広　50cm

附屬品　用布と同色のバイヤステープ一卷、スナップ三ケ、エナメルバンド一。

裁ち方



第二十九圖

布の耳を揃へて輻を二つ折にし、更に前下り二糎の差をつけて丈を二つに折り、後身を下におきます。

第二十九圖に合せて四つ折の輪の角から手前へ六糎、右へ一糎二粍計つて弓なりに後衿刳の線を引きます。前衿刳は同じ角より背丈の四分の一の丸糎を右へ計つて長方形を作り、手前の横線を三等分して、左の點で三粍くり込み、次に斜の四等分の一の點を通つて前中心迄引きます。

折り返りの線は肩で一糎二粍だけ衿刳より上へ計つたところと、折り返り寸法一五糎を前衿刳より右へ計つて印をつけ、この二點に斜線を引きます。

前明はこの一五糎の點から更に背丈の線まで明けます。

見返し布はそれから又四糎右へ印をつけ、手前へ三糎計つて、この點と肩も衿刳から三糎手前へ計つて斜線をハツキリ引きます。

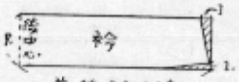
見返しの衿刳は前身と共通の線を用ひます、この型を別の見返し布の上に寫し取ります。

次に背丈三六糎を計つて縱線を引き、半胸圍に四糎の弛みを加へた二四糎を計つて肩へ直線を引き、袖口寸法は背丈の二分の一の一八糎、その

交叉點から裾幅一杯へ脇の線を引き、袖下と脇の線との角は三糎位の丸味をつけ、裄線と脇線とは直角になるやうに切り上げ線を引き（最初に後身）前下りへと曲線で仕上りの裾線ではッキリ引いておきます。

ポケットの位置は背丈から四糎下づて脇からも四糎入づて口寸法は一三糎、深さは一五糎、脇の方は脇線に平行に、前の方は前中心線に平行になるやうに引き、底は三糎づゝ角を落します。

袖丈の短かいのは袖下の殘り布から足し布を取ります。



第三十圖

布の裁ち方順序は最初後衿刳通りに布を四枚裁ち落し、脇、袖下は一糎二粍の縫代をつけて四枚一緒に裁ち切ります。次に前後を擴げて前後別々に裄線を裁ち、前衿刳も裁ち落します。

衿は第三十圖の形のものを二枚取ります、後中心は布の輪のところにし、縫代はつけません。

ポケットは一枚。

見返し布は前布と同じやうに前中心を輪で取り、衿ぐりは縫代なしにし、その他は八粍づゝつけて裁ちます。

衿、ポケット、見返しは白の無地布で裁ちます。

縫方

身頃

前中心と見返し布の中心の明留返切込を入れて合せ、見返し布の奥と肩は出來上り通りに折つて際ミシンをかけておきます。

次に衿二枚で身頃の衿ぐりを挾みづけにし、衿の周圍と折り返し線及び明きの廻りはバイヤステープで緣取りにします。明留の下前だけは落しミシンをかけないでおきます。この落しミシンをかける時下前明に幅一糎五粍の持ち出を一緒に縫ひつけます。

ポケット

ポケットの周圍にも緣取をし、口だけ落しミシンをかけ、三方は身頃に据えてから落しミシンをかけてつけます。

袖

袖先に殘り布から取つた足し布をつけ折は身頃の方へ倒し、四粍の飾ミシンをかけ袖先はバイヤステープで緣取にします。

袖下から脇をつゞけて袋縫にし、丸味をよく伸したがら縫ひ代も淺目にします。

裾

五糎折つて更に八粍折り込んで際ミシンをかけます。

バンド通し

幅六粍、長さはバンドの幅に縫ひ代とゆるみを加へた丈に作り、ポケット口より上へ四糎上げた所から上部へうかし加減につけます。

仕上

霧を吹いてアイロンをかけ、スナップを附け、着用してからバンドの寸法を計つてバックルに合せて長いだけエナメルを切ります。

女兒用運動シヤツ

用布の地質

キヤラコ、ポプリン、ピケ等。

用布と附屬品

用布はキヤラコ幅ものとして、出來上り丈に裾の縫ひ込み分加へたもの〻二倍に前下りを加へた寸法。スナツプ四箇。

製圖の仕方

1、製圖用紙を縦二つに折り、それを一方を二糎長くして横に二つに折ります。左と上が輪になるやうにして縦に紙をおきます。

2、背丈に八糎加へたものを丈として左輪の方に標をし、胸圍の四分の一に弛みとして四糎加へたものを幅として長方形を畫きます。

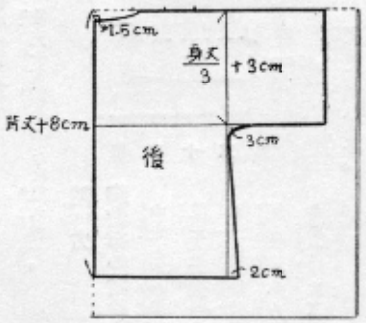
3、着物の袖幅の二分の一を袖丈とし、身丈の三分の一に三糎加へた寸法を袖幅として第三十二圖のやうに線を引きます。

第三十一圖　女兒運動シヤツ出來上り圖

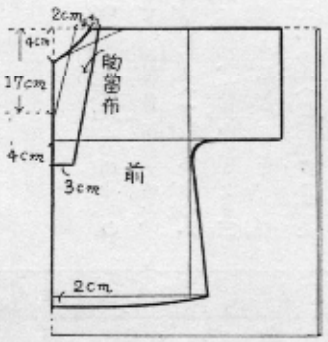
4、裾口で脇へ二糎攫げて脇の線を引き、脇と袖下の線と交叉した所に三糎の丸味をつけます。

5、胸幅の四分の一に一糎加へて衿肩明とし、後衿刳は一糎五粍とします。

6、前身の裾は二糎の前下りをつけます。



第三十二圖



第三十三圖

7、前衿刳は四糎、衿肩明から袖山までの間を二等分した處から、前衿刳へ斜線を引きます。前衿刳はこの斜線に添ふやうに刳ります。（第三十三圖參照）

8、衿肩明から二糎内へ入つた點と、肩山から十七糎下つた點へ斜線を引きます、これは前の折返の線となります。

9、折返し線から十糎下つた點まで前明を明けます。

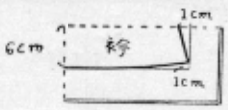
10、胸當布は前衿刳に合せて第三十三圖のやうに衿肩明から二糎右に取り、前明線より四糎下つた處で幅三

糎にして上から絲線を引きます。

11、衿は前後の衿刻を計り衿丈を積り、幅は六糎とします。紙を四つ折にして第三十四圖のやうに製圖いたします。

布の裁ち方

第三十五圖のやうに裁ちます。



第三十四圖

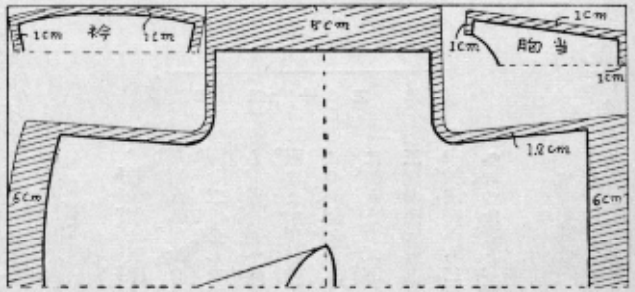
縫方

胸當布の附け方

胸當布の中央と、前身頃の中央とを中表に合せて、四糎位離れた處を、第三十六圖のやうに巻でおさへて置き、中心から三糎の縫代で小針に縫ひ、胸明の終りより三糎位上から自然に淺く半返し縫にして、明留の所で横に二糎縫つてから上へ最初の縫ひ方と同様に縫ひます。

次に第三十七圖のやうに、二枚のまゝ中央に鋏を入れて、裏の方に折り返し毛抜き合せとします。

胸當布の周圍を一糎折り、巻でおさへて置き、八糎位の針目で絎け

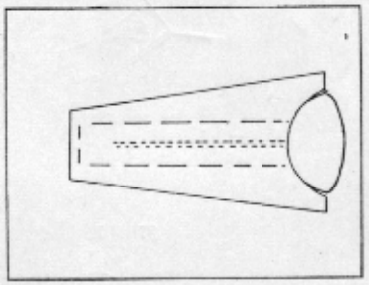


第三十五圖

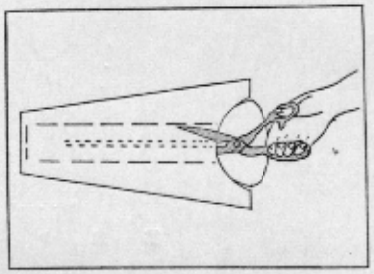
つけます。

身頃

袖下の丸みを充分にのばして、袖下と脇を袋縫にして前に折り返します。



第三十六圖



第三十七圖

袖口は一糎を折り代としてまげ、四糎幅に三つ折絎けにします。

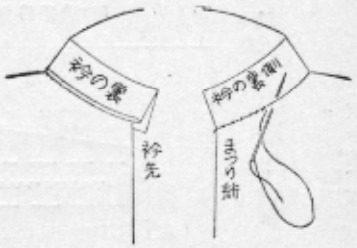
裾は裁目に準じて一糎折りまげて、出來上り身丈として絎けつけます。

衿附け

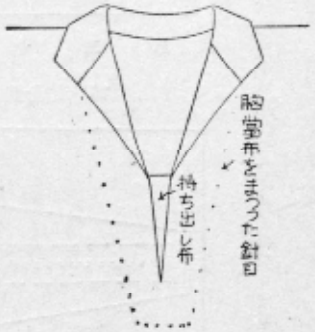
衿の兩尖を小針に縫ひ、表に返し、衿を持つて身頃の裏から待針を打ち、半返しに縫ひ、第三十八圖のやうに衿先の折りは裏の方に返して小針にまつりつけます。

持出し

丈二十五糎、幅六糎の布を二つ折にして上を縫ひ、表に返して一糎五粍出して小針に耳絎けします。



第三十八圖



第三十九圖

そして更に端から五糎入つた所をとちます。（第三十九圖參照）

出來上り圖のやうに衿の下にスナップをつけ、アイロンで仕上げます。

四、子供服の部

基礎型女兒服

この女兒服は其礎になる型でありますからこの型を基として樣々の應用が出來ます。仕立方も極く簡單で通學用にもなるし、平常着にも適當であります。一寸見た感じを變へるために衿や、カフスやポケットなどを工夫しますと全く異つた服のやうな感じさへ出ます。

用布の地質

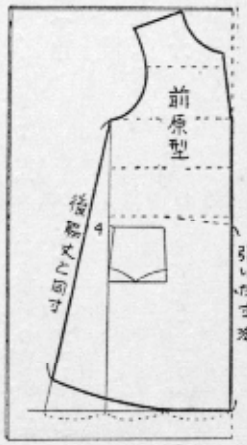
夏季用　ポプリン、ギンガム、トブラルコ、ボイル、富士絹、クレープ等のやうな洗濯に堪へるものを選びます。これ等には衿やカフスに共地質の白を用ひるのがよく調和が取れます。

冬季用　セル、サージ、メルトン、ブロードクロス、等で附屬布はすべて地質は同じで別な色のものを用ひます。

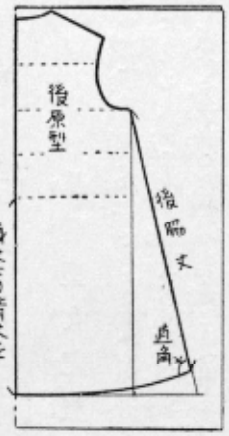
積り方と附屬品

積り方　身丈に上下の縫ひ代として二二糎を足してこれを二倍し、それに袖山丈の二倍を足した物が總用布の丈になります。

やくだん圖（身丈＋縫代＋袖山丈）×2＝用布



第一圖



第一圖

附屬品　バイヤステープ一卷、スナップ五ケ。

標準寸法　八、九歳。

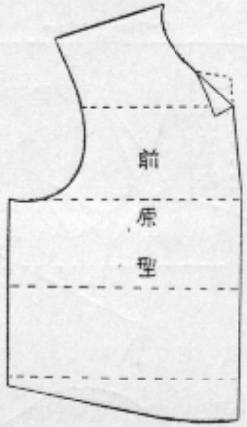
背丈	三〇糎
身丈	六三糎
胸廻り	六〇糎
裄丈	四五糎

製圖の仕方

後身頃　第一圖のやうに型紙用紙を二つ折にした上に後原形を重ね後原型を基として身丈を計つて横に裾の線を引き、次に原型の脇の線を褄の線まで引き下げ、裾幅は年齢の小さい間は二分の一だけ開かせ、十歳以上は三分の一開かせます。それから原型の袖刳角と裾へ斜の線を引きます。そして裾は裾幅の中央から脇の線に直角になるやうに切り上げます。

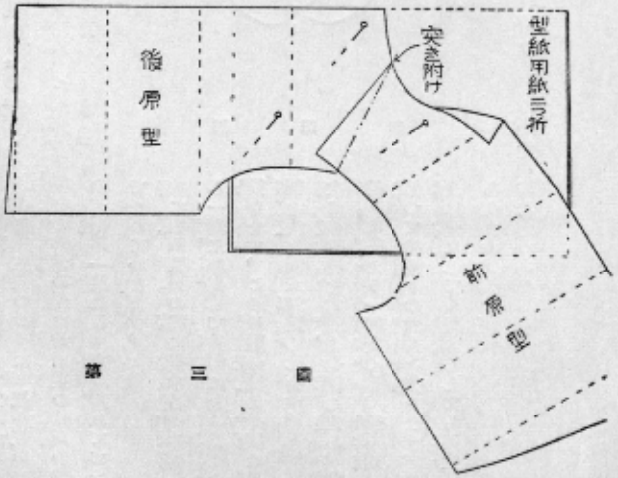
前身頃　矢張り型紙用紙に前原型をうつして、後原型の背丈から裾までの寸法を前原型の前下りから下へ計つて丈とします。あとは殆んど後身と同じ引き方で、前脇丈は後脇丈と同寸にします。

ポケット　ポケットの位置は前原型の下の線から二糎下げ、脇から四糎入づた所にします。口寸法は四歳までが八糎で、四歳から十五歳迄は一歳増す毎に五粍づゝ大きくし、深さはいつも口寸法に一糎を加へた寸法にします。



第二圖

袴の製圖（基礎型）

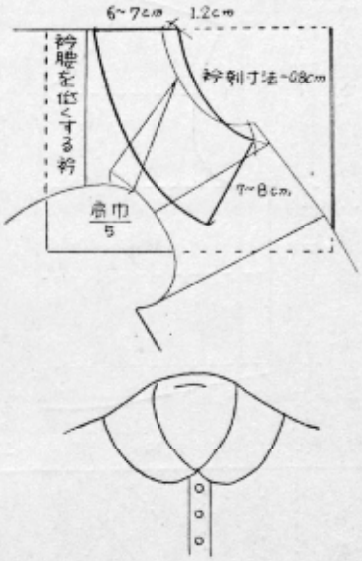


第三圖

先づ前原型の衿刳の前端を第二圖のやうに原型の第一線まで折り曲げます。次に第三圖のやうに型紙用紙を二つに折つてその輪の方に後原型の背中心を揃へてピンで止め、それから後原型の衿肩の端に前原型の衿肩の端を突き附けに合せ、袖刳の方は肩幅の五分の一（衿腰を高くする時は肩幅の三分の一重ねる）だけ重ねてピンで止めておきます。

次に第四圖上の線に後中心の衿刳から一糎二粍出して衿附になる曲線を描きます、この衿附寸法は身頃の衿刳寸法より八粍短くします。

次に後衿幅を六糎―七糎に定め、前衿刳は後より一糎廣くし、衿附線に倣つて衿廻りの曲線を描きます、衿先は角にしても又丸くしても適宜であります。



第四圖

袖の製圖

洋服の袖丈といふのは和服の袖幅のことで、袖幅は又和服の袖丈をいふのであります。

先づ袖附寸法と袖山丈を定めます。

イ、袖附寸法の出し方。

第五圖のやうに前後身頃の袖刳のぐるりを型紙の裁ち目から八粍内側を計つて、その寸法の二分の一を袖附寸法とします。

ロ、袖山丈の出し方。

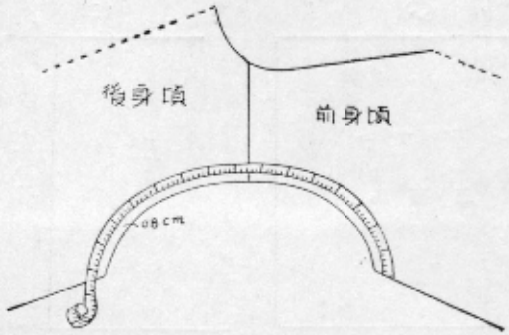
肩丈から背幅を引いた寸法をいふので、袖先にカフスの附く場合はこのカフスの幅をも減します。

ハ、型紙の取り方順序。

第六圖のやうに袖山丈に約四糎を加へた寸法の正方形の紙を用意して、附寸法の三分の一を紙の端から計つて（ろ）のやうに折り曲げ、次に右角から下へ附寸法の三分の一に二糎足した寸法を計り、この點から斜めに附寸法を計つて、上の端からは一糎五粍下げます。（は圖）

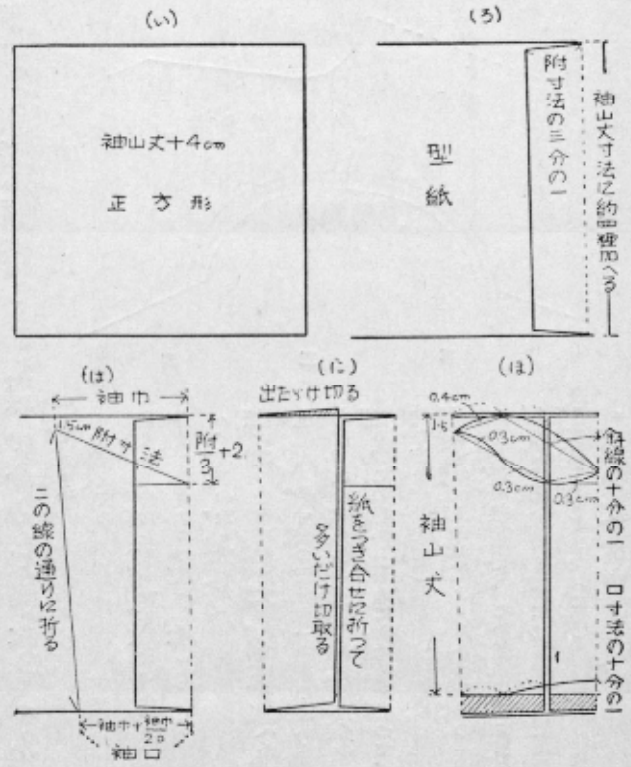
補口寸法は上の袖幅よりもその十分の一だけ狹くして袖幅と袖口とに斜の線を引き、この線の通りに折ります。そして一方の裁ち目の線と突き合せになるやうに更に折り目を附けて餘分は全部裁ち落します。（に圖）

ニ、袖刳の引き方。



第五圖

妻大圖



第六圖

袖刳は最初斜の線を(ほ)圖のやうに引いてそれから曲線を出來上り線のやうに引きます。そして口は、口寸法の十分の一だけ切り上げます。

鋏の入れ方

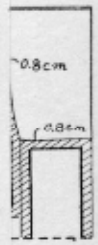
以上のやうに製圖が出來ましたら、最初外廻りの曲線

を二枚一緒に裁ち落し、枚々々別々に切ります。これで袖の型紙は出來上り等にします。なほ、袖の

します。

用布の裁ち方

第七圖のやうに裁ちます布を裁つにはいつも用布め出來上りの線を全部目標は木綿物や絹物の時はトの位置などには切鋏た



縫方

袖

袖下を袋縫にしてからカフスの幅を外表に下の縫ひ目を合せて三枚しておきます。

刻は左右の折り目を擴げてから一つて長袖、七分袖、半袖、三分袖寸法よりも袖の方を三糎位長く

に取るやうに型紙をならべ、はじこの縫ひ代線に鋏を入れます。して出來上り線や合標、ポケツ

ひ目は割つておきます。それか袖口の裏側へカフスを當て、袖し、袖下、袖山に輕く奥止めを

を二枚一緒に裁ち落し、枚々々別々に切ります。これで袖の型紙は出來上等にします。なほ、袖のします。

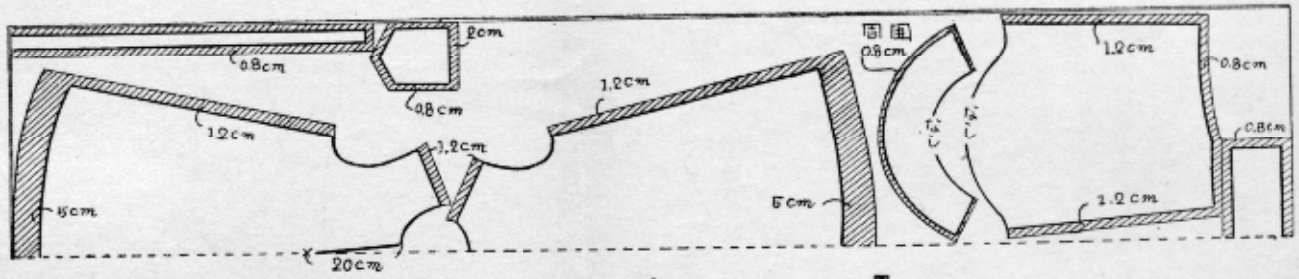
用布の裁ち方

第七圖のやうに裁ちます布を裁つにはいつも用布め出來上りの線を全部目標は木綿物や絹物の時はトの位置などには切鋏を

縫方

袖下を袋縫にして折らカフスの幅を外表に一下の縫ひ目を合せて三枚しておきます。

基礎型

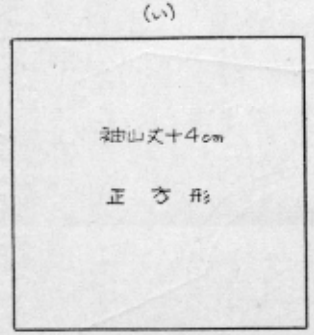


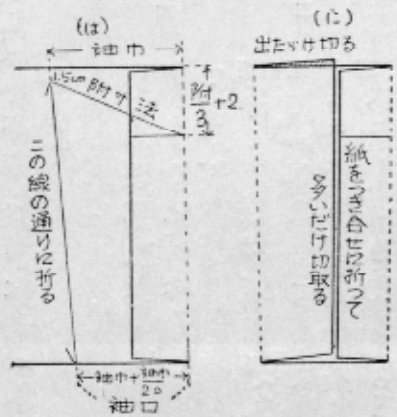
第七圖

割は左右の折り目を摘げてから一つて長袖、七分袖、半袖、三分袖寸法よりも袖の方を三糎位長く

に取るやうに型紙をならべ、はじこの縫ひ代線に鋏を入れます。そして出來上り線や合標、ポケツ

縫ひ目は割つておきます。それか袖口の裏側へカフスを當て、袖へし、袖下、袖山に輕く奥止めを



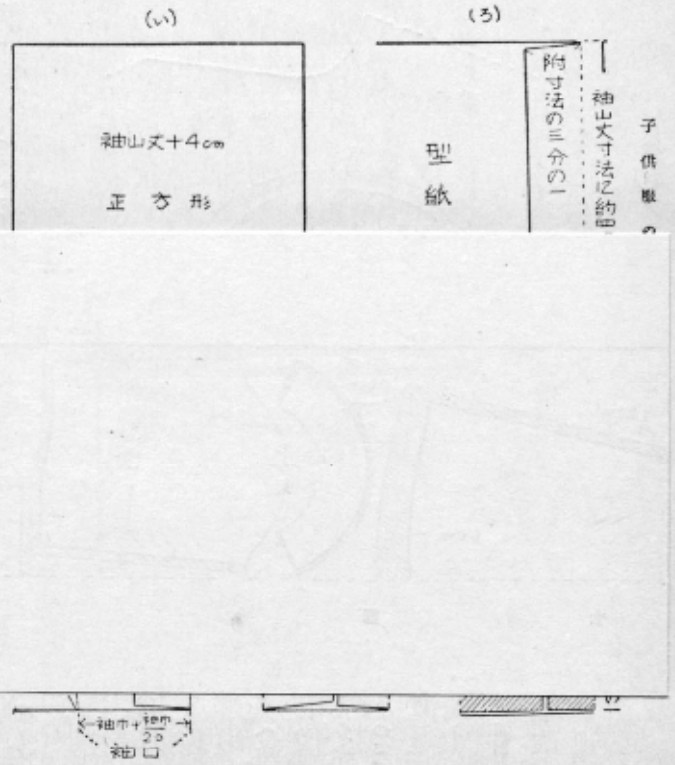


第六圖

のやうに引きます。そして口は、口寸法の十分の一だけ切り上げます。

鋏の入れ方

以上のやうに製圖が出來ましたら、最初外廻りの曲線



第六圖

袖刳は最初斜の線をは圖のやうに引いてそれから曲線を出來上り線のやうに引きます。そして口は、口寸法の十分の一だけ切り上げます。

鋏の入れ方

以上のやうに製圖が出來ましたら、最初外廻りの曲線

を二枚一緒に裁ち落し、次に袖口も同じやうに裁ちます、それから内側の袖刳は左右の折り目を擴げてから一枚々々別々に切ります。

これで袖の型紙は出來上りでありますが、袖山丈は季節によつたり好みによつて長袖、七分袖、半袖、三分袖等にします。なほ、袖の附寸法と身頃の袖刳寸法を各々計つていつも身頃の寸法よりも袖の方を三糎位長くします。

用布の裁ち方

第七圖のやうに裁ちます。

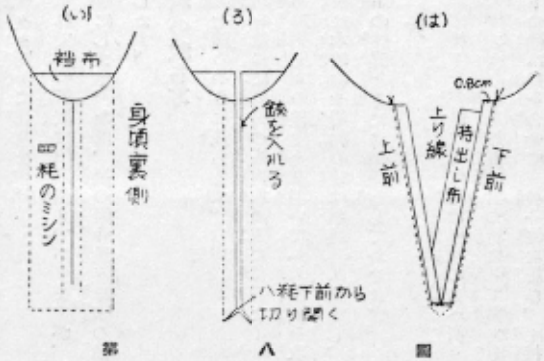
布を裁つにはいつも用布の上に位置よく成る可く布目に注意しながら經濟的に取るやうに型紙をならべ、はじめ出來上りの線を全部引いてから型紙を取り除け、次に縫ひ代の線を引いて、この縫ひ代線に鋏を入れます。

標は木綿物や絹物の時は點線器か筆でし、毛織物の時はチャコを使ひます。そして出來上り線や合標、ポケットの位置などには切鋏をしておきます。

縫方

袖　袖下を袋縫にして折は内袖の方へ折ります。次にカフスの袖下を縫つて縫ひ目は割つておきます。それからカフスの幅を外表に二つ折にして裁ち目の方をよく揃へて細かく鋏をかけ、袖口の裏側へカフスを當て、袖下の縫ひ目を合せて三枚一緒に縫ひ、毛抜合せにしてカフスを袖の表側へかへし、袖下、袖山に輕く奥止めをしておきます。

身頃



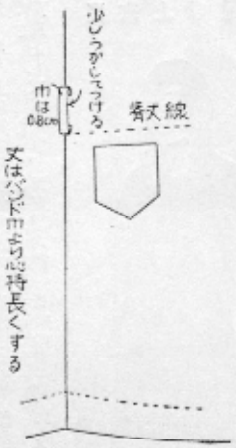
1、胸明の作り方（兩玉縁）　幾り布から幅六糎、長さ二十五糎の當布を取つて前明に當布の中心を合せて中表に重ね、前明の中心線から左右へ四糎づゝ離して第八圖（いのやうにミシンをかけます。

次に前明線に鋏を入れ、（ろ）圖のやうに前明止から八糎上つたところからミシンの際へ向けて切り開きます。それからこの縫ひ代は木綿物の時は片返しにし、毛織物の時は開いて、當布で縫ひ代を包みながら裏側へ返し、上前は落しミシンをかけ、下前は上り幅一糎五糎の持ち出し布をつけて一緒に落しミシンをかけます。（は圖）

2、ポケットの附け方　ポケット布の口の縫ひ代を裏側へ折り裁ち目を更に八糎折り曲げて際ミシンをかけます。次に兩側と底を出來上り寸法だけに折つて前身頃のポケットの位置に合せて、際ミシンで附けます。この時口の兩端は丈夫に三、四回返し縫にします。

3、肩　肩は袋縫にして縫ひ代は前身頃の方へ倒します。

4、衿附　衿布を中表にして裁ち目を合せ、表衿の方が心持弛み加減にして衿廻りを縫つて表に返します。そして身頃の背中心と衿布の中心とを合せて、身頃の表側へ衿を張り加減にして假に附けます。次にその上にバイヤステープを合せて身頃とバイヤスとで衿を挾み附けにし、バイヤステープは上り幅六糎にして身頃にまつり紐にします。



5、脇縫　脇を袋縫にして縫ひ代は前身頃へ倒します。

6、裾の始末　裾を身丈だけに折り、更に裁ち目を八糎に折り込んで際ミシンをかけるか又はまつり紐にします。

7、袖附　身頃の合標と袖の合標とを合せ、袖下の縫ひ目が脇の縫ひ目に合ふやうにして袖の三糎の弛みは袖刻全體に平均につけ、裁ち目から四糎入つた所へ細かい針目で筬をかけます。それから三糎幅に切つた斜布を身頃に當てゝ三枚一緒に袖の方を見てミシンをかけます、そして斜布で縫ひ代を包み込んで端の裁ち目は折り込んでまつりつけます。

8、バンド吊　第九圖のやうに身頃の脇で背丈の線の位置から上へつけます。

仕上げ　木綿物は霧を吹いてアイロンをかけ、毛織物は當布をあて水ブラシで濕してアイロンをかけます、衿

やカフスの部分から始めて全體に及ぼします。

スナップ附　胸明に三ケ、バンドに二ケつけて出來上りとします。

セーラースーツ

セーラースーツは仕立方がゆったりとしてゐますから發育盛りの子供用としては最も適當な洋服であります。なほその上に型も輕快で質實である點から女學校の制服に多く用ひられます。女兒だけでなく若い婦人用の運動服としても用ひ、又五、六歳位までの男兒服にもします。女兒用の場合は上衣とスカートで一組となり、男兒の場合は上衣とズボンで一組とします。

純セーラースーツは肩のところで袖附を落して肩幅を廣くし、身幅も普通の上衣に比べて廣いめにしてミシンの針目はすべて表側にあらはすのが本體であります。仕立は單衣にも裏附にもします。

出來上り圖

第十圖

單セーラー（上衣）

用布の地質

夏季用　ポプリン、キャラコ、ギンガム、三綾、ピケー、アルパカ、セル等。

冬季用　サージ、セル、メルトン、ヘル等。

積り方と附屬品

積り方

ヒヤクル(68cm幅)　上衣丈×4＋{(スカート丈＋上下の縫ひ代)×3}＝總用布

タツマル　上衣丈＋20cm＋{(スカート丈＋上下の縫ひ代)×2}＝總用布

附屬品　ネクタイは斜に裁つ方が正しいのですが、生地を經濟的に用ひる爲めに横に裁つても差支へありません、斜に裁つ場合は約四〇糎、内外、横に裁つ場合は十五糎、内外要ります、出來上り品を用ひても宜しいのです。地質は練絹子、羽二重等で色合は麥地が紺か黑の場合は黑か紺、或は瞬脂を、白の場合は紺青、臙脂、黑などが一般向でありますが、表地、帽子、スカート等との色の調和を考へて自由に選びます。

ブレード　衿やカフス、ヨークに付けるブレードは大體八歳以下は五米、九歳以上十五歳迄は六米要ります、一般に毛織物の場合はジヤバラブレードか絹テープを用ひ、木綿物の時は木綿のテープを用ひます、色合は衿布が紺、黑の場合は白、臙脂、茶を用ひ、白の場合は紺、赤、黄、茶などの色物を用ひます。

スナツプ

上衣に七ケ、スカート吊に五ケ。

鈎ホツク

一組。

標準方法

（十七歳）

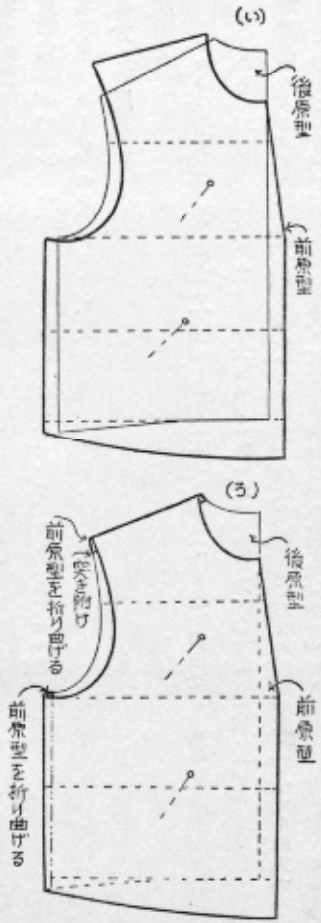
背丈	三八糎	身丈	一五〇糎
胸廻り	七八糎	裄丈	七二糎

製圖の仕方

原型から割り出す前身と後身

先づ原型を裁つて第十一圖（い）のやうに第一線を合せて後原型の上に前原型を重ねてピンで止め、次に前原型と後原型の肩と脇の差、つまり後原型よりも突き出ただけの半分を（ろ）圖のやうに折り曲げて平均させます。かうして出來たものがセーラーの原型となるのであります。

後身も前身もこの重ねられた原型を用つて製圖をするので、肩と脇とは折つた折り目のところを肩の線、脇の線とします。

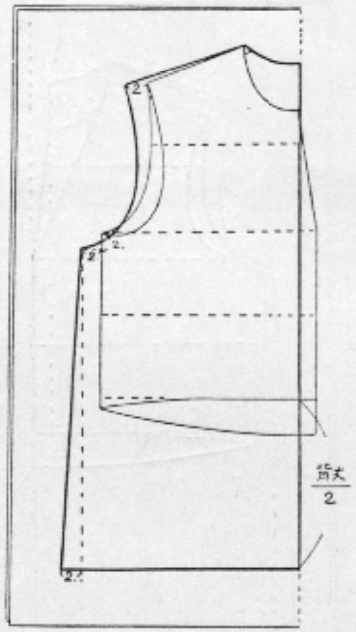


第十一圖

袖刳は後身の刳を前身にも用ひますから、セーラーの前後の身頃の異ふ點はたゞ衿刳と中心と縫とであります。

後身

型紙用紙を第十二圖のやうに縦二つ折にして原型の背中心と型紙用紙の輪の端とを揃へてピンで止め、後背丈のところから下へ背丈の二分の一の寸法だけ下げて横へ直角に裾の線を引き、肩で二糎出して衿肩から斜の線を引きます、次に袖刳から脇の線へ二糎下げて點を打ち、更に左へ二糎出しこの點と肩の點とをつなげて原型の袖刳線にならつて袖刳線を引きます。



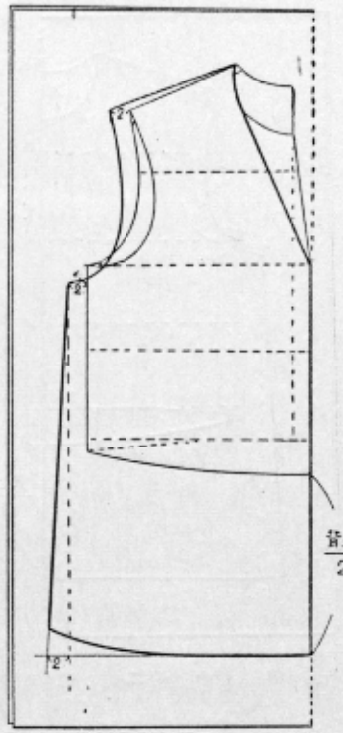
第十二圖

それから袖刳の脇の點を直角に裾まで下げて裾で二糎開かせて斜の線を引き、この線を脇の線とします。そして出來上り線を引きます。

前身　後身と同じく第十三圖のやうに型紙用紙を縦二つに折り原型の前中心の第二線以下と型紙用紙の輪の端とを描へてピンで止めます。

肩と袖刳は後身と同じであります。

裾も前下りのところから背丈の二分の一の寸法だけ線を引き下して横へ引き、脇も裾で二糎だけ開かせることは後と同じであります。

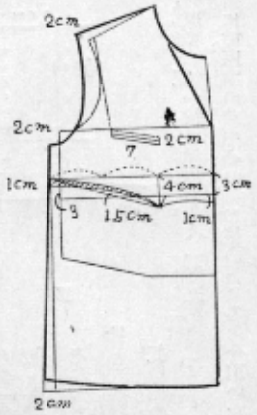


第十三圖

袖刳　前袖刳の一番深く刳り込んだところと、二線の前中心とに線を引いて第十三圖のやうに袖刳を點ち落します。

次は第十四圖の第三線から上へ三糎上げて横線を引き、この横線を三等分して前によつた三分の一の點で下へ四糎下げたところから前中心へ直線を引き、脇へは斜の線をひき、斜線の方は中央で一糎五粍刳り込み、直線の方は前中心で一糎上つたところへ各々曲線を引きます。脇線で一糎くせを取ります。

次に後脇丈にくせの寸法一糎加へたものを前脇丈に計つて殘りの分は裾で切り上げて裾幅の中央へ曲線を引きます。

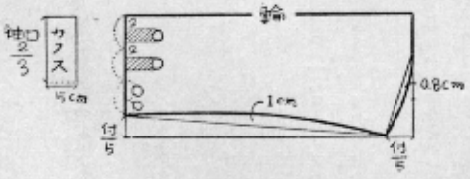


第十四圖

ポケットの位置　前幅から斜にポケット口寸法を計つたところが丁度第二線から二糎下になるやうに引きます、口寸法は四、五歳で七糎、一歳を增す毎に五粍づゝ增します。

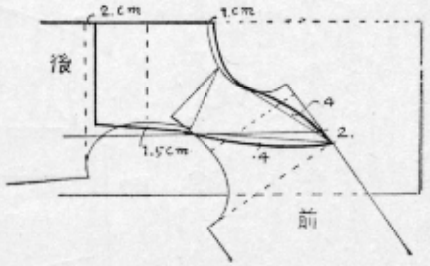
前中心は女兒用の物は第三線から上三糎のところまで前明をあけ、男兒用の場合は衿のところから縫込あけます。

袖　基礎型の第五圖（百三十一頁）のやうに前後身の袖刳の端から八粍内側を計つ



第十五圖

で、その二分の一の寸法を附寸法とします、袖山丈は衍寸法から背幅を減じた寸法で、この場合は更にカフス丈は短くします。



第十六圖

第十五圖の線に型紙用紙を横に二つ折にして、横に袖山丈、縦に附寸法を計つて長方形にします。

右下の角から左へ附寸法の五分の一を計り、縦線を三等分して斜線を引き、中央で八糎の丸味をつけます。

袖先では附寸法の五分の一を下の角から計つて袖下の線を引き中央で一糎縮ります。

次にカフスの幅は五糎として丈は袖口寸法の三分の二にスナップの重ね代一糎を加へます、このカフスの丈を袖先で計つて殘りの寸法を二分して圖のやうに彫襞にします。

それから袖下に袖口から六糎計つて標をつけ、こゝを袖下明とします。

衿　型紙を横二つ折にして第十六圖のやうに後原型の背中心を型紙用紙の輪の端に揃へてピンで止めます。

後原型の第一線で袖刳の方へ一糎五粍出して、こゝから左右へ後中心線に平行線を引きます。

次に前原型の前中心の第二線のところを今引いた平行線から二糎下げて前原型を上に重ねます。さうして前原

裁ち方は第十八、十九圖のやうに裁ちます。

縫方

ジャバラ附

先きに表衿と裏衿とを合せて、衿附の一方を除いたぐるりを一糎の縫ひ代でミシンをかけ、表

て、その二分の一の寸法を附寸法とします、袖山丈は和寸法から背幅を減じた寸法で、この場合は更にカフス巾短くします。

第十六圖

第十五圖の様に型紙用紙を横に二つ折にして、横に袖山丈、縦に附寸法を計つて長方形にします。

右下の角から左へ附寸法の五分の一を計り、縦線を三等分して斜線を引き、中央で八糎の丸味をつけます。

袖先では附寸法の五分の一を下の角から計つて袖下の線を引き中央で一糎縮ります。

次にカフスの幅は五糎として丈は袖口寸法の三分の二にスナップの重ね代一糎を加へます、このカフスの丈を袖先で計つて殘りの寸法を二分して圖のやうに彫鑿にします。

それから袖下に袖口から六糎計つて標をつけ、こゝを袖下明とします。

鈴　型紙を横に二つ折にして第十六圖のやうに後原型の背中心を型紙用紙の輪の端に捕へてピンで止めます。

後原型の第一線で袖刳の方へ一糎五粍出して、こゝから左右へ後中心線に平行線を引きます。

次に前原型の前中心の第二線のところを今引いた平行線から二糎下げて前原型を上に重ねます。さうして前原

第十八圖

第十九圖

て、その二分の一の寸法を附寸法とします、袖山丈は肩寸法から背幅を減じたる寸法で、この場合は更にカフス丈短くします。

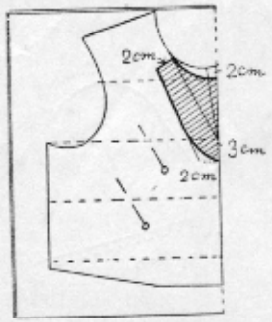
第十五圖の様に型紙用紙を横に二つ折にして、横に袖山丈、縦に附寸

型の二線の前中心のところと、後原型の第一線で袖刳の方へ一糎五粍下げた點とへ斜線を引き、これを後原型の第二線まで引き伸します。

次に前原型のところで四粍の丸味を附けます。背中心の衿刳で一糎出して衿附の線を引き前衿先のところで四粍の丸味を持たせて、無理のないやうに注意して曲線を引きます。そして身頃の衿附寸法よりも衿の附寸法が後中心から前中心の間で八粍短い方が衿の附きが宜しい。

胸當布　型紙用紙を縦二つ折にして前原型の前中心第二線以下と型紙用紙の端とを揃へてピンで止めます。上衣と同じやうに衿刳を引きます。前中心の第二線から氣直ぐに線を上へ引き衿刳の角から二糎下げます、大きく衿刳を引き斜線の衿刳から二糎計つて引き、下は第二線より三糎下げます。そして二糎横へ計つて上の二糎のところへ終の線を引いて下の角を落します。

ヨークの裁ち方



第十七圖

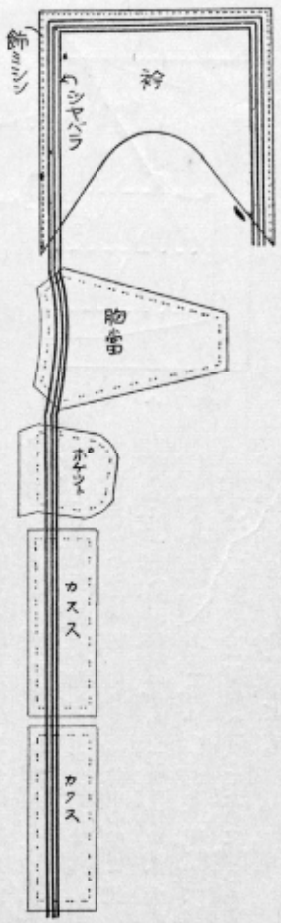
布の裁ち方

裁ち方は第十八、十九圖のやうに裁ちます。

縫方

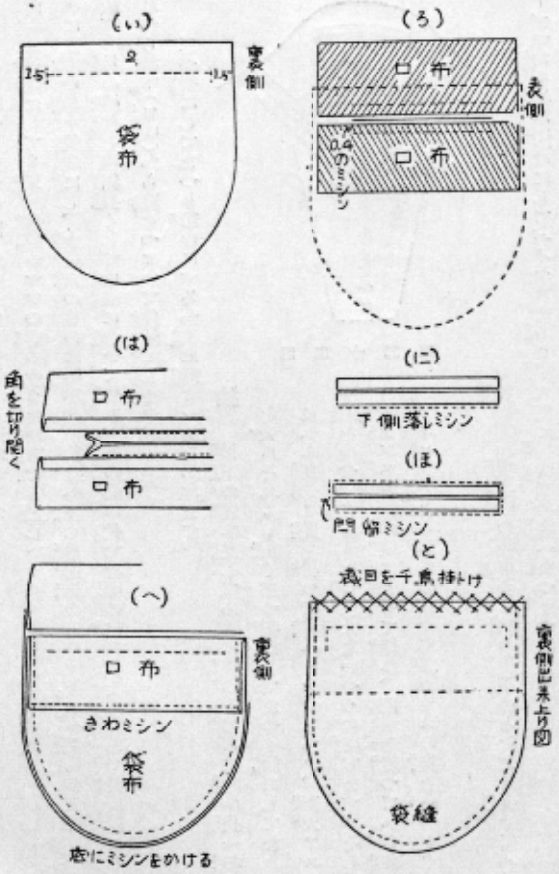
ジャバラ附　先きに表衿と裏衿とを合せて、衿附の一方を除いたぐるりを一糎の縫ひ代でミシンをかけ、表

に折り返してアイロンをかけておきます、さうしてから第二十圖のやうに、衿、胸當布、ポケット、カフスにジヤバラを三本づゝ附けます。蛇腹プレードは中央が凹んでゐますから、そこをミシンで縫ひつけます、よく張つて附けませんと出來上りが見苦しくなります。位置は、衿は端から一糎内側で、ジヤバラとジヤバラとの間はジヤバラの太さだけ離します、胸當布は上部の出來上り線から一糎下につけます。



第二十圖

身頃　下前（左身）に附玉縁ポケットを作ります。作り方は第二十一圖（い）のやうにポケット位置の裏側に袋布を口の標から二糎上に出してのせ、次に（ろ）のやうに表側から口布を上下二枚、口の標を中央にして突き合せに重ね、裁ち目から四粍入つた所を口寸法だけ縫ひます。それから口の標に鋏を入れて兩端は八粍手前からミシン際へ切り開きます。そして口布の縫ひ代は割り、口布で縫ひ代を包みながら（は）圖のやうに裏側に返し、下の玉



第二十一圖

縁へ落しミシンをかけ、口布の裁ち目はそのまゝ際ミシンで袋布につけておきます。他の袋布に當布をつけ、

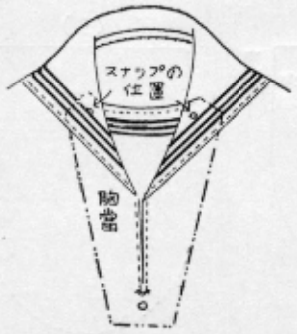
身頃につけて袋布の下に重ねて底を二回がけにして上の落しミシンと一緒に袋布をつけ、（に圖）つゞいて（ほ圖）のやうに兩端へも丈夫に閂留のミシンを四、五回かけておきます。

前明は玉縁にしても又、運動シャツの時のやうな仕方でも宜しい。

次に左右の肩を袋縫にし、女兒用のものは縫ひ代を前身へ倒し男兒用のものは後身へ倒します。

袖附　袖の縫代を四粍長くして中表に合せて縫ひ、袖の縫ひ代で身頃の縫ひ代をくるんで折伏縫にします、それから袖下（口明）から脇をつゞけて袋縫にします。

裾　三つ折にしてまつり紩けにするか又は際ミシンをかけます。



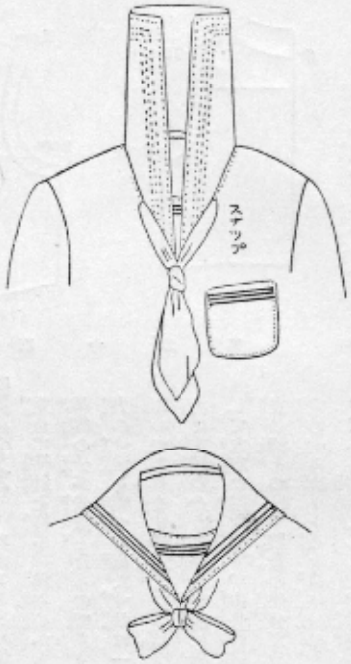
第二十二圖

袖　袖下の縫ひ殘してある六糎のところに縫ひ代一杯に切込みを入れそれ〳〵細く三つ折にしてまつり紩けにしておきます。それから袖先に襞を折つて押へミシンをかけ、表カフスの裏側に芯をのせ、ぐるりを目立たないやうに綴ぢます。そして袖先と表カフスとを中表に合せて縫ひ、兩端を縫つてから表に返し、アイロンでよく落ちつかせて裏カフスの奥をまつりぐけにします。

衿附　表身頃の後中心と衿の後中心とをよく合せてバイヤステープで衿を挾み附けにしてバイヤスは上り幅六粍に折つて身頃へまつりつけます。

胸當布の縫方　表裏を中表に合せて縫ひ（下前につく方を六糎位縫ひ殘す）表に返して返し口をまつり紩にし、アイロンを裏布の方からかけてよく落ちつかせます。

出來上つた胸當布は第二十二圖の位置にスナップをつけてとめるやうにします。



第二十三圖

ネクタイ　端を縫に縫ひ上げ、第二十三圖のやうに形よく結び、上の端は細く疊んでスナップの凸をつけ、衿のかげの適宜の位置にスナップの凹を縫ひつけて取りはづしの出來るやうにしておきます。

スカート

スカート吊　原型を基として第二十四圖のやうに型紙を作り、第十八圖のやうに縫ひ代をつけて布を裁ちま

す。縫ひ方は、前明に持ち出しと見返しをつけ、脇と肩は袋縫にして縫ひ代は前身頃へ倒します。衿刳と袖刳はバイヤステープで出來上り幅六粍の見返しを附けます。

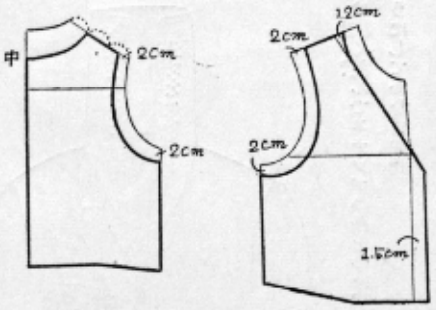
スカート　布の幅を全部接ぎ合せて縫ひ代は割ります。縫ひ代の裁ち目になつてゐるところはかゞり縫にしておきます。

裾　裾を折つてまつり縫にするか、蜜ミシンをかけておきます。

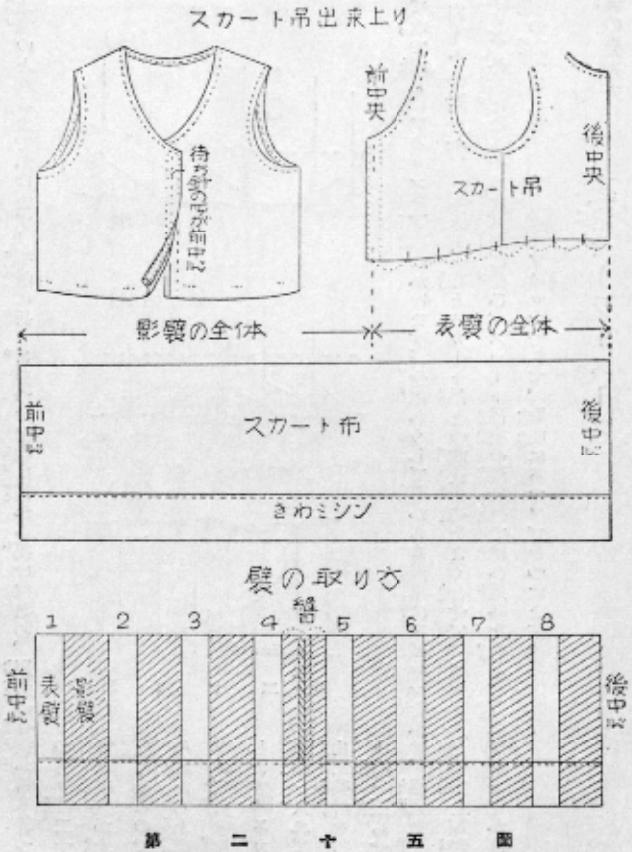
襞の折り方　スカート吊の後中心と、スカート布の後中心とを重ねて待針を打ち、前中心から殘りの分が影襞となり、スカート吊幅の分が表襞となるのでありますから、先きに襞數を定めて兩方の寸法を割つて出た寸法は一つの襞（表襞、影襞）の寸法になるのであります。（第二十五圖參照）

次に下圖のやうに裾を手前に縫ひ目を中央にして、影襞を二等分して左右に附けます、中央の縫目を影襞にして左右の交互に影、表の標をつけ、襞數の半分だけの標をつけて表襞の所を前中心と定め、スカート布を眞半分に折つて反對側の折り目を後中心と定めます。縫目の線から後中心へと襞の標をつけてから切襞にします、前後の中心へも糸標をつけておきます。

襞の疊み方　スカート布を表へ返し、山の線の影襞の方から水ブラシで濕して直接にアイロンを當てゝよく



第二十四圖

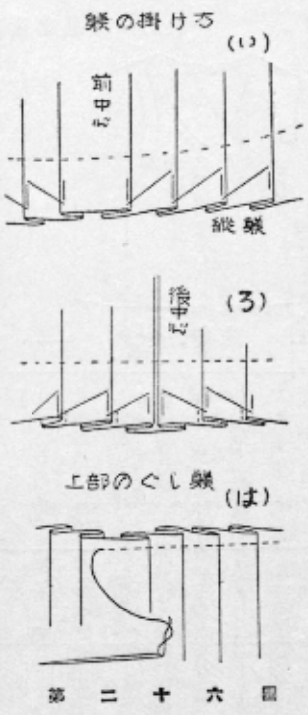


第二十五圖

水氣のとれるまでかけます。全體に折り目をつけて襞は裾から掛けはじめ、影襞の切襞から八粍づらせます。

つまり第二十六圖(ろ)のやうに表襞が上よりも八粍廣くなるのであります。

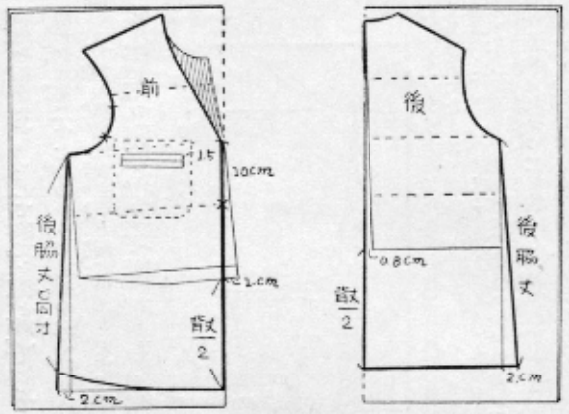
それから上部にぐし襞をかけて折り山は返し針にします。スカートの中へ鍍臺を入れて兩端の折り山に待針を打ち、スカート布を張らせ當布をあてて水で濕し、アイロンを丁寧にかけます。全部かうして裏からも直接にアイロンをかけ、濕氣を取去ります。



第二十六圖

スカートの附け方　スカート布とスカート吊との前後中心をよく合せて、スカート吊の方を四粍縫ひ代を深くして外表になるやうに八粍に縫ひ、スカート吊布の縫ひ代で縫ひ込みを包み、落しミシンをかけ、折りは吊布の方へ倒します。仕上げはアイロンでして、胸明にスナップをつけます。

裏附セーラースーツ



第二十七圖

地質は表地にサージ、セル、等を用ひ、裏地には新毛を多く用ひます。

製圖の仕方

單セーラーの製圖をそのまゝつかつても宜しく、又次の樣に製圖しても宜しいのです。

後身　型紙用紙を第二十七圖のやうに二つに折り輪の方に後原型の中心の衿刳の角を合せ、下の方は背丈の處で八粍だけ原型を離して重ねます。そして丈を原型の背丈より背丈の二分の一寸法だけ下げて横へ直角に裾の線を引きます、脇は原型の脇線を裾まで下げて裾で二糎開かせ、原型の袖刳の角へ斜の線を引き、これを後脇線とします。

前身　後身型と同じやうに型紙用紙を折り、前原型の第二線を型紙用紙の輪の端に合せ、前下りの處では原型を一糎出して重ねます。それから後と同じく丈を前下りから背丈の二分の一寸法だけ長くして横へ直角に

裾の線を引きます。次に原型の袖刳下から垂直に裾まで線を引き、裾で二糎開かせ、原型の袖刳の角から斜に脇線を引きます。そして脇丈を後と同寸にして残りの分は裾で切り上げて裾幅の中央へ曲線を引きます。

前衿刳は第二十七圖のやうに衿刳の深く繰り込んだ處と第二線の前中心とに線を引いて衿刳を裁ち落します。

袖

大體の製圖は女兒服と同じであります。型紙用紙を縦二つに折り、第二十八圖のやうに上の角から七糎乃至八糎を計つて點を打ち横へ線を引きます。次に右上の角から今引いた横線上へ斜に附寸法を計つて斜線を引きます。この斜線を二等分して上は一糎二粍の丸み、下は反對に一糎二粍刳り込んで曲線を引きます。この線が前身頃につく内袖の線になるのであります。

第二十八圖

外袖線になります。

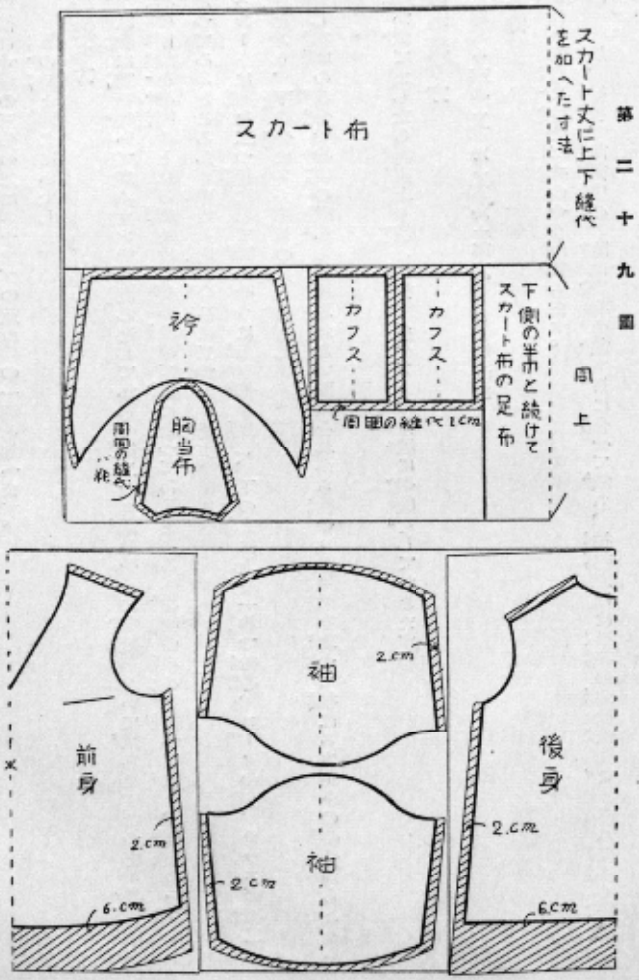
袖丈は上の端から袖山丈に二糎加へた寸法を計つて横に線を引き、附寸法の點から下へ眞直ぐに線を下げます。

袖下の線は袖先で二糎狹くし、袖下の斜線で二糎計つて袖口の中央へ曲線を引いて袖口線とします。

カフスの丈及び幅は適宜好みによつて定めても宜しいが、型紙を作る時は幅は袖口寸法の三分の一とし、長さ

第二十九圖

表用布の裁ち方



同上

は袖口寸法の三分の二にスナップの重ね代の一糎を加へます。

衿　單の時と同じにいたします。

布の裁ち方

毛織物は霧を吹いてアイロンで地直しをしてから、第二十九圖のやうに型紙をおいて裁ちます。つまり身頃は布の兩端を身幅のとれる幅だけに折り曲げて輪になつてゐるところへ身頃の中心を揃へて取り、眞中の一枚になつてゐるところから兩袖を向ひ合ひに二つとります。

スカートは布を二つ折にして圖のやうに上下切り離し、下の方は上の一枚で衿布、ヨークの布、カフスの布二枚をとり、下の分はスカートの足し布とします。

若し布幅の都合で身頃の間から袖の取れない時はそれから衿やヨーク等を取つて袖はスカートの半分からとります。

布が裁てましたら出來上り線と合標、ポケットの位置に切鋏をしておきます。

裏地の積り方

$$\text{裏地}=\text{身丈}+\text{袖丈}+\text{裾丈}+\text{裾}(\text{約}10\text{cm})=\text{總用布}$$

裁ち方

裏はみな表に合せて次のやうに裁ちます。

身頃　肩、衿刳、前後中心、脇は表布の裁ち目に合せて裁ち、袖刳だけは裏布の方は表布よりも八粍多く縫代を附けて裁ちます。袖は切斜通りに裁ちます。

袖　袖下、袖先は表布通りにしますが、袖附の部分は表布よりも八粍廣く裁ちます。

衿、胸當布　表布通りに裁つてから、周圍を薄地の場合は二粍、厚地の場合は四粍裏の方を狹くします。

カフス芯　出來上り線の折りに裁ちます。

ポケット　胸ポケット二枚、スカートの脇ポケット二枚。

ポケットの袋布の取り方

前身ポケットの位置の裏側へ紙をしいてポケット口の斜線を點線器で寫し、この口を中心にして上に二糎、左右へ二糎づゝを計つて線を引きます、上はポケット口と平行に、前は前中心と平行に、脇は脇線にならつて少し下の方で開かせます、深さは口寸法に三糎加へただけにして底の兩角は二糎の丸味にします。

縫方

總裏附の時は表は袖附や脇縫、肩の縫目などを皆割り、裏は片返しにします。袖附は表袖と、身頃の表裏と三枚を一緒に縫つて、裏袖を後からまつりつけます。

その他の縫ひ方は大體單衣の時と同じであります。

男兒服（ブラウスとズボン）

この服は普通寒先から秋口までの服裝ですが、冬季でもこの上に上衣かセーターを着用すれば宜しいので、春

夏秋冬いつでも用ひることが出來ます。

ズボンもブラウスも腰へゴムテープを入れて着用に都合よくします。ズボンを紺サージのやうなもので作つておいて、ブラウスだけ季節によつて取り替へるやうにします。

ブラウス

用布

夏季用　綿、ポプリン、トブラルコ、富士絹、スポンヂクロス、等。

冬季用　サージ、セル、メルトン、ネル等でなるべく無地物で色は白か、薄色がよろしい。

積り方と附屬品

積り方

ヤヒヂル寸法　袋身丈×二倍＋袖丈＋衿巾＋縫ひ代（20cm）＝總用布

附屬品　釦……直徑一糎の裏穴具釦五個、直徑八粍の飾釦二個。

スナップ……八個。

白のゴムテープ……腰廻りの取寸より一割五分短いもの。

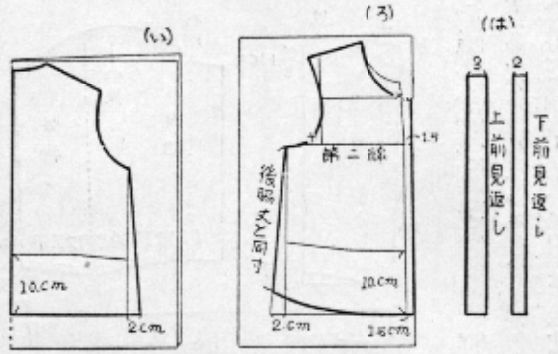
標準寸法　六、七歳。

背丈　二八糎

身丈　五六糎

胸圍　五六糎

袖丈　四二糎



第三十圖

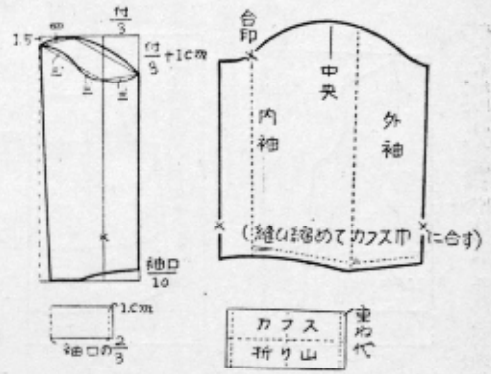
製圖の仕方

後身　型紙用紙に後原型を寫し、第三十圖(い)のやうに丈は背丈から八糎乃至一〇糎位長くして裾の線を引き、腰の線は裾で二糎開かせます。

前身　(ろ)圖のやうに前原型の中心第二線以下を型紙用紙の端から前巾なりの分として一糎五粍離して寫し、衿刳を第一線まで引き下し前身丈を後と同じ寸法だけ長くして裾の開きも同じにします。

見返し　(は)圖のやうに上前見返し布の幅は三糎に、下前見返しの幅は二糎にして丈はどちらも第一線から裾までの寸法より二糎長くします。

注意　衿附の合標をはつきり第一線の前中心につけ、前袖刳にも袖附の合標を附けて、それから型紙を裁ち切ります。



第三十一圖

袖

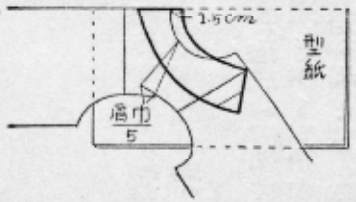
第三十一圖のやうに大體女兒服の袖と同じにすれば宜しいので、袖山丈からカフス幅だけ短くして、袖刳寸法は女兒服の場合は附寸法の三分の一に二糎加へましたが、このブラウスのやうに運動用の場合は刳り方を淺くするため附寸法の三分の一に一糎を加へます。

次に袖下の線で袖先から六糎を計つて袖明の標をつけます。

カフスの幅は袖口寸法の三分の一として長さは袖口寸法の三分の二にスナップの重ね代一糎を足しただけの寸法にします。

衿

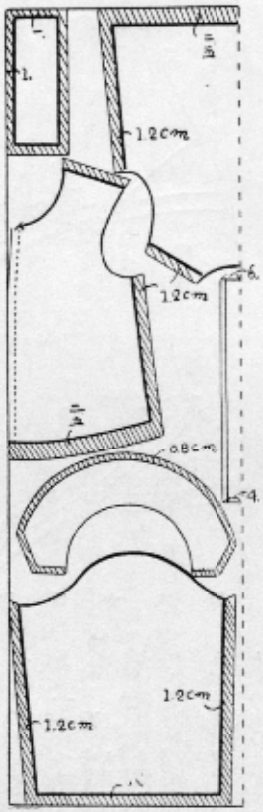
女兒服の時のやうに型紙用紙を二つ折にして、その輪の五分の一だけ重ねます。それから後衿刳より一糎五粍出した點から前中心第一線へ向けて衿刳をします、衿の形は第三十二圖のやうに角を三角に落します。



第三十二圖

布の裁ち方

布を中表に縦に折り、第三十三圖のやうに型紙をおき、後中心は輪の所から裁つやうにします。型紙をピンでよく留め、周圍と合標を正しく寫し、型紙を取りはづしてから縫ひ代の線を引いて鋏を入れます。白サージの場合は白チヤラコで標をつけ、裁ち終つたらはすぐ上り線と合標に切り鋏をつけておきます。



第三十三圖

縫方

袖

袖下を明寸法だけ殘して袋縫にして縫ひ目は內袖の方へ倒します。次に第三十四圖(いのやうに袖明の左右の縫ひ代に四粍の切り込みを入れ、(ろ)圖のやうに內袖の袖明の縫ひ代は上り通りに三つ折りにしてまつり縫にし、外袖は袖明の縫ひ代をそのまゝ持ち出しにしますから、出來るだけ細く三つ折にしてまつりつけておきま

ず。

次に袖先をカフスの長さだけに縫ひ縮めて袖口の裏側へカフスの表側を合せて縫ひ、それからカフスの兩端を縫つて表に返し、表側へ飾ミシンをかけます。

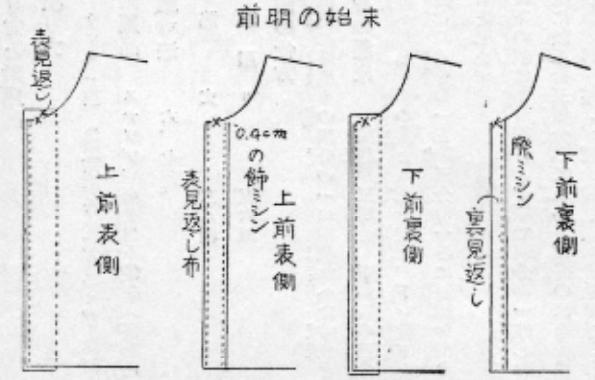
前明の始末　上前は第三十五圖のやうに見返し布を裏側につけて表に返し、端を折つて兩端に四粍の飾りミシンをかけて表見返しになるやうにつけ、下前は圖のやうに裏身返しになるやうにつけます。

第三十四圖

衿附　衿を中表に合せて廻りを縫ひ、角は縫ひ代を淺く切つて表に返します、衿は身頃とバイヤステープで挾みづけにするので、先づ身頃の中心と衿の中心とを合せて、前端は衿附の標まで附け、衿の裁ち目にバイヤステープを合せて、前端は見返しの所から一縫ひ代だけ出しておきます。バイヤステープは上り幅六粍にして身頃にまつり縮にし、兩端の裁ち目は上り通りに折つておきます。

脇　脇は袋縫にして縫ひ代は後身へ倒します。

裾　裾を上り通りに折つて際ミシンをかけます。この折り返しの幅はゴムテープの幅よりも少し廣くいたします。



第三十五圖　前明の始末（ブラウスとズボン）

袖附　袖と身頃の合標を合せ、袖下の縫ひ目が身頃の脇縫の縫目と合ふやうに左袖の方から先きに附けるので、斜布を三糎幅に裁ち切つて身頃の袖刳の裁ち目に合せて三枚一緒に縫ひ、この斜布で縫ひ代を包んでまつり縮にします。

仕上げ　よく霧を吹いて仕上げをし、縮にゴムテープを通して兩端をしつかり止めておきます、それから前明に貝釦をつけ、カフスにはスナップを二つづゝ附け、最後に衿に飾り釦をつけて出來上りとします。

ズボン

用布の地質

夏季用　ポプリン、ギンガム、富士絹、麻、アルパカ、サージ、綿サージ等。

冬季用　サージ、メルトン、ベルベット等。

積り方と附屬品

積り方

ヤシダル圖（型紙寸法＋12cm）×2＝總用布

附屬品　スナップ、ポケット袋布（夏季用キャラコ、冬季用新毛）ゴムテープ。

標準寸法　六、七歳。

脇丈	二八糎
腰廻り	五六糎

製圖の仕方

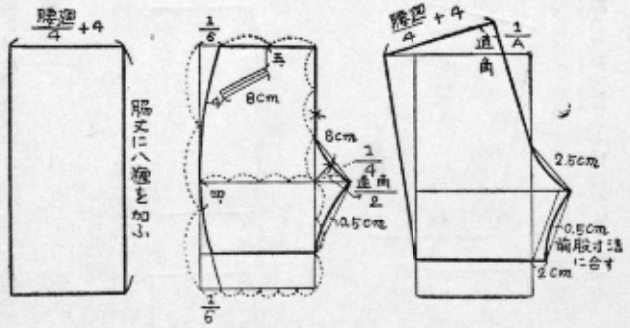
横線に腰廻りの四分の一に四糎加へた寸法を引き、縱線に脇丈に八糎加へた寸法を引いて長方形を作ります。

前身の製圖　縱線を三等分し下からの三分の一に四糎加へて横に線を引き、この線を幅の四分の一だけ更に右へ伸し、この線より上を股上、下を股下とします。

裾口の六分の一と脇三分の一とに斜線を引き、股下の丈を三等分して三分の一だけ短くしてこゝをズボンの裾口とします。

股下の刳は今の裾口と、幅で四分の一伸した所とに斜線を引いて中央で五糎刳ります。

次に股上を三等分して上から三分の二までは眞直ぐに、それから曲線で刳の線を引きます。この刳の線上へ、直角（幅を伸した線と縱線との直角）を二等分した線を伸して標し、この標から八糎上へ前明の標をつけます。



第三十六圖

男兒服（ブラウスとズボン）

す。

次に脇の線の上で横幅の六分の一だけ横線を狹くして上から前股上三分の二のところへ斜線を引いて中央で八糎の丸味をつけ下へつゞいて仕上げの線を引きます。

ポケットの位置は上から五糎下げ、脇線から四糎離して斜横に口寸法を計ります、口寸法は四歳で八糎位にします。

後身の製圖　前身を基として引きます。

裾口は前身よりも裾のところで二糎廣くし、股下股上界のところは横線で二糎五粍廣くして斜線を引いて前股寸法をこの斜線にうつし、多い寸法だけ上の所でおとします。

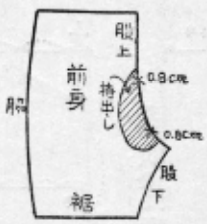
股上線は上のところで横幅の四分の一左によせ、前股上の刳り始めの所、つまり股上の三分の二のところとに斜線を引いて上の方へ六糎位斜線のまゝ突き出しておきます。

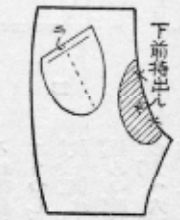
次に前の上の基礎線を左へ引き伸し、股上の斜線の角が直角になるやうに基礎線の延長線に尺度を當てゝその寸法が腰廻りの四分の一に四糎のゆるみを足した長さになるやうに工夫して斜

婦人圖

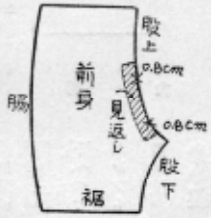
線を引き、後脇線は基礎線の下角へ斜線で引きます。

附属布





第三十七圖



第三十八圖

深さは口寸法より四糎長くします。

シック

後身の型紙より寫し取ります。幅は上り脇下の二分の一寸法にします。

前明の持ち出し、見返しは第三十七圖のやうに前明の曲線に合せて寫し取り、持ち出しは幅の上りを二糎五粍にして三日月形にします、見返しの幅は上り一糎にします、兩方共前明寸法より上下で八粍づゝ長くします。

ポケット袋布を左右四枚取ります。

布の裁ち方

第三十八圖のやうに縫ひ代をつけて裁ち、ポケット口布は幅は裁ち切五糎に、長さは口寸法より四糎長くします。袋布の當布は幅は裁ち切五糎に、長さは口布と同じ寸法にします。

縫方

ポケットの附け方

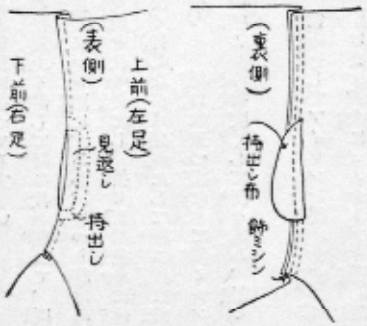
セーラー服の上衣ポケットと同じやうに兩玉縁ポケットにします。

前明の作り方

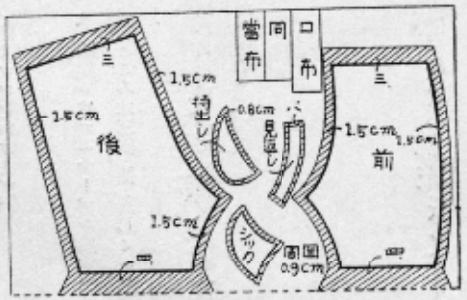
明きの部分を殘して左右を縫ひ合せ、折りは左足の方へ倒します。

次に第三十九圖のやうに上前に見返しを上り幅一糎につけ、下前の持ち出し布は中表に合せて縫ひ返しておき、上前と同じやうにつけます。

股上、股下の縫ひ目へ四粍の飾ミシンをかけ、縮けて明き止めにミシンで閂止を丈夫にします。



第三十九圖



第三十八圖

後身

股上をよく伸して縫ひ、縫ひ代はアイロンで割つ

ても前身と反對に折つても宜しい。

シックの後股上も伸して縫ひ代を割つて、周圍を上り輪通りに折り、シックと身頃の股上とを中綴ぢしてシックの周圍をミシン附にするか、まつり結けにします。

脇縫　兩脇を伏せ縫にし、折り目は前身に折れるやうにして表から四粁の飾ミシンをかけます。

股下　よく伸しながら袋縫にして縫ひ代は前身へ倒します。

裾、腰廻り　裾口は三つ折にして際ミシンをかけるか又はまつり結にし、腰廻りはゴムテープを通すためにテープの幅より心持廣くして折り込み、際ミシンを掛けます。テープを通すところは三糎位落しミシンにします。

仕上げ　當布をしてアイロンを掛けます。畳み方は股下の縫ひ目と脇の縫ひ目とを合せて、前身、後身へ折り目の筋を附けます、次にゴムテープを通し兩端は重ねて丈夫にからげておきます。

ジャンパーとブラウス

ジャンパー

ジャンパーは一番汚れ易い衿や袖がなく、下に着るブラウスだけを時々洗濯すればいつも清潔にサツパリとした容姿を保つことが出來ますので、通學服として最も理想的であります。

圖十四

型は第四十圖（いのやうにワンピース型にして兩脇に箱襞を取る場合、（ろ）圖のやうに上半身をセーラーのスカートのやうにして下半身を折り襞にする場合、或ははは圖のやうに上下の切替線を胸にして袷剃を角型にあける場合、又は（圖のやうな型など種々ありますが、裁ち方も積り方も大體前のセーラースーツのブラウス、スカートの縫ひ方を應用すれば宜しいのですから、こゝにはは（圖のやうな型について說明します。

何れも布地は夏用には薄地の毛織物で作り、ブラウスも薄地のものを用ひます、冬用としては厚地の物を用ひ極く寒い季節にはこの上にハーフコートを着用します。

このジヤンパーはブラウスとの色の調和をよく注意しなければなりません、一般的にはブラウスよりも濃い地色のものが適當であります。

用布の地質

ギンガム、ポプリン、サージ、セル等。

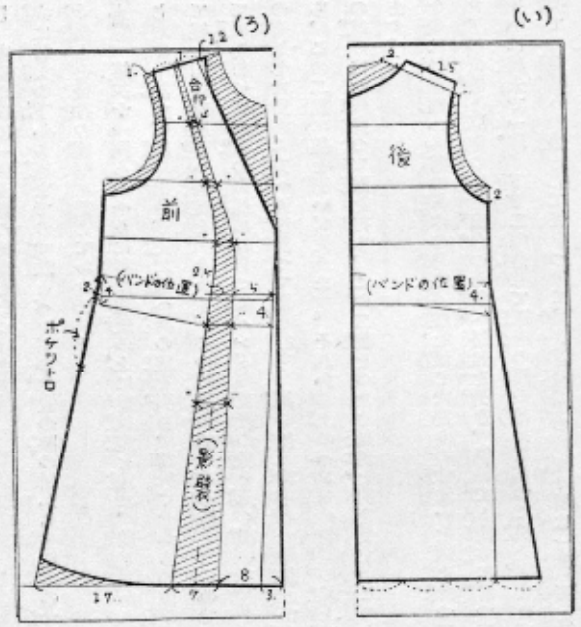
用布の積り方

ジヤンパー　（着丈十縮折り返し）×2＝總用布

ブラウス　着丈十縮折返し＝總用布

附屬品

ベルト一本、幅四糎位のもの、スナツプ三箇、バイヤステープ　ポケツト布及び見返し布、持出布として新毛二五糎。



第四十一圖

製圖の仕方

後身　第四十一圖（いのやうに後原型を型紙に重ねて背丈の線を長く引き下げて着丈を計つて横へ裾線を引き、脇は原型の線を縫線まで引き下げ、裾の開きを三分の一寸法にします。

バンドの位置は原型の脇の下から上へ四糎上つた所にして横へうすく線を引いておき、この點から裾の開きへ斜線を引いて、バンドの位置から上は原型の脇の線をそのまゝ用ひます。次に袖剃の上で一糎、下で二糎計つて點を打ち原型の袖剃にならつてドレスの袖剃を引きます。

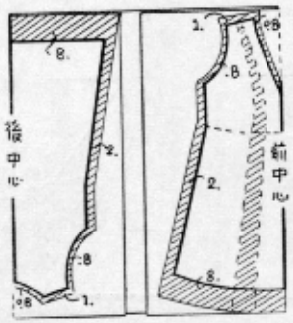
衿刳は衿肩から二糎計つて後中心では衿刳と第一線との中央へ點を打つて肩から曲線で衿刳にならつてくり落し、左肩だけに一糎五粍の持出しをつけます。

次に背丈の下から裾までの寸法とバンドの位置の臨の所から袖刳迄の寸法と同じくバンドの位位から裾までの寸法とを後身の型紙に記しておきます。

前身　第四十一圖(ろ)のやうに型紙用紙の上に前原型を重ね、前下りから下へ後身の背丈から裾までの寸法と同じだけを計つて線を引き、更に横へ裾の線を引き、前胸ぐせから四糎下げて點を打ち、裾の線で三糎右へ計つて線を引いた所とへ斜線を引きます。この斜線が前の中心線となるのです、次に前下りから上へ四糎各々計つて點を打つて原型の裾線にならつてバンドの位置の線を薄く引いて置き、前中心の斜線とバンドの位置の線との交叉した所から左へ五糎計つて點を打ち　裾の線と前中心の斜線とが出合つた角から左へ八糎計つて點を打ち、この二點に線を引いて置きます。それから上のバンドの位置の線上で又左へ二糎五粍計つて點を打ち、裾の線では七糎計つて點を打ち、この二點をつなぐ斜線を引きます。この七糎幅だけが影襞の分となるのであります。

今度は後裾幅から前の眞中の裾幅八糎を減じた殘りの寸法一七糎を計つて前裾幅の全體を定めて點を打ち、バンドの位置と原型の腦と出合つた所へ斜線を引き、後脇丈と同寸に計つて裾を切り上げます。

袖刳は肩先で一糎、下で二糎落して原型の腦の線にならつて線を引きます。肩幅は後幅より一糎廣く計つて中央で一糎摘みの分として標をつけて置き、前肩幅の衿刳の所は一糎二粍右によつた所から前中心の第二線、つまり胸ぐせから四糎下つた所へ斜線を引き後で肩先へと曲線で仕上げ線を引きます。前は三角に大きく明けます。肩幅の中央の一糎幅の兩點とバンドの位置の二糎五粍の點へそれ〳〵圖のやうに曲線を引きます、それは前胸の斜線と袖刳の線とに平行するやうに上から引き下げ、第一、二、三線と原型の前下りの所と更に前下りから一〇糎ほど下げた所とに各々左右の線へ合印をつけておきます。一〇糎下つた合印から下は襞になり、上の方は左右を縫ひ合せにいたします。



第四十二圖

ポケットはバンドの位置から二糎下げ、口は一一糎にします。

前後とも型紙を取りましたら、前身の中央の襞及びくせの二線を摘むやうに折りながら鋏の先で少しづゝ切り落し、小さな穴をあけておきます。合印の所は十の字に切り込んでおいて、布を裁つ時この穴からチヤコを布の上に引き寫します。

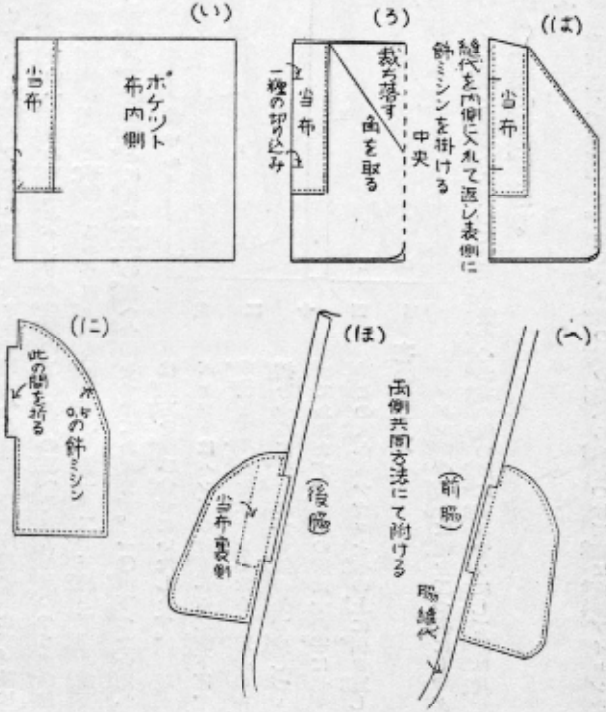
布の裁ち方

シングル幅の場合は幅を二つ折にし、ダブル幅の場合は第四十二圖のやうに幅を兩方から折つて前中心後中心が布の輪の所に當るやうにして縫ひ代をつけて裁ちます。そしてそれ〳〵要所に切躾をします。

縫　方

前身の折山線を切躾通りに折つて折り目の影の方から水をつけて布に直接アイロンをかけ、襞の分だけ殘して

右脇ポケットの附け方



第十三圖

上部は合標を合せて裏側から縫ひ合せ、折り目は前中心へ倒して置きます。つゞいて影響の折り目も裏側から水で少し濡してアイロンを布に直接當てゝよく折り目をつけます。

四　次に前身の左肩に裏身返し布をつけ後身左肩の持出の裏へも前と同じやうに裏見返し布をつけます。右肩は

縫ひ合せて縫ひ代は前へ倒します。

次に前後の衿刳をつゞけてバイヤステープで見返しをつけますが、幅は六粍位の出來上りにいたします。右脇にポケットをつけ、(第四十三圖參照)ポケット口から上と下の脇を縫ひ合せ厚地のものは袋縫にして縫ひ代は前へ倒します。左脇も縫ひ合せ折は前に倒して裾を出來上り通りに折つて水ブラシで布を濡して折り目をアイロンで落ちつかせて細かくまつるか際ミシンをかけます。それから今一度前の襞に當布をして水ブラシで當布を濡して仕上げをしておきます。

袖刳は衿刳と同じやうに六粍幅の見返しをつけます。

仕上げ　ブラウスと同樣當布を當てゝ當布を濡して丁寧にアイロンを掛けます。

ブラウス

積り方と附屬品

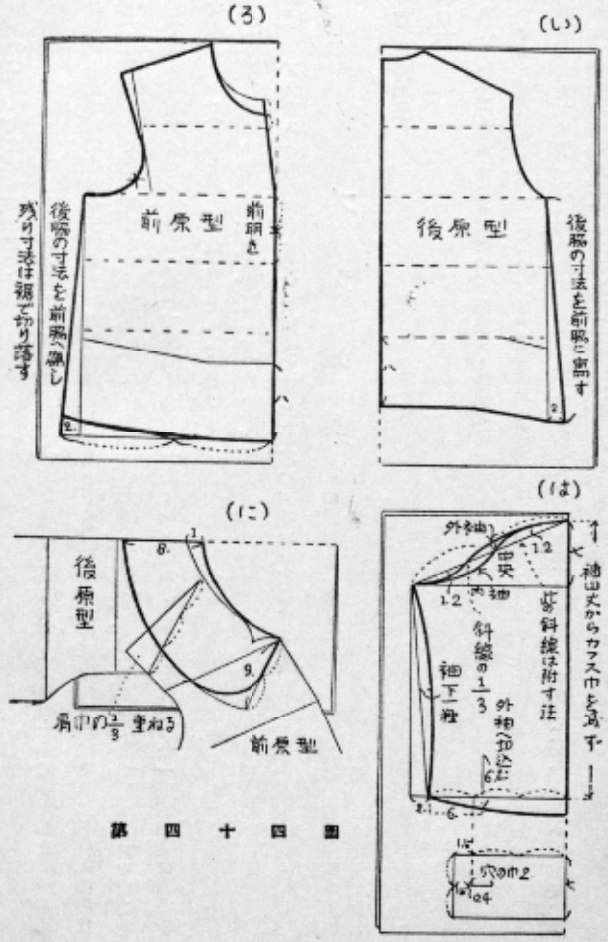
積り方

タ　ツ　ル　布　身丈＋上下縫ひ代＋袖山丈＝總巾布

ヤ　ヤ　タ　ル　布　(身丈＋上下縫ひ代)×2＋袖山丈＋衿布＝總巾布

附屬品　カフス釦一組、衿の鈎ホック一組、飾リボン約七〇糎(一吋幅)、スナウブ二個、ゴムテープ五〇糎。

ブラウスと同色又は淺色の新毛約二〇糎位(衿裏とカフスの芯及びバイヤスに用ふ)



第四十四圖

製圖の仕方

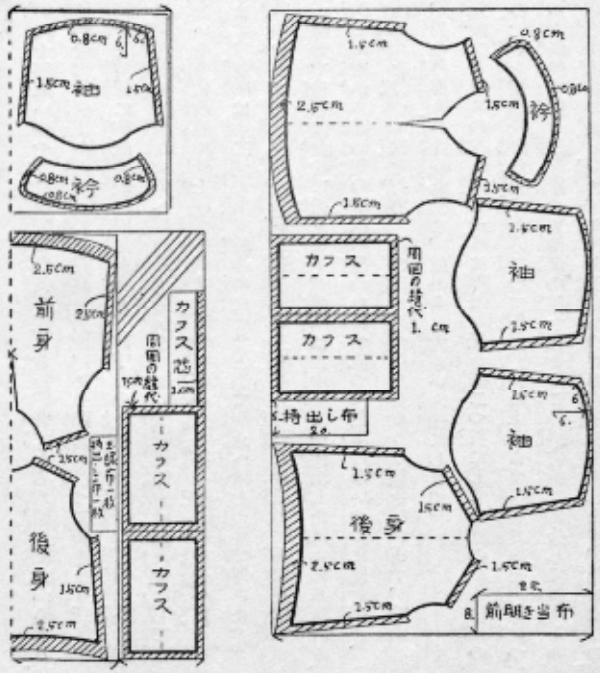
後身　第四十四圖(いのやうに原型を型紙用紙に重ね、背丈から八糎、脇丈からも八糎下げて裾の線を引き、脇で二糎開かせ、袖刳下の角とへ斜に脇線を引き、この脇丈を計つておきます。

前身　後身と同様に型紙用紙に原型を重ね、前下りの下から八糎下げて横に裾の線を引き脇の線を裾まで下げて裾で二糎開かせて袖刳の角へ脇の斜線を引き、この斜を後脇丈寸法だけにして裾を切り上げ、裾幅の中央へ角ばらないやうに曲線で仕上げます。次に原型衿刳の角と第一線との中央へ點を打つて(ろ)圖のやうに衿刳を切り下げます、前明は第二線と第三線の中央までとして明止へ印をつけて置きます。

衿　(に)圖のやうに前後の原型の肩で後肩幅の三分の一寸法だけ重ねて型紙用紙に重ね、前中心の胸ぐせの上の所を第一線まで衿刳に合せて折ります、衿幅は後中心で一糎出した所から八糎計り、衿附の曲線は一糎後中心から出した所から前衿刳の型紙の折つた所へ向つて無理のないやうに線を引き、この曲線の上で前後型紙の衿刳寸法の和を計つて點を打ち、その點が直角になるやうに線を引きます、前中心の衿幅は後衿幅より一糎廣くして、衿の外廻りの曲線を描き、前の角は大きい丸味にします。

袖　男兒服ブラウスの袖と同じやうに型紙用紙を縦二つ折にしては圖のやうに上の端から袖山丈三四糎からカフス巾の七糎を減じた寸法を上から計つて横し、更に上から山の高さの七糎を計つて横に線を引きます。上の角から斜線で附寸法を計つて袖口の線へ合せ、この斜線を二等分して各々その中央點で上も下も一糎二糎の丸味でくり込みの線を引き、これを前身へつける内袖の線とします、外袖はこの斜線を三等分して、この點

ブラウスの裁ち方

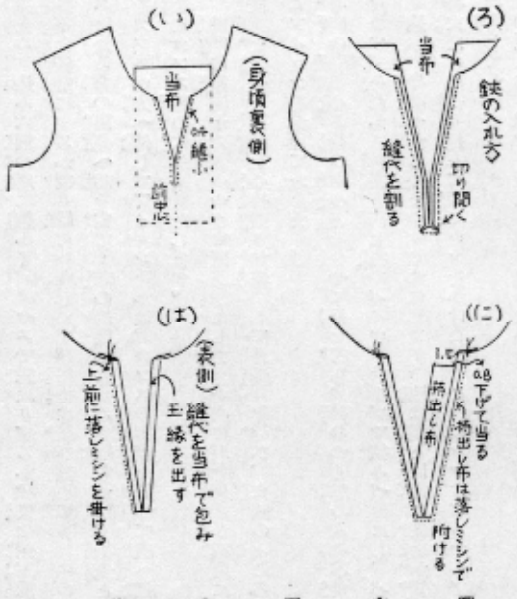


第四十五圖

第四十六圖

を通して圖のやうに内袖の下の角から曲線の上を通つて引き初め、凡そ曲線の中央位から上の方へと引き継して三等分の點を通つて内袖の丸味の中央のところで合せて、こゝからは内袖と同じ丸味の線の上を通るやうに引きます。袖先の方は、袖下によつた方で二糎落し、袖先で二糎出して袖下へ曲線を引きます。袖下は中央で一糎くり込みます。

前掛きの作り方



第十四圖

かうして型紙を作つてから外袖の方で袖先で袖下から六糎入つたところに六糎の切り込線を入れます。

カフスの幅は七糎にして、横へ袖口寸法の三分の二の寸法を計り、更にそれへ一糎五粍を入れて長方形にします。釦穴の位置はカフス幅の中央で一糎五粍入つて二糎幅に穴の印をします。

布の裁ち方

縫ひ代の取り方、型紙の置き方は第四十五圖のやうにします。

縫方

袖　袖先の切込み六糎の所に細かくバイヤスで縁取りするか、又は兩玉縁にして落しミシンをかけても宜しい。次に袖下を袋縫にするか割り縫にいたします。袖先は縫ひ縮めてカフスの出來上り幅に合せて、カフス布の表カフスになる方の裏側へ芯を當てゝ芯の周圍からかるく綴ぢつけ、袖先と表カフスとを中表に合せて縫ひ、縫ひ代をカフスの方へ倒してアイロンをかけ、カフスの兩端を縫つて表へ返し、カフスの奥はまつりぐけにします、次にカフス釦の穴かゞりをします。

身頃　前明は第四十六圖のやうに兩玉縁にします。次に肩を袋縫か割縫にして、折は前身へ倒します。衿の表裏を合せ、裏布を心持張り加減にして外廻りを縫ひ、丸味のところは縫ひ代を淺く落して表へ返し、裏衿からアイロンをかけておきます。次に身頃の背中心と衿の中心とを合せて針を打ち、衿のつく方の八糎不足は衿の方を伸して張り加減にして鞍でつけます。それから衿裏と同じ布のバイヤステープで挾みづけにし、バイヤスの幅を六糎上りにして裁ち目を折り込み、身頃へかるくまつりぐけにします。脇は肩と同樣に袋縫か割縫にして縫ひ代は前身へ倒します。裾を身丈だけに折り返して際ミシンをかけます。このミシンはゴムテープを通す口を三糎位はづして表身頃にだけ落してかけます。

袖附　身頃の脇の縫目と袖下の縫目とを合せて内袖の方へ前身頃を當てゝ左袖から先につけます。先づ淺く鞍をかけてよく袖のつり合を見てから幅三糎のバイヤステープを身頃の方へ當て、三枚一緒に袖の方を見て縫ひます。そしてバイヤスで縫ひ代を包んでまつりぐけにします。

仕上　アイロンで仕上げをして衿の合せ目に鈎ホックを、前明にスナップを二ケ、袖先にカフス釦をつけ、次にリボンを適當に結んで上前明の角へとぢつけます。裾へはゴムテープを通し、テープの端は二糎ほど重ねてよくからげおきます。

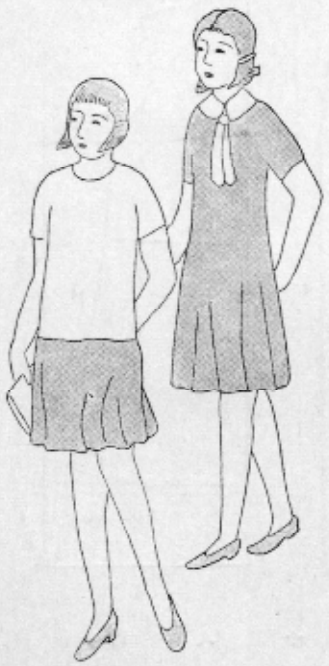
サーキュラースカート

サーキュラースカートは子供服から婦人服にまで廣く用ひられる型で、袖や衿の型を替へたり又胴の切替を好みによつて種々工夫しますと面白い感じのよいものが出來ます。

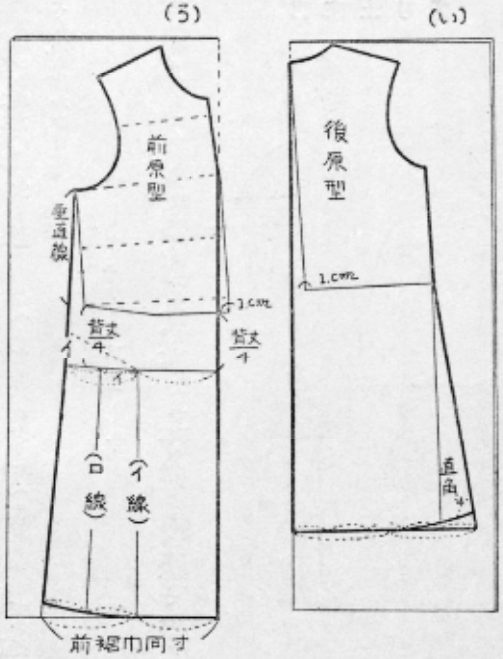
用布の地質

地質は何でも宜しいが用布は他の型よりも割合多く要ります。

出來上り圖



第四十七圖　サーキュラースカート



第四十八圖

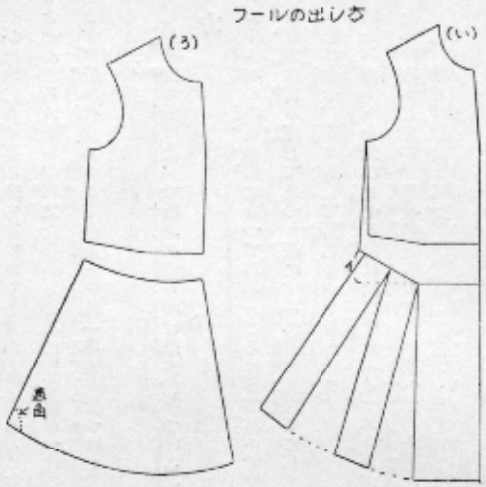
袖刳、肩、衿刳は原型通り。

製圖の仕方

製圖の仕方はいろ〳〵ありますが次の方法が簡單であります。

後身　型紙用紙の上に第四十八圖(いのやうに肩を上げて、背丈の線のところで一極用紙の端より離して重ね、身丈を定めて裾線を引き、脇は原型の脇線を眞直ぐに引き下げて、裾幅の四分の一だけの開きにして脇の裾線を引き脇線の下は脇線に直角に裾の切上をします。

前身　(ろ)圖のやうに後身と反對に肩を下げて原型第二線を用紙の端に揃へ、背丈の線では一極型紙を出して重ねます、そして前下りの線から下へ四分の背丈を計り、それから後身の背丈から下と同寸に計つて裾の線を引きます。脇の方は袖刳下から垂直線を引き、矢張り背丈の線から下へ四分の背丈を計り、前下りの線にならつて横線を引きます。そして裾は後裾幅と同寸に計つて脇の線を斜に引きます。



第四十九圖

フールの出し方　第四十八圖の四分の背丈だけ下げた横線を、二等分してイ線を引き、更に左側を又二等分して口線を引きます。そしてこの二等分の一を假りに(イ)と定め、この(イ)寸法だけ脇に計つて初めの二分の一の點に斜の點線を引きます。

次にイ、ロ、の線に鋏を入れて第四十九圖(いのやうに間を等分に切開かせ、これを別の紙に寫して(ろ)圖のやうに裾線を脇線に直角に取つて型紙を切取ります。裾の開きが多いほどこの裁ち落しは自然に多くしなければな

りません。そして背丈の切換線の角ばつたところは適當に曲線にいたします。

布の裁ち方

用布が比較的多く要る裁ち方でありますから、たる可く無駄のないやうに裁ち合せをするやうにしなければなりません。スカートの目立たないところに接ぎ目をつけることは差支ありませんが、接ぎ目は必ず布目通りにします。縫ひ代はスカートの上と脇は一糎五粍位つけますが裾は四糎位にします。これ以上裾に縫ひ代をつけると三つ折が困難になります。

若し裾を折り曲げないで縁取にする時は縫ひ代をつける必要はありません。

縫方

スカート布の布目の斜になつてゐるところは伸び易いですから伸びないやうに注意します。

裾の始末は折り返してまつり縫にするか或は縁取りにします。縁を取るには共布のバイヤステープを表側に當てゝ縫ひ合せ、裏に返して落しミシンをかけます。

身頃とスカートを縫ひ合せる時は縫ひ代をバイヤステープで包むか、身頃をスカートの上に載せて上からミシンをかけるかします。又身頃とスカートの間へ別布を入れて細い線を表はしても宜しい。

その外は他の女兒服に準じて仕立てれば宜しいのであります。

四、五歳用春の女兒服

この型は極く簡單に作ることが出來る可愛らしい型であります、衿には同じ地質の白無地を用ひ、衿廻りに一糎二粍幅の糸レースを附けます。裏は半裏にして袖には全部裏をつけます。

用布と附屬品

表地はブロードクロス、オットマン、ビロード等の模様物又は無地物で餘り厚地でない柔かい地質のもの。裏地は表と同じ色の無地物、若し表地が模様物の時は地色に似合ふ無地物。

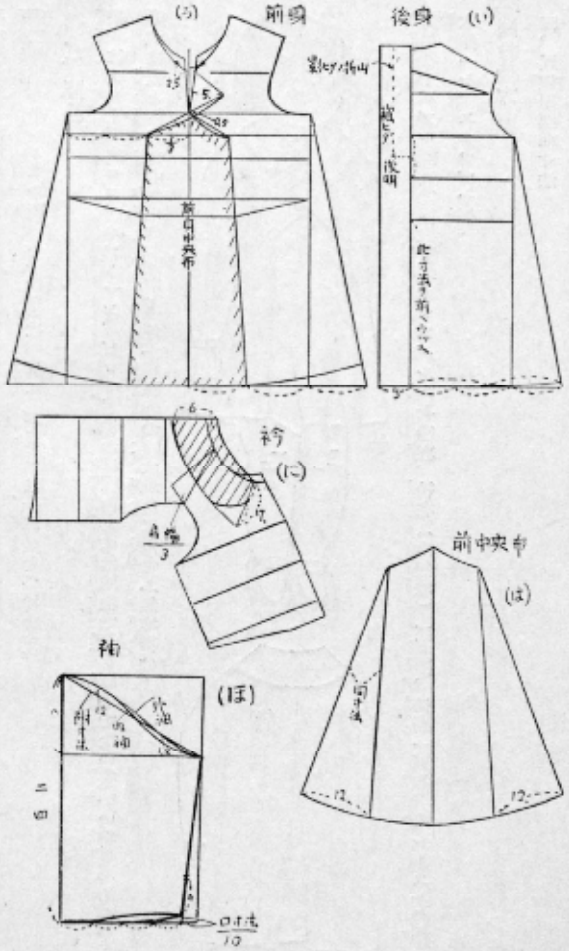
第五十圖

表用布、ダブル幅九〇糎、裏地、シングル幅七〇糎、衿布（白無地）一五糎、衿裏一五糎、糸レース七〇糎、木釦一ケ、スナップ十個。

製圖の仕方

四、五歳用標準寸法

背丈　二六糎



第五十一圖

着丈　五二糎
胸廻り　五二糎
肩丈　三九糎

後身　第五十一圖(いのやうに型紙用紙に原型を寫し、着丈の五二糎を計つて横へ裾線を引き、原型の臨線を裾線まで下げて、其の二分の一の開きにして袖刳の角から斜に臨線を引き、裾の角で一糎切り上げをして裾幅の中央へ斜線を引いて角を落します。次に後中心に箱襞を作る爲めに五糎を計つて上下に線を引きます。この箱襞の影襞の折山の左身の方に後明の標をつけて置きます。

前身　(ろ)圖のやうに前身原型を二枚向ひ合せて寫し、前中心の線を上下に長く引きのばしておきます。次に前下りから下へ後身の背丈から裾までの寸法と同寸法を計つて左右へ裾の線を引き、原型の臨丈を裾線まで引き下して後身と同樣に二分の一寸法だけ開かせて原型の袖刳へ斜線を引きます。そしてこの線に後臨丈寸法を計つて多いだけ裾で切り上げます。角を落すことは後と同樣です。

衿刳は第一線まで刳り下げ、前中心から左右へ二糎五粍づゝ計つて衿附の合標をハッキリつけて置きます。次に胸の三角は第一線と第二線との中央で五糎出して上は第一線の前中心に、下は第二線の前中心へ各々斜線を引き、第二線と第三線中央へ横線を引き、左右とも各々前中心と臨の斜線との間を三等分しておき、圖のやうに三分の一の所と第二線の前中心とへ斜線を引き、上前の三角は前中心の交叉點で五粍位の丸みをつけ、下前は上前にならつて同じやうに丸みをつけます、それから裾線は裾幅の三分の一の所に點を打つて、上は第二

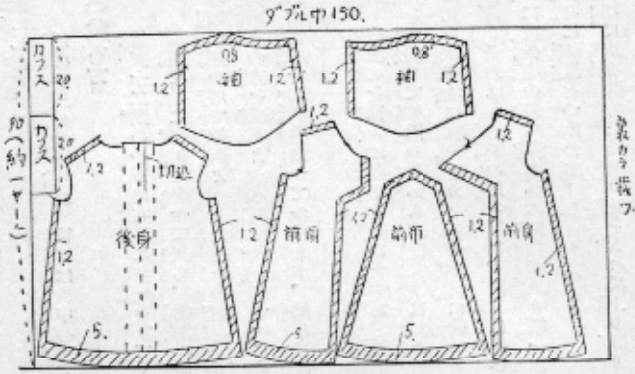
線と第三線の中央の線で三分の一のところとへ線を引いて圖の斜線の中を前中央布とします。

この前中央布の型紙を別の紙に寫しては（圖のやうに縫でフールの分を左右へ一二糎づゝ計つて標を附け、更に斜線を上の兩角から引いて、型紙の兩側の線と同寸法に縫線へ計りますが、こゝが一二糎の開きになるやうに少し動かして工夫します。かうしますと前身は型紙が三つになります、つまり上前、下前、前身中央布であります。上前には胸に三角形がつきますが下前は胸のところは原型のまゝの前中心を使ひます。

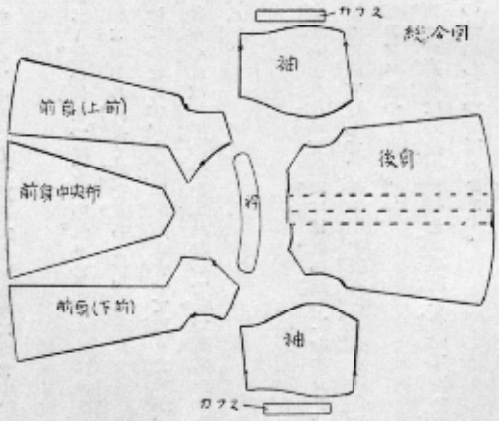
袖　袖割寸法を計り、次に裄丈寸法から背幅を減じた寸法を袖山丈とし更にカフス幅の二糎を減じます。今標準寸法によりますと裄丈が三九糎で背幅が一三糎、カフス幅が二糎ですから袖山丈が二四糎になります。

型紙を二つ折にして輪の方を左にして袖山丈の二四糎を計つて、更に上からの高さを八糎と計つて横に線を引きます。次に上の角から八糎の横線上に斜線で袖割寸法の二分の一、つまり袖附寸法の一六糎を計ります、袖先は袖口寸法の十分の一だけ狹くして斜線即ち袖下線を引き、更に袖口幅の十分の一だけ袖先の所で切り落します。この袖下線で袖先から五糎計つて袖下明の標をつけて置きます。そして袖先線を（圖のやうに曲線にして、外側を外袖、内側を内袖の袖先とします、外袖は中央から袖下線の角へ曲線で丸く引き、内袖は袖口の四分の一の所から心持割り込んだ線で袖下線の角へ引きます、この時中央で凡そ一糎位外袖口よりも離して割り込みます。

袖附の曲線は斜線の中央を境にして上下の中央で上は一糎二粍の丸み下は一糎二粍の割り込みで線を引いた方を内袖とします、外袖は内袖の曲線を基として最初斜線を三等分して置き上から内袖の曲線の一糎二粍の丸み



第五十二圖



の所から引き三等分の一の所を通つて内袖の割り込の中央部で内袖の線と出合ふやうに引きます。

カフス　左側を紙の輪にして幅二糎、長さは九

糎にします。

衿　肩幅を三分の一重ね、衿幅は後中心で六糎、前中心で七糎にして前を大きい丸みにします。

布の裁ち方

表　第五十二圖のやうに布裏に型紙を當てゝそれ〳〵縫ひ代をつけて裁ち切ります。

裏　裏布は袖は表袖に合せて裁ち、袖附の所は表袖よりも八粍長く布を裁ちます。

身頃は脇の所で袖刳よりも凡そ一〇糎位下迄つけておきます、大體は表布に合せて取りますが、袖刳は前後共裏布の方を表布より八粍位餘分につけて裁ち、後中心には箱襞の分を入れないで輪で裁ちます。

衿は別布で表裏共裁つておきます、縫ひ代は周圍八粍。

縫方

袖　表裏布を別々に袖下を縫ひますが、袖下明の標から袖先迄の五糎だけは縫ひ殘しておきます。袖下の縫ひ代を中綴して袖附の所から八糎位は別々になるやうに綴ち殘して、袖下明を表布と裏布とを合せてまつり縫にします。次に袖先をカフスの寸法に縫ひちゞめてカフスをつけます。

身頃　それ〳〵表裏の肩を縫ひ、表布は縫ひ代を割り、裏布は前身の衿布を表裏縫ひ合せて表へ返し、下前の方に裏衿布の裁ち殘りから綾地で上り幅一糎二粍の持出しをつけます。

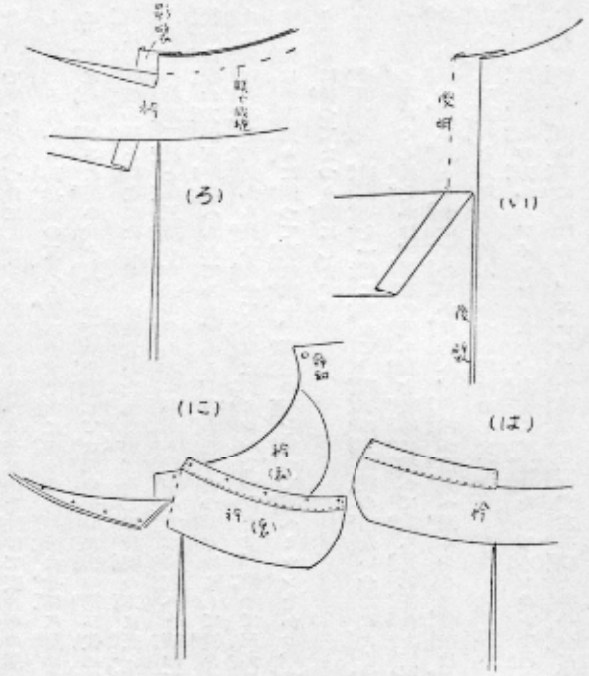
後身に箱襞をつけます。

後明に表布裏布とも切り込を入れて上り狗りに表布は裁目を一糎づゝ折つておきます。すると左身頃の箱襞の深さは一糎五粍の出來上りになります。裏布は脇で箱襞の分がありませんから五粍づゝ折つておきますが、表裏共それ〳〵明止に切り込を入れて置きます。

衿の表裏を合せて外廻りにレースを挾みづけにして縫ひ合せ表に返しておきます。

衿は上前身頃即ち右身頃にだけつけて、左身頃の方はスナップ止にします。

から、先づ第五十三圖(い)のやうに左身頃を下に下げて置いて、衿は附の縫代の中央に八粍の深さに切り込を入れ、との切り込を(ろ)圖の



第五十三圖

やうに後襟の中央、突きつけになるところに合せて上前の衿を表身頃の衿刳に糸で假附にして、裏身頃と表身頃とで衿を挟みづけにします。衿の出り込から先は衿を除けて表身頃の影ひだの一糎五粍は裏と合せ縫ひにします。それから前身頃の三角も縫ひます。次に殘りの衿半分は身頃に附けないで、別に綴布で共布を二糎幅に、丈は衿の長さに縫ひ代を足しただけ用意しては圖のやうに衿の縫ひ代に緣取りをします、この場合布の加減は右身頃の衿と同じになるやうに注意いたします、そして身頃の方は表と裏だけを縫ひ合せます、前中心は上前と同様第二線と第三線の中央の角のところから前中心及び衿刳へと續けて後中心まで縫ひます。

後明は裏の方が五粍控へられてゐますから、そのまゝまつりぐけにして置きます。

次に前中央布を内側から縫ひ合せて上部は飾ミシンでつけます、續けて三角の所も上前と下前を重ねて縫ひます。脇は表裏別々に縫つて表は割り、裏布の縁を折つて押へミシンをかけ、前布の縫ひ代へ綴ぢつけ、裾を上り通りに折つてまつり綴にします。

袖付　身頃袖刳の表裏布を一緒に重ねて、表布の方に鐵の出ないやうによく注意して綿かく裁ち目から四粍入つたところにぐし縫をかけ、裏布の裁ち目を表布に揃へて裁ち落し表袖と三枚づけにします。袖下の縫ひ目と身頃の脇の縫ひ目とを合せて外袖が後身へ、内袖が前身へ着くやうに最初は左袖の方からつけ、縫ひ代は袖の方へ倒して裏袖を八粍折り込んでまつり綴けにします。

仕上　最初裏布の方からアイロンをかけ、表布には當布をあて水ブラシで濕してからアイロンをかけます。順は衿、袖、身頃の順にかけます。スナップを後明に三ケ、右身頃と衿半分に五ケ、カフスに一ケ宛附けます。

五、婦人服の部

ブラウス

このブラウスは春先から秋口の頃まで一般に廣く用ひられる型であります。

用布

夏季用　メリンス、麻、クレープ、ポプリン、富士絹、羽二重等。

出來上り圖

第一圖

合着用　富士絹、サージ、セル等。色はスカートとの調和をよく考へなければなりません。白は大體どれにも調和しますから無難ですが、色物或は柄物はスカートより幾分薄目の同色系統のものが宜しいやうです。尚白は汚れが目立つ爲め度々洗濯の要がありますから洗濯に堪える丈夫な物を選ばなければなりません。

妻大圖

積り方と附属品

積り方

ヤッタル計　上衣丈×2＋衿の巾巾＋袖山丈＋縫代(2.5cm)＝巾巾

附属品　カフス釦一組、鈎ホック、スナップ。

標準寸法　十七、八歳。

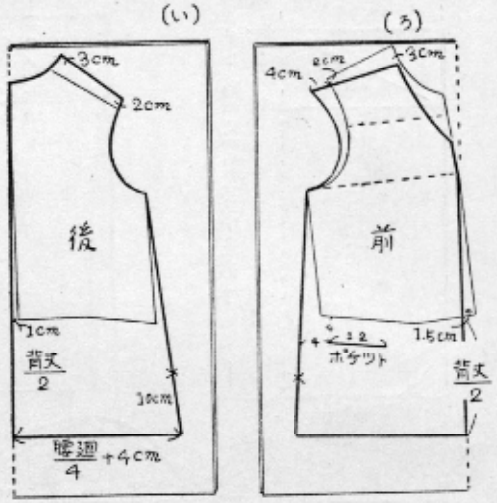
背丈	三八糎
身丈	一〇五糎
裄丈	七二糎
胸囲	七六糎

製圖の仕方

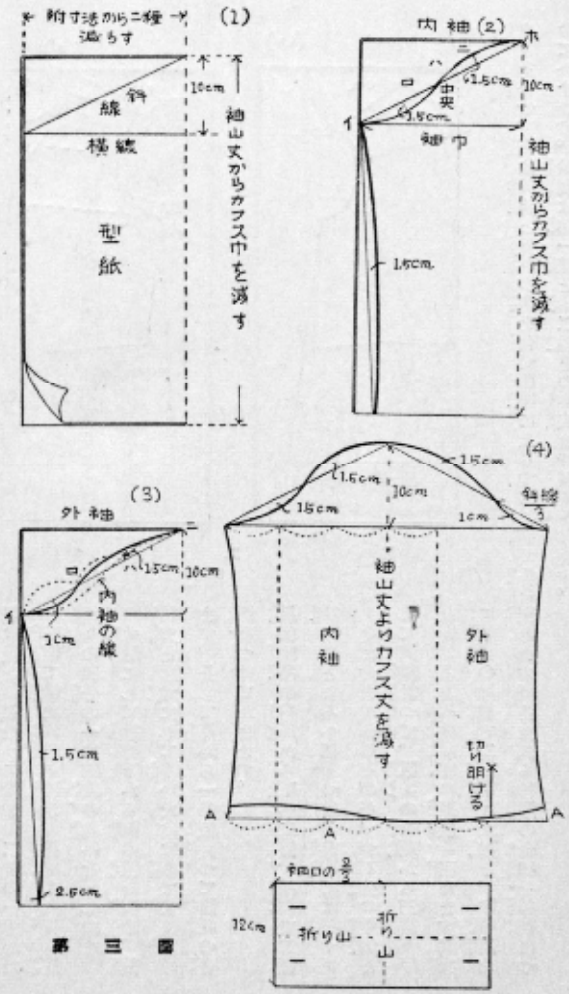
後身　型紙用紙を縦二つ折にして輪の端へ後衿刳を合せ、背丈のところは型紙より一糎内に引つ込ませて原型をうつします。そして裾は背丈の二分の一だけを背丈より長くして線を引き、裾幅は腰廻りの四分の一に四糎のゆるみを加へただけにして、袖刳から斜に脇の線を引きます。この脇線の裾から一〇糎上つたところに脇明の合標をつけます。

前身　肩は袖刳の方で二糎、衿刳の方で三糎持ち出して第二圖(い)のやうに引きます。後と同じやうに用紙を折つて、前原型の第二線の前中心を型紙の端に合せ、前中心の下で一糎五粍だけ型紙より出して原型をうつします。裾は後と同じやうに背丈の二分の一寸法だけ下げて横に縫線を引き、裾幅も矢張り腰廻りの四分の一に四糎の弛みを足しただけの寸法にして袖刳下から脇の線を引き、後脇丈と同寸にして多いだけは裾で切り上げます、そして裾から一〇糎計つて脇明の合標をつけておきます。

肩は原型の衿肩から下へ三糎、袖刳で二糎計つたところへ標をつけ、前肩にはギヤザーをよせますからそのギヤザー分の寸法として四糎計つて、原型の衿肩から三糎下げたところへ前肩幅の斜線を引きます、次に原型の袖刳で二糎下げた點と、四糎出た處とを合せ、下は脇線と袖刳の角を合せ原型にならつて袖刳の線を引きます。それから袖附の合標を袖刳につけておきます。衿刳は第一線と第二線との中央まで刳り下げます。



第二圖



第三圖

婦人服の部

ポケットの位置は腰から四糎入づたところで背丈の線より四、五糎下げた位置へ一二糎の口寸法に標します。前明は衿刳から一二糎下げます。

袖　袖山丈は裄丈から背幅を引き更にカフスの幅だけ短い寸法で、附の寸法はセーラースーツの時の計り方と同じやうに前後身頃の袖刳の端から八糎内側を計つてその二分の一の寸法を附寸法とします。

型紙用紙を第三圖(1)の寸法通り縦二つ折りにします。そして輪の角から下へ一〇糎計つて横に線を引き、この間で輪の上の角から對角線を引きます。

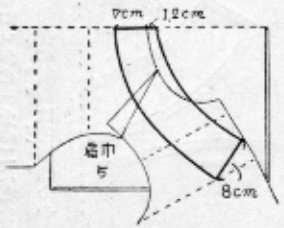
次に内袖から先きに製圖します。(2)圖のやうに前の斜を四等分して(イ)(ロ)(ハ)(ニ)の標をつけ、(ロ)の所で一糎二粍、(ニ)で一糎五粍の丸みをつけて刳り込みます。

外袖は(3)圖のやうに袖刳は内袖の袖刳を基にして、斜線を三等分して(イ)(ロ)(ハ)(ニ)とし(イ)(ロ)の中間で一糎、(ハ)の點で一糎五粍の丸味をつけて線を引きます。

袖先は二糎五粍狭くして袖下の斜線は中央で一糎五粍刳ります。

袖口は(4)圖のやうに型紙を擴げ袖先を左右別々に三等分して、内袖の三分の一の所で二糎落して、圖のやうに刳り、外袖は端をAと同寸だけ落して端から六糎入づたところへ六糎の袖先明の線を引きます。

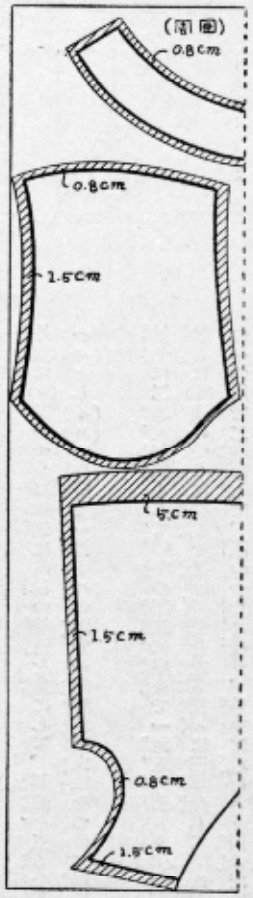
カフス　カフスは折カフスにしますから、幅は六糎の二倍の一二糎、丈は

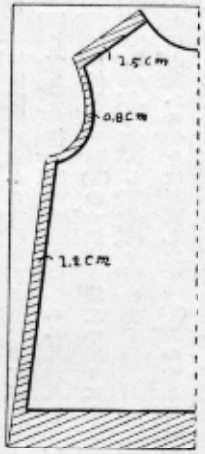


第四圖

袖口寸法の三分の二にします。

衿　衿の製圖は第四圖のやうに女兒服の場合と同じ方法でいたします。





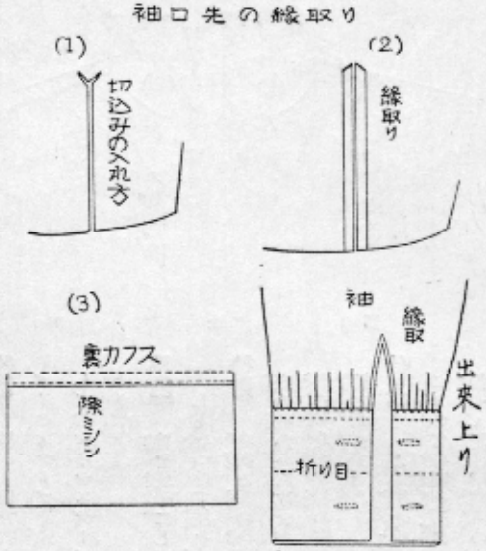
第五圖

布の裁方

第五圖のやうにそれ〴〵縫ひ代をつけて裁ち、外袖には袖口明の切り込みを入れます。

袖縫方

袖下を袋縫して縫ひ代は內袖の方へ倒し、袖先の切込は斜布で四粍の上り幅に縁取をします。次に表カフスに芯をのせ、裏カフスの附けの處を出來上り通りに折つて裁ち目に際ミシンをかけます。そして袖差きをカフス丈に合せて縫ひ縮め、袖先の裏側に表カフスの表側を合せて芯も一緒に縫ひ、縫ひ代はカフスの方へ倒します。



第六圖

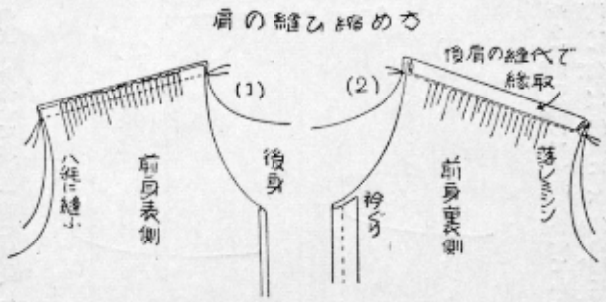
それから表カフスと裏カフスを中表にして廻りを縫ひ、芯布は縫ひ代の際から裁ち落して表に返して附けのところは際ミシンをかけます。

穴かがりは端から一糎入つてカフス幅の中央に二糎の穴をかがります。(第六圖參照)

身頃　前明は女兒服の時のやうに兩玉緣にします。

ポケットはセーラー服の時と同じやうに矢張り兩玉緣ポケットにします。

次に後前の肩を縫ひ合せますが、前肩の方が廣くなつてゐますから第七圖のやうに縫ひ縮めて寸法を合せてから外表になるやうに合せて八粍の縫ひ代で縫ひ、後肩の縫ひ代で八粍の縫ひ込みを包んで緣取にし、緣の際に落しミシンをかけて縫ひ代は後の方へ倒します。



第七圖

衿　表裏二枚の衿を中表に合せて外廻りを縫ひ、表に返して置きます。

衿附　縫ひ上げた衿を身頃の表側に衿を補張り加減に合せ、それにバイヤステープを添へて身頃とバイヤステープとで衿を挟み附けにして、バイヤステープは六糎の上り幅にして身頃の衿刳にまつりつけます。

脇縫　脇を袋縫にして折りを前身の方へ倒し、脇明には見返しと持出しとをつけて裾を寸法通りに折つてまつり縫にします。

袖附　身頃と袖の合標を合せ、袖下と脇の縫ひ目とが出合ふやうに左の袖から附けます。三糎幅裁ち切りの斜布を身頃の袖刳に當て、斜布、身頃、袖の三枚を一緒に縫ひ、斜布で縫ひ代を包んでまつり縫にします。

仕上げ　よく霧を吹いて袖、衿、ポケットの順にアイロンをかけ、つゞいて身頃全體にかけ、それから胸にスナップを二箇、脇明に二箇づゝ附け、前明の上部に鈎ホックをつけます、飾釦はカフスにつけます。

スカート

婦人洋服の中で一番需要の多いもの、一般的に用ひられてゐるものはスカートであります。從つてその種類もいろ〳〵あります。

種類

一、プレインスカート　飾も襞も何もない一枚の布で出來てゐるものであります。

一、ギャザースカート　用布を袋のやうに筒形に縫つて、その上部を縫ひ縮めにしたものであります。

一、フリルスカート　共布か又は別布で飾布をつけたものであります。

一、プリートスカート　用布を襞に折つたものか又はプレインスカートに襞を取り入れたものをいひます。

一、サーキュラースカート　用布を刳り抜きに裁つたものか、又はプレインスカートに刳り抜きを取り入れたものであります。

以上の他まだ種類はいろ〳〵あります。

着用法

スカートを着用しますには、ウエストで吊る式のもの、スカートの上部にゴムテープを入れてその彈力で腰部に支へる式のもの、スカートの上にウエストバンドを附けて、それにゴムテープを用ひて腰に支へる式のもの、スカートの上部を腰廻りの寸法に合ふやうにくせを取つて內側にベルトをつけて腰部に支へる式のものとの四

通りがあります。

用布の選び方

スカートに使用する用布は各々其の型の性質に從つてその型を能く表はし得るやうな地質の布地を選ぶことが必要であります。

プレインスカート　の場合は毛織物か或は綿織物で、普通のものより稍厚地の布地を用ひます。

夏季用　サージ、アルパカ、リンネル、ピケー、等。

冬季用　ラシヤ、サージ、メルトン、等。

ギャザースカート　これは地厚な布地はたる可く避けて、稍薄地のもので布地に重味のあるもの。

夏季用　セル、ギンガム、ポプリン、富士絹、シヤルムーズ、バレース、等。

冬季用　サージ、セル、ブロードクロス、薄地メルトン、練繻子、ベルベット、等。

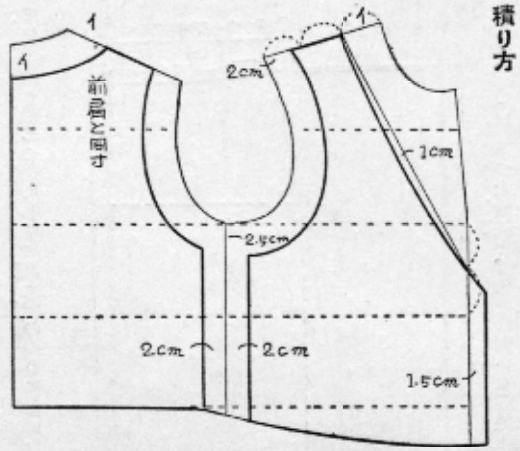
プリートスカート　大體ギヤザースカートと同じ地質の布地を用ひますが、ベルベットは避けます。その他稍硬い地質のリンネル、ホームスパシ等も用ひます。

サーキュラースカート　ギヤザースカートの用布と同じ地質の布地を用ひますが、サキユーラースカートは稍厚地の布地を用ひても差支ありません。

プレインスカート

積り方と附屬品

積り方



第八圖

ダブル畳

スカート丈＋腰の折り代＋上部の縫ひ代＝出布

(10cm+5cm)　(2.5cm)

(75+10+2.5=87.5)

やゝダル畳

ダブル畳の結合の二倍

(74+10+2.5)×2=178cm

附屬品　スナップ三個。

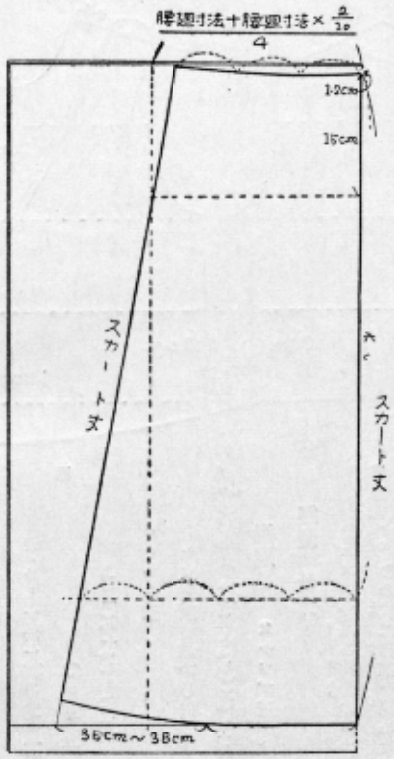
製圖の仕方

ウエストで吊る場合のスカートについて説明します。この式は腹部を締めない點は身體の爲めに宜しいですが、ウエストが強ずぎますとスカートの兩脇が垂れ下つて見苦しくなりますからウエストは普通の原型よりも強みの割合を少くします。但し原型は普通のゆるみを入れたものを基礎として第八圖のや

うに加減します。

スカート

型紙用紙を縦二つ折にして、第九圖のやうに輪になつてゐる右上の角から左へ腰廻り寸法に、その十分の二の弛みを足した寸法の四分の一を標し、その點から下へ眞直ぐに線を引きます。次に上の端から一五糎下つたところと、六〇糎下つたところへ横線を引き、これを上下に伸します。次に輪



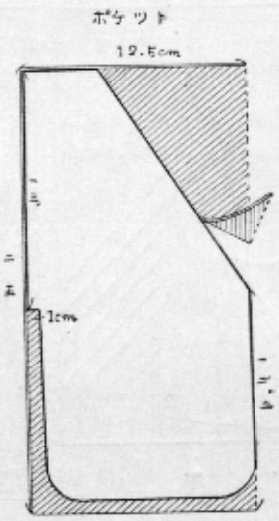
第九圖

を引き、六〇糎下つた横線を、先きに引いた縦線との交叉點までの間を三等分してその三分の一だけ左へ伸して點を打ち、この點と、一五糎の横線と縦線の交叉點とへ斜線で腰線を引き、これを上下に伸します。

の方で上から一糎二粍下げて點を打ち、その點から下へスカート丈を計つて標します。腰もこのスカート丈と同寸法だけ上から計つて裾は幅の半分から切り上げます。最後に上を一糎二粍の點から斜に刺ります。後型も前型も同じにしますが、上の刺を少し多くして一糎五粍位まで刺り下げます。

ポケット

ポケットは附けてもつけなくても宜しいですが、附ける時は第十圖のやうに裁ちます。



第十圖

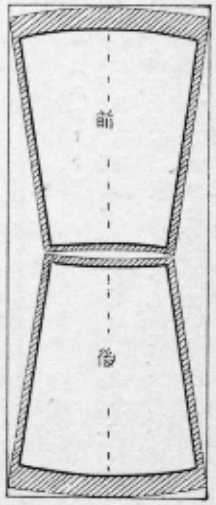
布の裁ち方

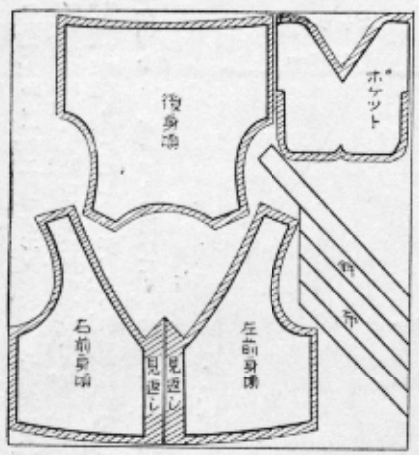
前後中心は布の輪の方で裁ち、腰は二糎、下胴の處は一糎、裾は八糎から一〇糎位にします。ウエストは前中心に見返し代を三粍、後前衿刺と袖刺には一糎、肩及び腰には一糎二粍づゝ附けます。（第十一圖參照）

腰は一糎づけます。

縫方（スカート）

左腰明に出來上り幅四粍の縁取をします。次に左右の腰を縫つて、縫ひ代は割ります。縫ひ代の裁ち目は薄地の時は四粍に折り曲げて細かくぐし縫にしますが、厚地の場合は最初に裁ち目に四粍の縁取をするか、或は縫ひ目を割つてから裁ち目に斜の針目でかがげておきます。

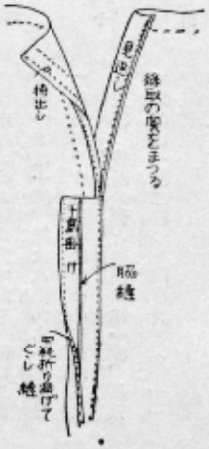




第十一圖

脇明の始末

脇明のところは第十二圖のやうに後縫ひ代の下部に切り込を入れて縫ひ代を前身の縫ひ代の上に合せて持ち出しとします、そして下の切り込の裁ち目は千鳥掛にしておきます。

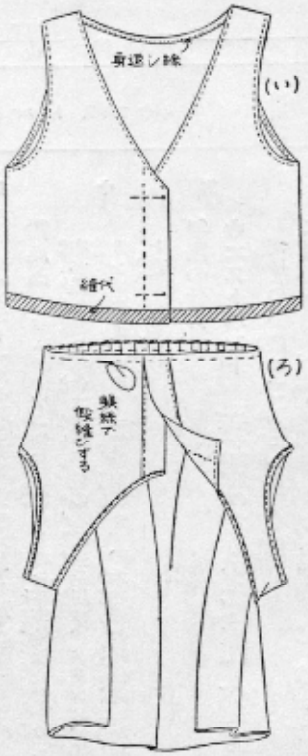


第十二圖

次に襟を寸法通り折り上げて細かくまつり結にするか、或は毛織物で厚地の時は脇の裁ち目の始末と同じ方法にします。

ウエスト

見返しを裏側へ折り曲げてミシンをかけ、兩方の脇と肩を袋縫にします。次に袖刳と衿刳にバイヤステープで上り幅八粍位の見返しをつけます。次に前中心を第十三圖(い)のやうに右身頃を上前にして一糎五粍づゝ合せ重ねて待針を打ち、スカートの上端の寸法を合せ、スカートの長い寸法だけは上の刳のところで細かく縫ひ縮め、(ろ)圖のやうにスカートとウエストを中表に合せて假縫ひをし、バイヤステープを添へて三枚一緒に縫ひ、縫ひ代はバイヤスで包みます。



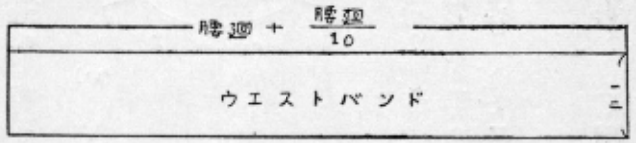
第十三圖

仕上げ

全體をアイロンで丁寧に仕上げ、前中心にスナップをつけます。

プリートスカート

折襞スカートの襞の數は決つて居りません、用ひます人の好みや考察、用布の地質や長さなどによつて自由に



決めるのであります。襞の折り方も一様ではなく片返しの折り方、つまり全幅を一方に向け（多くは左向）て襞を折る仕方と、振り分けの折り方、つまり前中心から両脇へ振り分けにして後中心で折り山を突き附けにする折り方。今一つは箱襞といつて襞の折り山を向ひ合せになるやうに折る折り方とであります。

第十四圖　積り方（ウエストバンドで腰部に支へる式のもの）

ダブル幅（裏布及片返し襞）

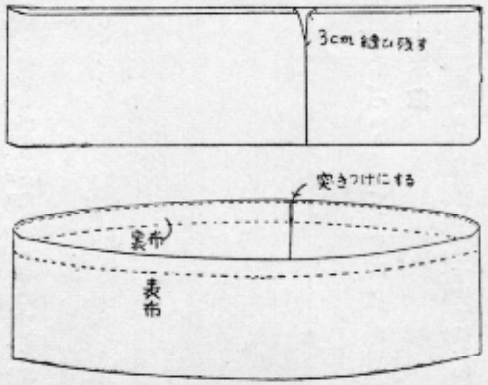
（スカート丈＋腰の寸廻（L/2）×2＋15糎＝用巾

附屬品　ゴムテープ一糎五粍幅のものを下胴寸法だけ。ウエストバンドの裏布（表布が羅紗物の場合は同色系統の毛糸を用ひ、メリンス、絹物、木綿物などの時はリンネット、キャリコ等を用ひます、木綿物の時は共布を用ひても宜しいのです）を表用布と同寸。

第十五圖　製圖の仕方

ウエストバンド　第十四圖のやうに横幅は腰廻り寸法に十分の一の弛みを加へただけにし、縦は一二糎にします。

スカート　横幅はウエストバンド横幅の三倍の長さ、丈は脇丈より一二糎短いだけにします。



第十五圖　布の裁方

ウエストバンドは周圍に一糎づゝ縫ひ代をつけて、表布、裏布とも同様に裁ちます。

スカートは上部の縫ひ代は一糎、裾は折り代を一〇糎位つけます、横幅は布幅だけでは足りませんから接ぎ合せます。

縫方

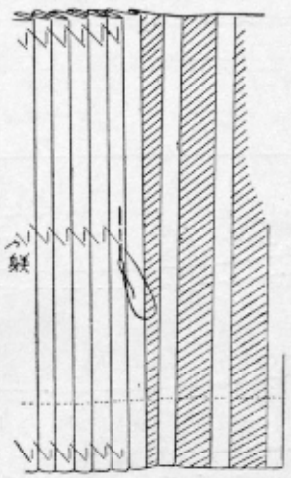
ウエスト　表を輪に接ぎ合せ、縫ひ目はアイロンで割つておきます。裏は第十五圖上のやうに上部を縫ひ代共三糎程殘して矢張り輪に接ぎ合せ縫ひ目は割つておきます。次に裏布の縫ひ殘しました部分を突きつけにしておいて表布と中表に合せてその上部を表裏縫ひ合せ、縫ひ代は裏布の方へ倒し裏布の表側から第十五圖下のやうに折り目の山へ押へミシンをかけます。次に上の端から二糎入つた處で表裏を重ねたまゝぐるりにミシンをかけて、ゴムテープを通すところを作ります。

スカート　スカート布を圓筒形に接ぎ合せその縫ひ目はアイロンで割ります。そしてから裾の折り返し代を

折り上げてまつり縮にするか或はミシンをかけます。
次に襞の標を上下にして正しく標を合せ第十六圖のやうに襞取りをして襞で縫ぢておきます。

注意

布の接ぎ目が表襞に出ないやうに寸法に注意いたします。



第十六圖

スカートとウエストバンドとがそれ〴〵縫へましたら、スカート布の上端とウエストバンドの表布の下端とを中表に合せて一糎の縫ひ代で接ぎ合せ、縫ひ代はウエストバンドの方へ倒し、ウエストバンドの上に飾ミシンをかけ、ウエストバンドの裏布の下部は縫ひ代を折り曲げてまつりつけます。
次にゴムテープを安全ピンに刺して挿し通し端と端とをしつかり縫ぢておきます。

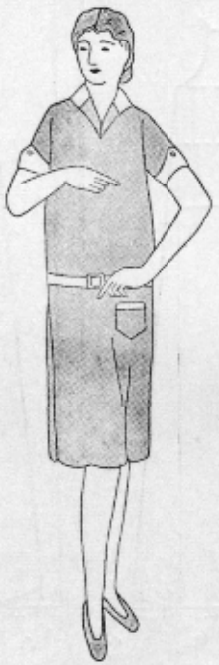
着用上の注意

この種類のスカートは着用の時下胴で縮むゆとりの分は前で縮ませずに後と兩脇で縮ませるやうにします。

ハウス・ドレス

第十七圖の型で、この型は原型を用ひる物としては極く簡單な型であります。たゞ原型から着丈の寸法を引き伸し裾廻りを廣くしたもので、それに衿と袖とポケットをつけ、エナメルバンドを締めるやうに仕立てたものであります。

出來上り圖



第十七圖

用布の種類

夏季用　ポプリン、クレープ、ギンガム、富士絹、ホームスパン等。

冬季用　サージ、セル、メルトン、ブロードクロス等。

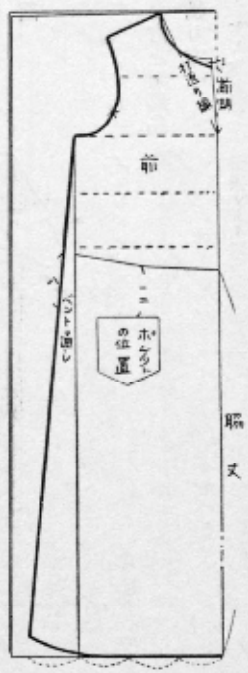
積り方と附屬品

積り方

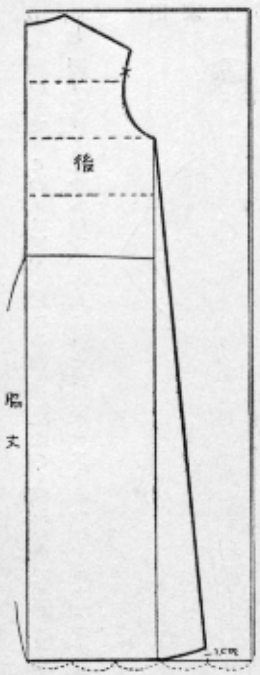
ヤツグル袖　着丈×3＋襟用布

ダブル袖　着丈×1.6＋襟用布

附屬品　共布のバイヤス　袖口に要るだけ。飾釦　直徑一糎位の裏穴貝釦六ケ。リボン　黑二分の一吋幅のベルベット・リボン約一ヤール（表がビロード織、裏が朱子織になつてゐる物）、エナメルバンド　一本。



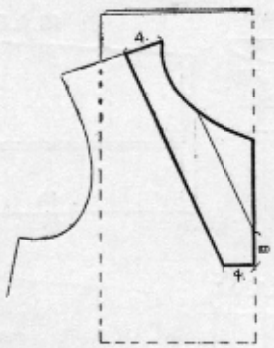
第十八圖



製圖の仕方

後身　第十八圖のやうに後原型の背中心を型紙用紙の端に揃へて重ね、背丈の線から下へ脇丈を計つて標しそれから横に線を引き、脇の方も垂直に線を引き、裾で三分の一だけを開かせて脇の斜線を引き、裾幅の二分の一から一糎切り上げます。肩、袖刳、衿刳は原型通りに引きます。

前身　前原型の前中心第二線から下を型紙用紙の端に揃へて重ね、衿刳の下を一糎下げて衿刳の線を引き、衿刳の上から第二線へ向つて斜に折り返り線を引きます。次に後と同樣着丈をきめて裾で三分の一だけを開かせて斜に脇線を引き後脇丈に合せて裾を切り上げます。それから肩、袖刳を原型通り引き、原型の前下りの線から一二糎下へポケットの位置を印し、八糎下つた脇線の上にバンド通しの位置をきめておきます。

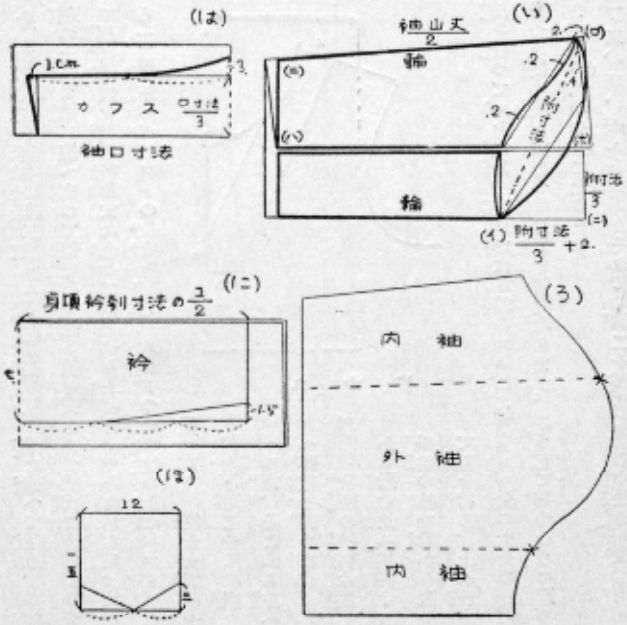


第十九圖

見返し　第十九圖のやうに型紙の上に前原型を重ね、衿刳は前身と同じやうに引き肩幅を四糎と計り、折り返し線から下へ四糎、そこから左へ四糎と計つて標し、こゝと肩の四糎との斜線を引きます。

袖　身頃の袖刳寸法を計り第二十圖（いのやうに型紙用紙の端から附寸法（袖刳寸法の二分の一）の三分の一幅に紙を折り、手前の輪で右から附寸法の三分の一に二糎加へた寸法を計つて點を打ち、上へ垂直に線をたてます。次に（イ）から斜に附寸法を計つて（ロ）を決め、左端では右端の（ロ）（ホ）間よりも（ロ）（ニ）間の十分の一だけ短く計つて紙を少し斜に折り、先に折つた紙の端と突きつけに紙を切り取ります。さうして圖のやうに輪の刳を寸法通り刳つて裁切線で切り離しますと（ろ）圖のやうになります。

カフス、衿、ポケット　それ〳〵第二十圖（はにほ）の寸法通り裁ち切ります。



第二十一圖

布の裁方

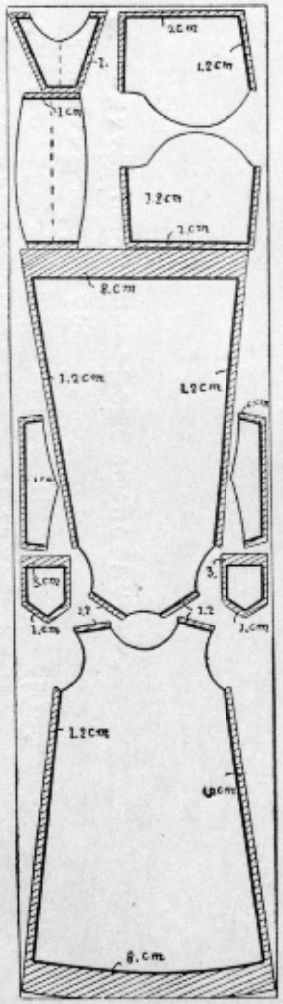
布の整理をしてから、型紙を位置よく配置して第二十一圖のやうに縫代をつけて裁ち切ります。

縫方

前明の始末　前身頃の中心と見返しの中心とを中表に合せ、前明に五粍幅をおいて両側にミシンをかけ、端に切込を入れて見返し布を裏側に折り返し、見返しの端は折つてまつりつけます。

ポケツト　ポケットの口を三糎の折り返しにしてミシンをかけ、他の三方を裏側に折り畳んでポケットの位置に置いて上端は留ミシンをかけ、ぐるりを縫ひ附けます。

身頃　前後の肩と脇を縫ひ合せます。地薄物の時又は、絹織物の時は袋縫にして折は前身頃に倒します。地厚の布地の時は割縫にいたします。



第二十一圖

次に襟を寸法通り折り曲げてまつり附けます。

衿　幅を二つ折にして両端を縫ひ、表衿になる方の裁目と、身頃衿刳の裏側とを合せて八粍の縫ひ代で縫ひ合せ、鋏で割り、次に裏衿になる方の衿附縫代を折り込んで縫ひ目の裏側へまつり附けます。

袖　袖下を地質によつて肩や脇と同じやうに袋縫か割縫にし、カフス二枚を中表に合せて上部と両端を縫ひ、

カフスの三角山が外袖の中央に合ふやうにして袖口の裏側とカフスの表側との裁ち目を揃へて一糎幅にミシンで縫ひ合せます。次にカフスを袖の表側へ折り返して三角形の中央へ縦に飾釦を縫ひつけます。

袖附　身頃袖刳の合印と袖の合標とを合せます。すると袖の方がゆるくなりますから、とのゆるみは肩の邊に入れて躾で假縫をし、三糎幅の斜布を身頃側に重ねて三枚一束に八粍の深さにミシンをかけます。そしてこの縫代をバイヤスで包んで袖の方の縫目にぴつりつけアイロンで潰しておきます。

バンド通し　裁落し布から三糎幅長さ五糎の布を二枚取り八粍幅上りの紐を作ります。そしてバンド通しの位置に縫ひつけます。

飾　リボンを花形に結んで恰好よく衿下の刳のところにつけておきます。

六、雑の部

大黒帽子

十歳位から十六、七歳位までの女兒に適します。地質は洋服と同じ生地、或はビロードなどがよく、また間へ配合のよい別布を入れたのもよいものです。

裁方

圖一

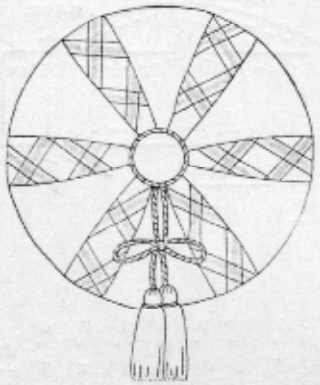
型紙用紙を二つ折にして第二圖によつて製圖いたします。

1、輪の方で頭廻り寸法に弛み一糎五粍を加へ、これの十分の四の寸法を計りイロの線を引きます。

2、イ點で直角になるやうにハ線を引きます。長さは頭廻り寸法に一糎五粍を加へたものゝ十二分の一とします。

3、ロ點で同樣にニの線を引き、イロと同寸のホヘの線を引きます。

出來上り圖



4、(ロ)(ニ)の點から右へ二糎五粍眞直ぐに出して帽子の縁といたします。

5、(イロ)及び(ハニ)の線を三等分して(チ)(ト)に線を引き、(チト)間の二分の一を眞直ぐに(リ)まで延します。

6、(リニ)(リヌ)に斜線を引きます。(ハヌ)は(ハニ)の三分の一です。

7、(ヌイ)に斜線を引きます。

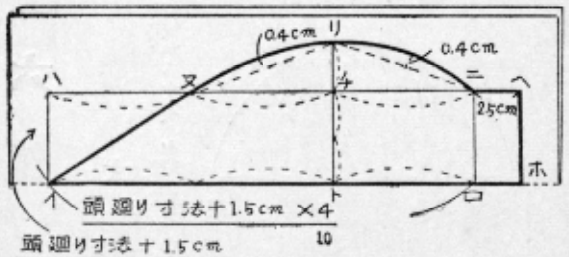
8、(リニ)の中央に四粍の丸味をつけます。(リヌ)の中央でも同樣に四粍の丸味をとります。

9、そして圖のやうに太線を切り拔きます。

間布は第三圖のやうに裁ちます。

1、型紙用紙を二つ折として、輪の方で、第二圖の(イロ)と同じ長さの線を引き、それを三等分した(ハ)點に二糎の持出しをします。

2、(ニロ)(ニイ)に斜線を引きます。そしてこの線通りに裁ちます。



第二圖

材料

表用布　六八糎幅內外のものなれば、頭廻り寸法と同寸。

同用布　一三六糎幅內外のものなれば、頭廻りの二分の一。

裏用布　二七糎四方。

頭廻りの四分の一（地質は毛繻子、リンネル等）。

縁芯　白芯（裏布を二枚折りにして用ひてもよい）幅二糎五粍、長さ頭廻りに一糎五粍の強みを加へたもの。

外に房一個と、直徑四糎位の木釦一個。

縫代の附け方

表布　縁布の分となる第二圖の(ヘホ)には折返し代として二糎五粍をとり、その他には八粍をとります。

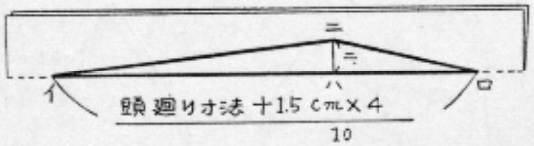
裏布　これは(ヘホ)の處は型紙通りに裁切りその他は全部八粍の縫代をとります。

同布　周圍全部に八糎の縫代をとります。

以上の通りに表布、裏布、及び間布を六枚づゝ第四圖のやうに裁ちます。間布には裏は要りません。

また、表布をビロードの如き毛並のあるもので裁つ場合には、必らず毛並を逆に使ひます。さういたしますと、常に毛立ちして美しく見えます。

毛並のない地質の物でしたらば型紙をさし込んで裁ち合せても差支へありません。



第三圖

縫方

1、表布と間布とを一枚おきに六枚とも縫ひ合せ、縫目には刺鐵をかけておきます。

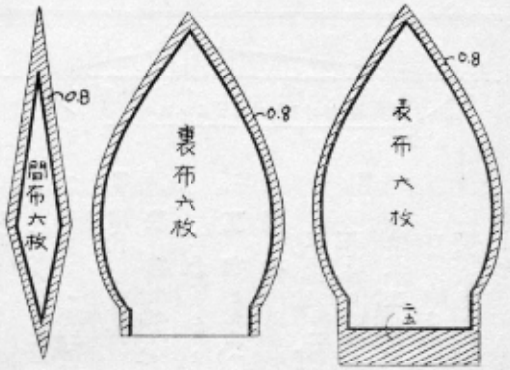
2、縁の裏面へ芯地を綴ぢつけ、縁の折返し代を折り上げて、表側がつれないやうにまつりつけます。

3、六枚の裏布を合せて、片返しに（左右いづれでもよい）鎧をあてゝ表布の内側と合せて中心を一寸綴ぢつけておきます。

4、裏布の縁の裁ち目を一糎ばかり裏面へ折りまげて、表布の縁の裏面へまつり附けます。

5、間布と同じ布で、木釦をつゝみ、頭布の表の眞中へ縫ひつけます。

6、房を附けます。細い打紐か穴糸八、九本を撚つた紐で包み釦を一と巻きして結び、第一圖のやうに中程で花結びにしてその先に房をつけます。餘り長くても、短くても釣合がとれませんから、打紐の丈は圖のやうに、帽子を平らに置いて、釦を一巻きして、花結びにして垂らします。紐の太さ房の長さは、各自の好みもありませうが、餘りに太すぎない方がよいと思ひます。



第四圖

六つ接ぎ帽子

第五圖

用布の種類

表布　アルパカ、麻、ビロード等、或はドレツスと同じ布か、オーバコートと同じ布。

裏布　寒冷紗、毛繻子、羽二重等がよろしい。

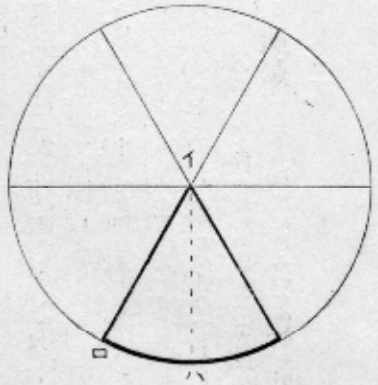
女兒用にも、男兒用にもよく、布地さへ變へれば夏冬のものにも向き、更に婦人用にもたる一番用途の廣い帽子です。

型紙の作り方

1、頭廻り寸法に一糎五粍の弛みを加へ、その三分の二より二糎五粍減じたものを直徑とする圓を畫き、それを第六圖のやうに正確に六等分してその一つを切りとります。

頭廻り寸法のとり方は、第七圖のやうにして計ります。

2、第六圖太線の一角を切りとりましたらば、點線か



第六圖

ら二つ折にして、第八圖のやうに置き、石の斜線（イロ）を三等分します。

3、次に、頭廻り寸法に一糎五粍の弛みを加へた寸法の十二分の一を、（ハ）から計つてホに標します。

4、（ニホ）間を直線で接ぎ、中央で五粍の丸味を附け、その丸味通りに切りますと（イニホハ）の型となります。

5、鍔は第六圖の（イハ）を半徑とした圓の四分の一をとり、第九圖（イハ）の三の分の一を圓の外にのばして、（男兒の時はそれから一糎を減じます。）圓周にならつて弧線を引き、太線を切り抜きます。

第七圖

頭布　頭布の周圍は一糎の縫代で、表裏六枚づゝを裁ちます。

鍔　弧線の内側は一糎五粍、外側と兩端は一糎の縫代として二枚裁ちます。

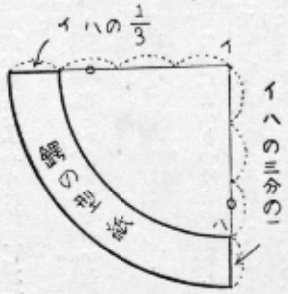
鍔の芯　裏鍔は周圍全體に一糎の縫代をとつて二枚裁ちます。

弧線の内側と兩端に一糎の縫代を附け、外側の弧線は縫代をつけずに裁ち切りにして二枚とります。（第十圖參照）

縫代の附方

第八圖

縫方



第九圖

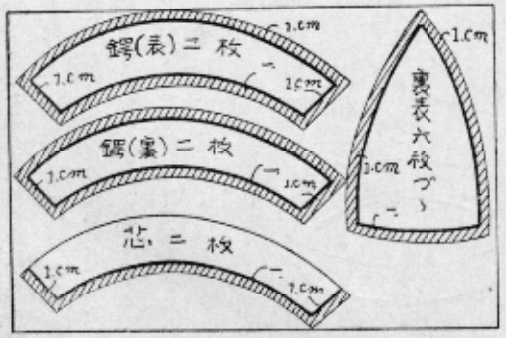
1、第十一圖のやうに頭布は一糎の縫代にして、鞦糸で假綴をして中心が正確に合ふやうに六枚づゝ裏表とも縫ひ接ぎます。ミシン糸はほつれないやうに結んでおきます。

2、表布の縫目は割鍔をかけ、裏布は右又は左（いづれでもよろしい）へ片返しにして鍔をかけます。

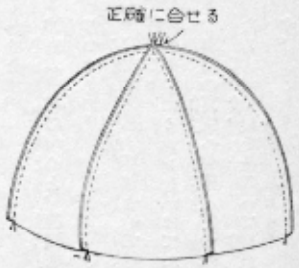
3、表頭布の中心と、裏頭布の中心とを第十二圖（いのやうに綴ちつけます。

4、鍔布は細かく接ぎ合せて縫代に割鍔をかけ、芯は重ねて重ね目の兩端にミシンをかけておきます。

5、裏鍔の裏側へ、鍔芯をつけます。裏鍔と芯布とを鍔の内側になる方で裁目をそろへて重ね、芯の外側の端で假綴ちいたします。



第十圖



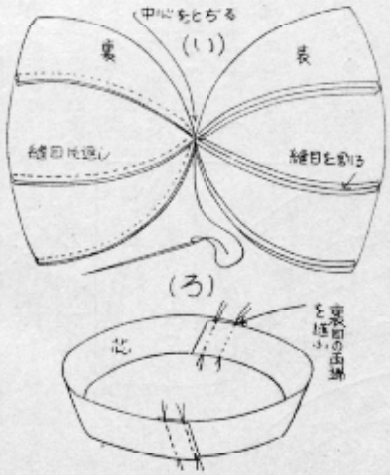
第十一圖

6、裏表の鍔布を中表にして外側の裁目を揃へて一糎の縫代で鍔の外廻りを縫ひ、縫代は芯へまつり附けます。

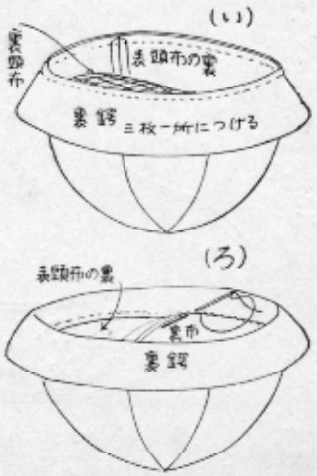
7、表に返して、更に六粍の縫代で飾ミシンを外側にかけます。そして内側の方は表、芯、裏と三枚揃へて假綴ぢしておきます。その時、鍔は仕立上り圖のやうに、折り返るものですから、それを豫定して、表鍔のつれたいやう、また裏鍔の弛まないやうに注意しながら假綴ぢいたします。

8、鍔と表頭布とを合せてミシンをかけます（第十三圖(い)）

9、裏頭布の裁目を一糎程折つて、表頭布の縫ひ目の上にまつりつけます。（第十三圖(ろ)）以上で仕上りましたから飾りをつけます。男兒用には、リボンを鉢巻にしたもの、又は打紐の先に丸をつけたものなどがよく、女兒用にはリボンに造花などあしらつてもよく、特に帽子の切端などを裝飾の一部に加へますと落ちつきのあるものになります。



第十二圖



第十三圖

附

この型は、鍔の工夫でいろ〳〵に變化いたします。前鍔を強め、後鍔をつらせて附けますと、女學生向の物となり、紅白の鍔なし、又は廂附としますと運動帽子にもなります。

五、六歳男女兒用エプロン

用布の種類と附屬品

キヤラコ、ギンガム、モダサ、ネル等。
釦　（直徑一糎二・粍位の貝釦）三個。
斜子布　（無地或は縞）一反。
刺繍糸　（フランス刺繍五番糸）

製圖の仕方

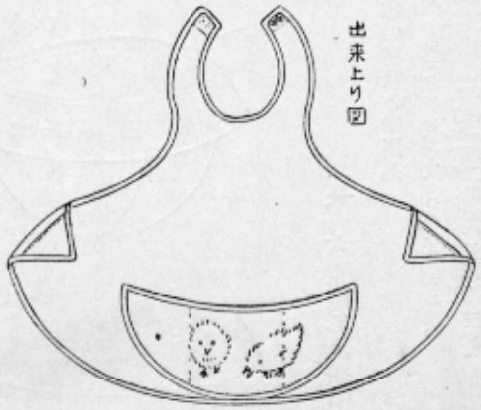
1、年齢に合せて、原型を作り、製圖用紙を縦二つ折にして、輪の方に前原型の第二線までを合せ、あとは自然にまかせて、第十五圖のやうにおき、後原型も肩の處で合せて、ピンで止めておきます。

2、先づ前原型の肩幅を三等分して、(ロ)の標をつけ、それと同じ寸法だけ(へ)から計つて(ト)へ標をつけます。

3、前原型の第一、第二線の中央に(ハ)を標し、(ロ)から原型第一線の中央に渡し斜線を第二線の近くまで引き、次に(ハ)からの水平線との交叉點を(ニ)とします。

4、(ハ)(ニ)の二分の一と同寸だけ(ニ)から斜に(ホ)に持出します。

第十四圖

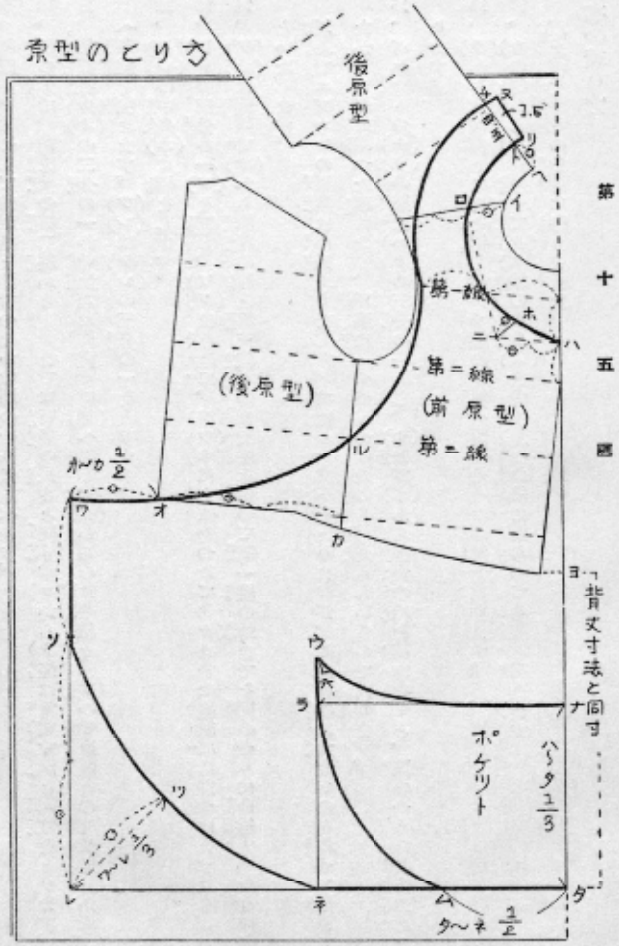


5、(ト)より一糎五粍(リ)に出します。

6、(リ)(ト)(ロ)(ホ)(ハ)をつたぐ曲線を圖のやうに描きます。

7、(ト)から(チ)迄四糎五粍、(チ)より(ヌ)へ一糎五粍として(リ)(ヌ)の間をつなぎます。

8、(ヌ)(チ)から肩線を通つて、第一線の左端迄先に描いた枠側の線にならひ乍ら圖のやうに曲線を引きます。



9、後原型をはづして前原型と脇でつないで圖のやうに並べます。
10、輪の方で、前原型の第二線から下（ヨ）までは原型の長さと同寸、（ヨ）から（タ）迄は背丈寸法と同寸をとります。
11、後原型（カ）（オ）の二分の一の寸法だけ眞直ぐに（ワ）へ出し、（タ）からの水平線と、（ワ）の垂直線との交叉點（レ）から（ツ）へ斜線を引きます。（ツ）（レ）は（ワ）（レ）の三分の一をとります。
12、（タ）（レ）の中央（ネ）に標をします。
13、（ワ）（レ）の三分の一（ソ）を標し、（ワ）（ソ）は直線に、（ソ）（ツ）（ネ）に丸味をつけて、（タ）までは直線に結びつけます。
14、（ワ）（オ）は直線で（オ）から原型の脇と第三線との交叉點を通つて第一線の端までを圖のやうに曲線でつなぎ脇刺といたします。

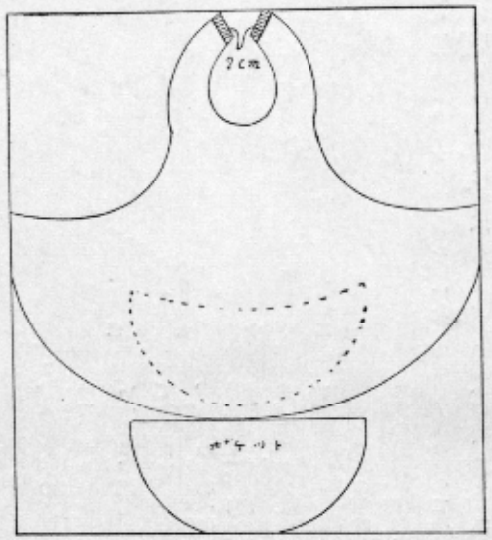
以上でエプロンの原型は出來上りました。次はポケットをとりますが、これは特に大きいのを取つて見ましたが、これに限つた事はなく、兩脇に一つづゝつけたのも可愛らしいものであります。

15、ポケットの（ナ）（タ）の間は（ハ）（タ）の三分の一とし、（ナ）及び（ネ）から直角の線を引きますと、圖のやうな長方形になります。
16、（ラ）から六糎眞上に（ウ）を標し、（ナ）（ラ）線の中程（圖のやうに曲線を引きます。
17、（ウ）の標から（ラ）を通つて（タ）（ネ）線の中央（ム）までへ上の曲線にならつて曲線を引きます。

以上ポケットの製圖は終りました。

用布の積り方

並幅もの（六八糎幅にて）で身丈の一倍半。



第十六圖　ぢりとりの代縫

縫代のとり方

第十六圖のやうに後のかさなりの見返し代を二糎つけ、その他は全部型紙通りに裁ちきります。

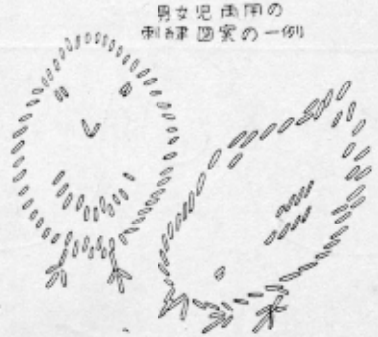
縫方

1、兩脇角の裏に高さ六糎の三角形の力布を當て底邊を四粍程折り曲げてミシンをかけます。
2、後の重りの見返しは、裏へ折返してミシンで縫ひつけます。
3、身頃と衿刺の周圍に斜布で緣を取ります。緣幅は出來上り六粍乃至八粍として飾ミシンをかけます。
4、ポケット布に簡單な動物又は草花、玩具などの刺繍をします。

5、ポケット布の周圍にも斜布で緣をとり、上部にだけ飾ミシンをかけておきます。

6、身頃のポケット標の上にポケット布をのせ、鉄糸で動かないやうに綴ちつけ、三方を飾ミシンで身頃に縫ひつけます。

男女児用の刺繍図案の一例



第十七圖

7、ポケットの底第十五圖(ハ)の處から上へ眞直ぐにミシンをかけて、ポケットを三つに區切ります。この時上部はほつれないやうに、返しミシンにし下部は糸を結んでしつかりと止めておきます。

8、右脇の力布へ斜に一つと、後の重りの右の見返しに横に二個長さ一糎五粍の釦穴を開け、かゞつておきます。左身の方は、この釦穴に合せて釦をつけます。

附

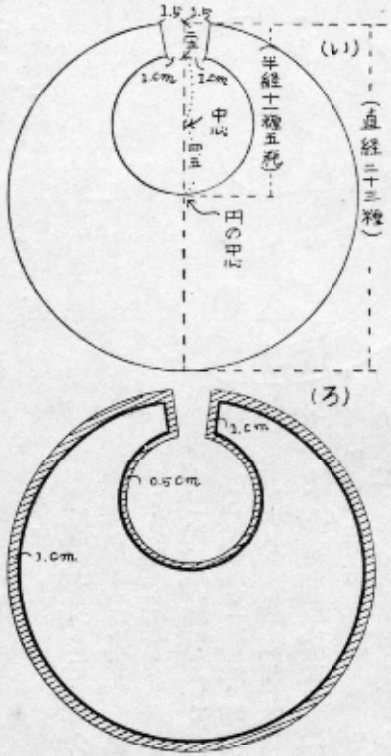
ポケットの刺繍は、第十七圖のやうなものでしたらば、適當の配色を撰び、糸の色數は二種位で間に合ひます。圖のやうにアウトラインステッチを續けないでポツ〳〵と縫つてゆけばよろしいのです。嘴と足の處は針目を他の處よりやゝ長目に縫ひ、糸もセピヤの濃いのか、黒を用ひますと全體を引きしめます。

涎掛

用布

表布　羽二重、友禪、練繻子、フランネル、綿ネル等地質の柔かいもの。

用布　表用布二五糎正方形一枚、裏用布同上、襞布六八糎幅もので約二〇糎。



第十八圖

裏布　白無地の共布又はネインスーク、キャラコ、新モス等。

襞布、紐布　表布の共布又は共地の白、白羽二重、白モスリン等。

材料

綿の部

頸廻りの紐芯用として少々。

製圖

1、直徑二三糎の圓を描きこれを涎れかけの外廻りとします。

2、圓周の上部から二糎五粍入つた處より圓の中心迄を直徑とする小さい輪を第十八圖(いのやうに描きます。これが頸廻りになります。

3、二糎五粍の糎のある處で圓の直徑の點線を中心として左右外周で一糎五粍、內周で一糎づゝをとり、各々を結びつける直線を引きます。

4、(ろ)太線の通りに輪廓を切り拔いて型紙とします。

第九十圖

縫代のとり方

第十八圖(ろ)のやうに外周には一糎の縫代をとり頸廻りへは五粍をとります。表裏とも同樣にとります。

襞布と紐布

襞布は裁ち切り六糎幅のものを、圓の外周の三倍より二糎ほど長目に用意します。長さの不足するときには、割接ぎしておきます。

紐布は裁ちきり五糎幅のものを型紙の頸廻りより四〇糎長目に用意しておきます。

縫方

1、襞布をとつて兩端を一糎づゝ裏側へ折り曲げ、それを中にして縫二つ折りに折りながら輕く鏝をかけます。そして、二糎幅位の襞を折つておきます。全部の長さは、外周を一と廻りするだけあればよろしいのです。

2、表布の外周りの縫代を裏側に折り曲げて鏝をかけます。

3、裏も表のやうに、縫代を裏側に折つて鏝をかけます。

4、裏布の外周の裏に襞布の折つたのを重ね、(襞布の重ね代は裁ち目の方で五粍位)全部の吊合ひをよく整へて鞭糸で止めて、その上へミシンをかけます。

5、表布を第十七圖のやうに重ねて、假縫をしておき、外周へ飾ミシンをかけます。

6、頸廻りに附紐をつけます。頸廻りの中心と紐の中心とを合せて、五粍の縫代で縫ひ合せ、綿を適當に含ま

第十二圖

せて結びつけます。紐の先はくゝつておきます。附紐以外の部分にアイロンをかけて終ります。

附　同様の方法で、周圍に飾襞の代りに斜布を付け、鋲で留めるやうにいたしますと第二十圖のやうになります。

また、半圓形のもの、多角形のものなど、一寸した工夫でいろ〳〵面白い型を作ることが出來ます。

嬰兒用ケープ

用布の種類

表布　白フランネル、白セル、白ラシヤ、白ビロード等。

裏布　輸出羽二重、クレープデシン、白シンモス、白メリンス等。

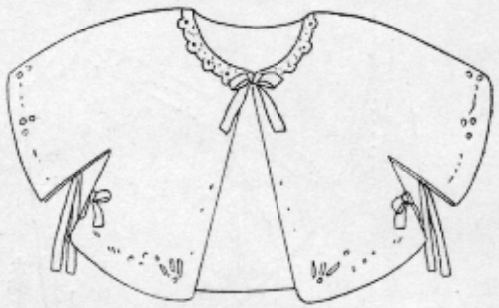
材料

用布　六四糎幅の正方形。

リボン　一八〇糎。

製圖

六四糎幅の製圖用紙を縦二つ折として第二十二圖のやうな寸法で標付をします。



第二十一圖

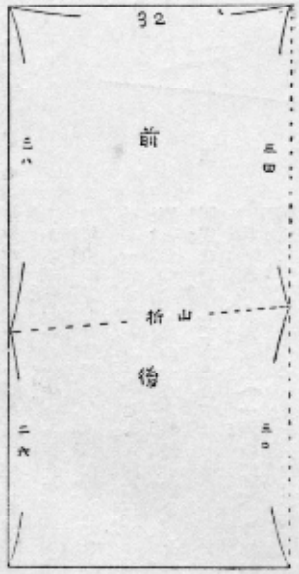
裁方

1、第二十二圖の折山から折り曲げますと第二十三圖の輪廓線のやうになります。

2、右上の角から輪の方で六糎五粍をとり、右横の方へ二糎五粍とり、その間を刳つて後衿刳とします。

3、後衿刳線の右端から四糎の處へ前衿刳線の標をつけ、こゝから後衿刳の六糎五粍の標の處へ斜線を引き、その中央で二糎張らせて前衿刳線を引きます。

4、後衿刳の中心から半徑三十糎の圓を描きます。これが前身の輪廓線になります。



第二十二圖

5、上の型紙の左端の中央から後衿刳の中心へ斜線を引き、その斜線の圓周線までの間を三等分して、圓周の上から三分の一の寸法をとります。

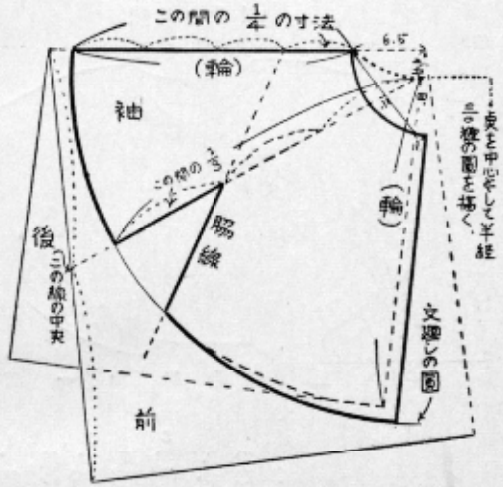
6、折山の方で、衿刳の左端から圓周までの四分の一の寸法をとり、こゝと前の三分の一の標とをつなぐ圓のやうな斜線を引き、それを圓周まで伸しておきます。

7、前衿刳の右端を右へ一糎のばし、これから圓周まで圓のやうに直線を引きます。

8、後衿刳の中心から前の直線に平行した線を後型紙一杯に引き、それから點線のやうに脇の切込み線のところまで曲線を描きます。

9、折山と後中心とは輪のまゝとして、その他は太線（及び太點線）の通りに周圍の線を引きます。

10、裏表ともこの型紙の周圍全體に一糎の縫代を附けてたちます。



第二十三圖

縫方

1、リボンを十に切り、脇と袖と、前衿刳につけます。

2、裏表の布を合せて、第二十一圖の位置にリボンをはさみ、周圍にミシンをかけます。衿刳は表布を縫代だけ內側へ折り曲げて裏布をまつりつけます。

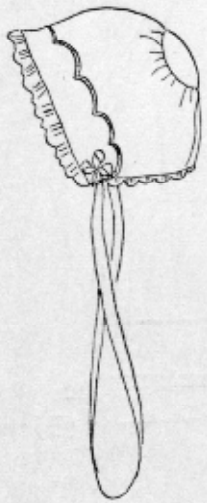
3、周圍の表には飾ミシンをかけます。

附

周圍に簡單な刺繍をほどこしたり、又は毛皮をつけたりすると一層美しいものになります。

ベビー帽子

出來上り圖



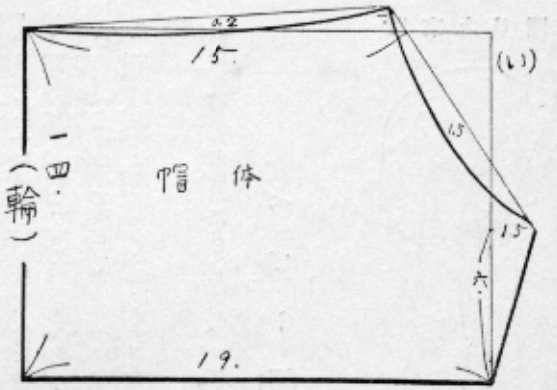
第二十四圖

材料

用布　二五糎幅五〇糎丈のもの裏表各一枚づゝ。

地質

クレープデシン、羽二重、モスリン、ネル等の白又は薄色無地もの、裏用布は白新モス。



第二十五圖

附屬品　リボン一五五糎。
縁飾用レース二糎幅一三五糎
前飾用レース一糎五粍幅八糎

製圖の仕方

帽體　製圖用紙を横二つ折として、一四糎と一九糎との矩型を描き、右下から竪に六糎の處で一糎五粍を持出し、第二十五圖(いのやうにそこから下まで斜線を引きます。上の線では輪の方から一五糎の處へ、一糎を持出して、そこと輪の端とへ斜線を引き、次に前の斜線とこの斜線の端を結びつける斜線を引き、上は二粍の刺りとし、横は一糎五粍を刺ります。

前飾布　横二つ折りにした製圖用紙に、六糎と一五糎との矩型を(ろ)圖のやうに描きます。次に右端の線を一糎下に伸して輪の端へと斜線を引きます。上の方は、右端で五粍をとり、それから計つて一糎五粍と標し、左輪の方で上から一糎五粍を計つて、(ろ)圖のやうに各々斜線で接ぎます。この一糎五粍の間を輪の方から二糎、三糎五粍、(三ツ)二糎五粍と標をして圖のやうに半圓形を描きます。但し最後のものは、丸味の高さを低のもの、半分位にし、矩形の下の線から二糎上つた處へ、心持ち丸味をもたせながら曲線で接ぎます。そこから一番下の斜線の右端から五粍入つた處へ斜の線を引きます。この斜線の終りと、輪の下端とへ斜線を引き中央で一糎刺つておきます。

第二十六圖

後頭　直徑六糎の圓を作ります。
以上の紙の周圍に各一糎の縫代をとつて、裁つておきます。

縫方

表帽體を第二十六圖(いのやうに六糎の斜の處を縫ひ合はせ縫目を開いておきます。裏の方も同様に縫ひ、縫目は開かずに、左右適宜の方に折つておきます。
後頭部になる方、(刺つてない方の端)を後頭部のあて布圓型の周圍と同寸に縫ひちぢめます。そして、圓型の

布と縫ひ合せて折目は圓型の布の方へ返しておきます。

裏も同様にいたします。

前飾布は、半圓型の部分へ細い方のレースを釣れないやうに合せ、裏表で、このレースを挾み縫ひします。この場合、半圓型の丸い處へ(ろ)圓のやうに鋏を入れますときれいに上ります。折は表布に返します。

前飾が出來ましたらば表裏の帽體で前飾布と頸口の飾レースを挾み、五枚一緒に縫ひ合はせて表に返し、前飾は帽體の方へ折り、レースは頸口の方へ出し、裏は裏側の方へ落ちつかせます。レースは幾分長目になつて居りますから布の寸法だけに縫ひちゞめておきます。

後頭部の圓形布を裏表離れないやうにざつと縫ちつけます。

衿刳の處にレースを附けます、このレースも衿刳と同寸法に縫ひ縮めておき、表布の表とレースとを合せて縫ひ、折は表に折つて、裏布をまつりつけます。

最後にリボンを第二十四圖のやうにかけ前飾布の兩端につけます。この時リボンの端を花形又は蝶結びなどにいたすと一層引き立ちます。

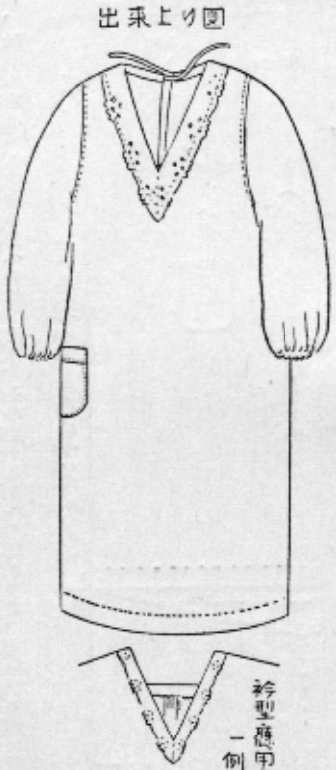
附

前飾布に刺繍などをほどこしますと可愛らしいものになります。ケープ、サック、又はドレス等と同様の模様を用ひますと尙更らよろしくなります。

割烹着

用布の種類と附屬品

キャラコ、木綿格子縞等一八二糎、兩耳レース七六糎、ゴムテープ四六糎。



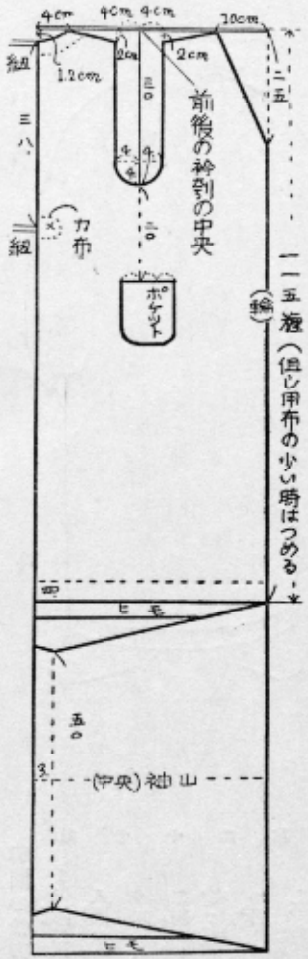
第二十七圖

製圖の仕方

1、第二十八圖のやうに一八二糎の用布を縦二つ折りとし、布の輪を前の中心とします。

2、身丈を一一五糎(普通はこれで間に合ひますが、用布の少い時は身丈で加減します。)をとり、その他は袖といたします。

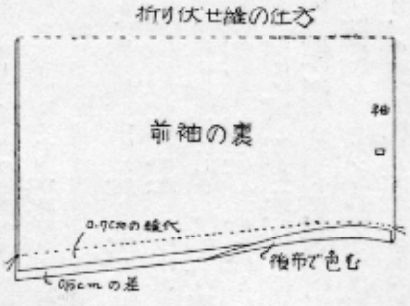
3、前衿剤は輪から幅へ一〇糎、布の端から輪の方で縫に二五糎をとつて、二點を接ぐ斜線を引きます。
4、後衿剤は耳の方で縫に一糎二粍、幅へ四糎とつて、その間をやゝ丸味をもたせた曲線を引きます。
5、前後の衿剤を引いた殘りの布の中心で、縫に三〇糎の直線を引き、これを袖剤の中心とします。
6、袖剤の中心から前身の方へ四糎と標し、その標から下へ二糎とつて、前衿剤の肩を接ぐ斜線を引きます。



第二十八圖

袖剤は、上と同様に、下から四糎上つた處まで、中心から四糎の剤込みとして眞直ぐに線を引きます。
7、後肩及び袖剤も前と同様にして線を引きます。
8、袖は殘り寸法全部を用ひます。丈の中央を袖山とし、袖山標を中心として五〇糎の袖口を標します。

但し袖口には三糎の折返し代をとりますから先づ布の耳の方で折返しをとり、それから袖口の標をします。そして圖のやう袖下の斜線を引きます。



第二十九圖

折返しは袖下線とは反對に先の方を廣くいたします。
9、ヒモ、ポケット、力布、肩の見返し布等殘り布から取ります。ポケットの大きさは口十三糎、深さ十五糎、形は好みに應じて適當にいたします。もし幅の足りない時には接ぎ合せても差支へありません。
紐布は幅四糎、長さ三十糎を四本、後衿肩の見返し布は幅四糎、力布は、紐の上に當てるものですから紐の蔽はれる程度のもの。
10、製圖の通りに裁ち切ります。

縫方

1、袖下を伏せ縫にいたします。
伏せ縫は第二十九圖のやうに、袖布を中表に二つ折として、裁目を合せ、前より後を五粍出し、縫代は前の方で七粍としてミシンをかけ、後の長い部分で裁目を包みます。
次に前へ折り伏せて表から四粍幅の飾ミシンをかけます。
2、袖口は折返し代を裏へ折り伏せて、周圍に一個所二糎ばかりを外してミシンをかけ、ゴムテープを通しま

す。

左右とも同樣に縫ひ上げます。

3、身頃は前衿刳の裏にレースの表を合せて、四粍のミシンをかけ、V字型の尖には切り込みを入れます。

4、レースを身頃の表側へ折りかへして、他の一方の端を折りまげ、縫糸で假とぢをして兩端に四粍幅の飾ミシンをかけます。兩耳のレースの時は身頃の縫代を表に折り、その上にレースをあてゝ上からミシンを掛けます。

5、後衿肩につける紐を一糎二粍幅に縫ひ上げます。

6、後衿肩の裏に見返しをつけます。見返しと身頃との間に紐をはさんでミシンで押へます。

7、肩は伏せ縫にします。袖下の時と同樣に、後肩で包み、前に縫代を折り伏せ四粍の飾ミシンをかけます。

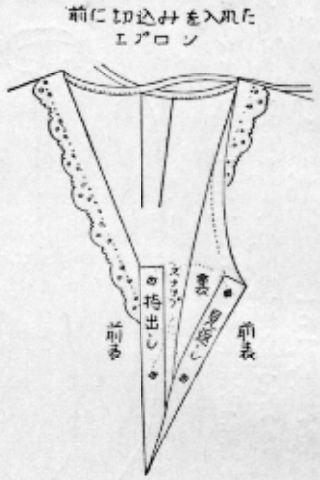
8、袖附も、袖で包んで伏せ縫とします。折り伏せは身頃の方へ返し飾ミシンは四粍の幅にいたします。

9、裾は四糎（乃至二糎五粍）折り上げてミシンをかけます。

10、後の衿刳から三十八糎下つた處へ紐をつけます。紐は矢張り一糎二粍の幅に縫ひ上げ、身頃と、力布との間に挾んでミシンをかけます。

11、ポケットは衿と同樣なレースを口へ附けるか或はたゞ口を三つ折りにして飾ミシンをかけ、周圍は裏の方へ折り返しておきます。

製圖の位置のやうに、袖刳から二〇糎下つた處につけます。幅を三等分して、前身の方へ三分の二を出して袖刳線の中心と合せ、縫糸で假とぢをして、周圍へ飾りミシンをかけて仕上りといたします。



第三十圖　エプロンを前に切込みを入れた

附

1、エプロンをかけたまゝ自由に懐に手を入れることの出來るやうにするのには、前衿刳の中心を袖刳と同寸まで眞直ぐに切り込み、その切込みの處へ第三十圖のやうに持出し、見返しをつけて、スナップを二つばかりつけておきます。この方法は嬰兒を持つ方々に便利です。エプロンを着たまゝ自由にお乳を與へることが出來ます。

その他は全部同樣にいたします。

2、衿型等はいろ〳〵と工夫して、角刳にしたり、丸刳にしたりするのも面白いものです。

それと同時に裾も丸味をつけたり、或は波型に刳ることもあります。

又サロン前掛などのやうに、身丈を短くして、裾をいろ〳〵に工夫しますとまた新鮮味を出すことも出來ます。

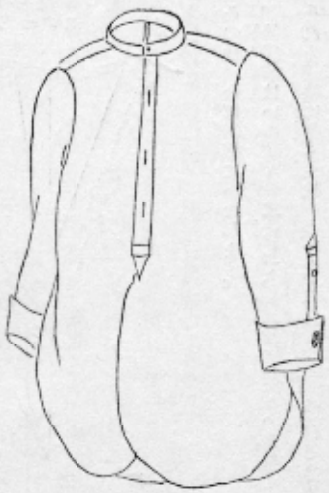
夏季用のものには、背中を襷にすると冷しげに見えます。一寸した工夫で新らしい感じが出せます。

ワイシャツ

用布と附屬品

キャラコ、不二絹、ネル、セル等。
キャラコ幅のもの……二五〇糎。
不二絹幅もの……二八五糎。
カフス用芯布　少々。
貝釦　六個。

出來上り圖



第三十一圖

製圖

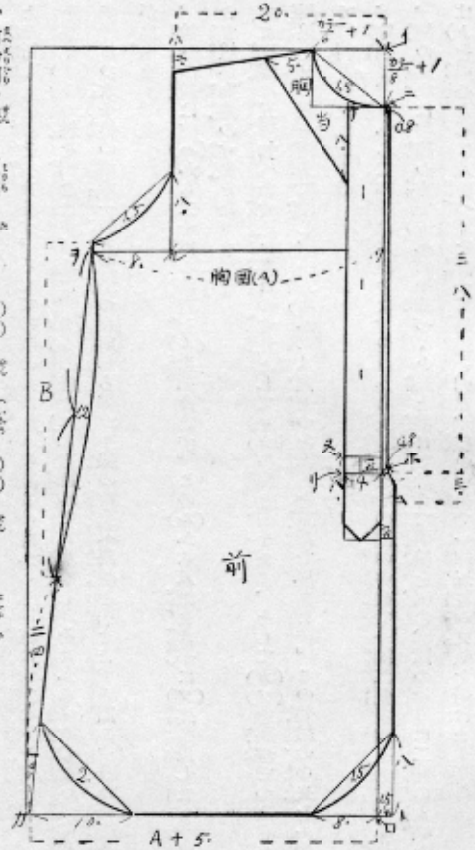
必要寸法としてカラーの寸法、肩幅、和丈を計ります。

1、先づ前型から取り初めます。

ワイシャツの丈の寸法を定めて、型紙に第三十二圖のやうに(イ)(ロ)の線を引きます。次に此の線に直角になるやう(イ)から水平線を引き、肩幅の寸法を計つて(ハ)の印を付けます。

2、衿肩明は、カラー寸法の六分の一に一糎を加へた寸法だけ肩幅線の上で(イ)から計つて取ります。衿刳はカラーの寸法の六分の一に二糎加へた寸法を(イ)(ロ)の線上で(イ)から取ります。そして衿肩明の標と、前衿刳の標とへ斜線を引き、線の中央で一糎五粍の刻をつけます。

3、肩幅の標(ハ)から下へ肩下り二糎として、衿明まで斜線を引きます。



第三十二圖

4、前衿刳の線を八粍持ち出して、(イ)(ロ)の線と平行に(ニ)(ホ)の線三十八糎を引きます。(ホ)から三糎下つた處で、(イ)(ロ)の線から一糎五粍の外側へ(ヘ)(ト)の直線を引き、(ホ)(ヘ)の間を少し丸味をもたせた

曲線で接ぎます。

5、前明きの標をつけます。（イ）（ロの線上でホの高さの處へ四糎の水平線を引き、これから一糎五粍上に今の線と平行した直線を引きます。そして衿刳の持出線（ニ）の高さの處からも同樣に四糎の水平線を引き、この二線を接ぐ（チリ）の線を引きます。次に、（チリ）の線をヌから計つて八糎延し、そこから（イ）（ロ）の線へ水平線を引きます。この水平線の兩端一糎五粍上つた所から、水平線の中央へ斜線を引きますと圖のやうな衿先きの三角型が出來ます。

6、袖刳の線は、（ハ）から二十糎の直線をル迄引きます。この（ル）から八糎を水平に（ヲ）迄持出します。（ヲ）から（ワ）迄の直線が胸圍の寸法となります。

次に胸圍に五糎加へた寸法を裾ロの寸法として（ロ）（カ）の線を引きます、そして（カヲ）を斜線でつなぎます、この斜線を（ヲ）から一糎上に伸し、一方（ル）から八糎上つた點とを斜線で接ぎます。この斜線の中央を一糎五粍刳つて袖刳といたします。

7、脇刳は、裾から二四糎は眞直ぐに、それから上袖刳までの間の中央で一糎二粍を刳ります。

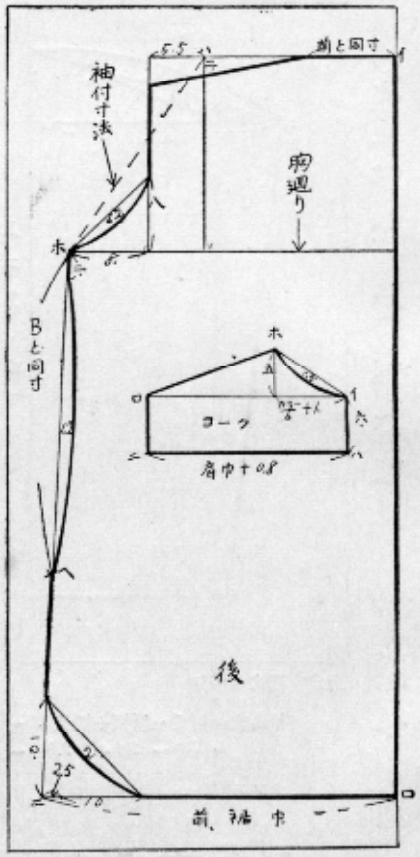
8、裾の丸味は、脇の方で（カ）から十糎づゝを脇と裾ロで計つて斜線を引き、圖のやうに二粍の丸味を附け、前は（ト）を中心として八糎づゝを計つて斜線を引き、線の中央で一糎五粍の丸味を附けます。

9、胸當の標は、衿肩明から五糎、前明きの方で（チ）から八糎の所へ斜線を引きます。

10、釦穴は見返し幅の中央で、（ヌ）（リ）の間へ一糎五粍の穴を一つ、それから上衿刳までの間を四等分して、同樣

幅の中央へ一糎五粍の穴を明けます。

次に後身頃の型をとります。

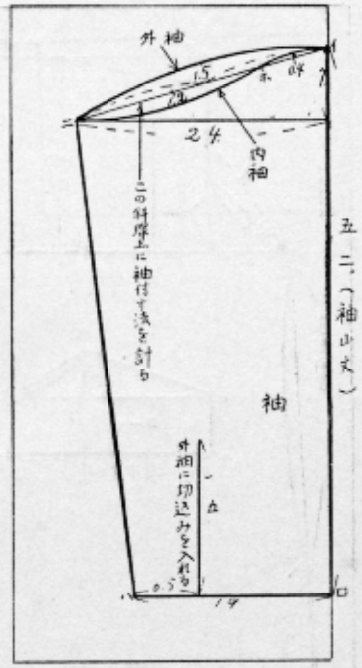


第三十三圖

1、前型と同じく第三十三圖のやうに丈線（イロ）を引き、（イ）から肩幅の寸法だけ（ハ）へ直線を引き、それから五糎五粍を伸してそこから胸廻りの線まで直線を引きます。衿肩明の寸法は前と同樣に、肩の下りも前と同樣に（ハ）から二糎として、衿明の標まで斜線を引き、その線を更に袖附の線まで伸しておきます。

2、裾廻りは、前の裾幅に二糎五粍を加へた寸法だけ(ロ)から計つて(ニ)へ直線を引きます。

3、脇線は胸廻り線を袖附線との交點より更に八糎伸したホと、裾廻りの(ニ)へ斜線を引き、裾口から二四糎と(ホ)の下二糎の間は算直ぐに、(ホ)と(ヘ)の中央で一糎二粍を刳ります。



公式　裄丈＝76糎

袖山丈＝裄丈－肩幅＋縫代2.5＝52＝76－20＋2.5

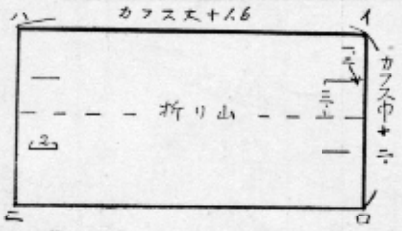
カフス幅½
6.5

第三十四圖

4、袖刳は袖附線と胸廻り線との交點から袖附線へ八糎計り、これとホとを斜線で接ぎその中央で一糎二粍を刳ります。

ヨーク

1、第三十三圖の中央にある圖のやうに、肩幅に八粍を加へたものを横に、長さ六糎の矩形を描き、(イ)から衿刳の寸法を標し、そこから(ホ)へ五糎をとり、(イ)(ホ)、(ロ)(ホ)の間へ斜線を引きます。そして、(イ)(ホ)の中央で一糎五粍を刳ります。



第三十五圖

袖

1、第三十四圖のやうに袖山丈の寸法(イロ)の線を引きます。(袖山丈は裄丈から肩幅寸法を引き、それに縫代二糎五粍を加へ、カフス幅の二分の一を引いたものを申します。)

2、(イ)から七糎下つた處へ二十四糎の水平線を引きます。次に(ロ)から(ハ)迄へ十九糎の水平線を引き、(ハ)(ニ)の間を斜線で接ぎます。

3、(イ)(ニ)の間へ斜線を引き、これの三分の一(ホ)と(イ)の中間で四粍のふくらみをつけ、(ホ)(ニ)の中央で一糎二粍の刳をつけます。そして其の間を曲線でつなぎます。これが内袖の線になります。

4、(イ)(ニ)の線の中央で一糎五粍のふくらみをつけて外袖の線を引きます。

5、袖口の線上で(ハ)から六糎五粍入つた處へ一五糎の切込みを入れます。

カフス

1、カフスの幅に二糎を加へた寸法を(イロ)と定め、カフスの丈に一糎六粍加へた寸法を(イハ)として第三十五圖

裁方総合図（キャラコ幅二米五十糎）

のやうな矩型を描き、幅の中央を折り山といたします。

2、（イ）（ロ）（ハ）（ニ）の線から一糎二粍入つた處で折り山を中心にして上下へ三糎を計り、圖のやうな二糎の釦穴をあけます。

型紙が出来ましたらば第三十三圖のやうな方法で布を裁ちます。

附屬布

以上の外左の附屬布を残り布から取ります。

第三十七圖

胸當　二枚

力衿　二枚　四糎四角

縫方

袖　上前見返し　一枚　幅八糎　丈　前明に二五糎を加へたもの

下前見返し　一枚　幅五糎　丈　前明に五糎を加へたもの

カフス　袖上前見返し二枚　幅五糎　丈二〇糎

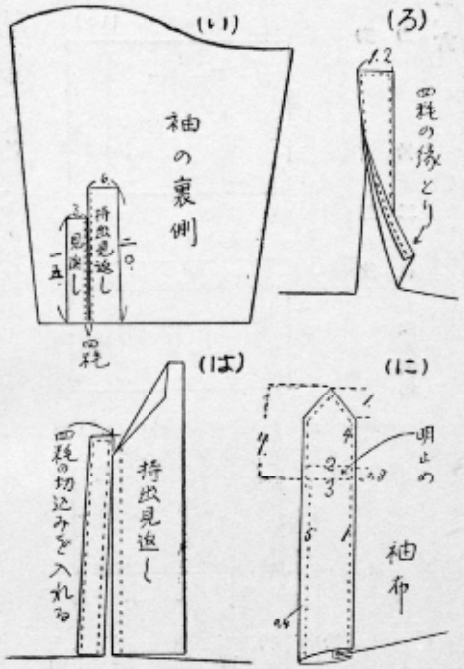
下前見返し　二枚　幅三糎　丈一五糎

衿　三枚　幅五糎　丈　衿丈に縫代を加へたもの

衿裏　一枚　幅五糎　丈一〇糎

表カフスは第三十七圖（いのやうに先の方へ八糎の縫代をとり、それから一三糎の幅をとつて、あとは

裏に折り返して附の部分とします。そして、折山から一糎入づた處へ(ろ)圖のやうにミシンをかけます。次に表カフスの裏側には(ハ)圖のやうにカフスの芯を据え、表カフスと裏カフスとが中表になるやうに附の部分を殘して三方を縫ひます。そして芯布だけ縫代をミシンの際から裁ち落し、其の他の縫代は正確に五粍殘して裁ちおとし、表へ返して丁寧にアイロンをかけて置きます。附の縫代は八粍にしてあとは裁ち落します。



第三十八圖

袖先　袖の切込みへ裏側から第三十八圖(いのやうに見返し布を附けます。持出し見返しの方は幅六糎に丈二〇糎、見返し布は幅三糎に丈一五糎とし、兩方とも地縫の縫代は四粍づゝとします。そして縫ひ初めと終とは確りと返し縫して置きます。

次に見返し布は、前に地縫ひした處は四粍の縁取りとして、表へ返し、一糎二粍の表見返し幅をとり、餘分の處は折り伏せて際ミシンをかけます。四粍の縁取の折山にも同様際ミシンをかけます。(ろ)圖)持出しの方は、袖の切り込みの終りの處(見返し布の付け終つた處)へは(い)圖のやうに四粍の切込みを入れます、但しこの切込みは、袖布の方にだけ入れます。そして二糎五粍幅の持出し見返しといたします。

折り目は(に)圖のやうに見返しに折り、二糎五粍の幅として袖布を見返し布で挾み、生端は(に)圖のやうに、三角に折つておきます。三角の頂點まで明止めの下のミシン目から四糎とし、三角の高さは一糎として正しく鋏をかけておきます。

短い方の見返しは持出し見返しの裏にきちんと重ねて鋏で止めておきます。

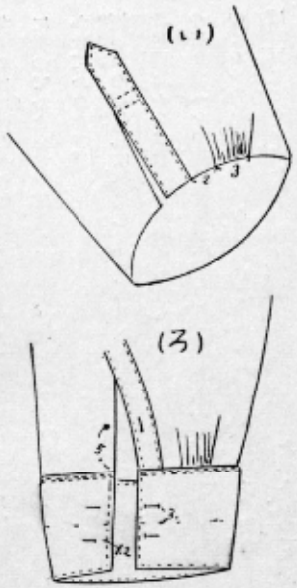
次に際ミシンは袖布との附目の方から見返しの重り目(明止めの向側)まで眞直ぐにかけ、そこから直角に曲つてミカヘシの輪の端まで縫ひ、次に八粍の幅を縫つて前の縫目と平行に附際(明止めの下側)まで縫ひ、前のミシン穴を縫ひながら眞直ぐに、先きの方三角を縫ひ、輪の方を明止の下側のミシンまで縫つて來ましたらば、同じミシン穴を輪から四粍入つた處まで縫ひながら歸つて、そのまゝ四粍の縫代として下まで縫ひ下げます。この時には下の見返しは除けて置きます。第三十八圖(に)中の1234の數字は、際ミシンのかけ方順序を示したものでありますから參照して順序をちがへないやうにいたします。

袖下を袖先より約十糎位袋縫にいたします、折は外袖の方へ返します、但し二回目のミシンの時には最初の寸法より少なく縫つて置きます。

カフスの附け方

カフス丈と全體の袖口丈とを合せて、長い寸法だけ縫ひ縮めます。縫ひ縮め方は、第三十九圖(い)のやうに、見返しから二糎入つた處で三糎の間で縮めます。次に袖先の裏側と表カフスとを合せて地縫ひをし、折はカフスへ倒します。この折山で地縫の縫目を隠すやうに折り、裏カフスを合せます、丁度表裏のカフスで袖布を挾むやうになります、そしてそこへ縫ミシンをかけます。また其の他の三方には五粍の縫代で飾ミシンをかけます。(ろ)圖のやうに、カフスの袖布に附く方には二筋のミシンがかゝる事になります。その内側のミシンは先きにカフスを作るときにかけたミシンであります。

釦穴は(ろ)圖のやうに、飾ミシンから一糎二粍入つた處でカフスの中央の折山から三糎入つた處へ四つ明けます、大さは二糎位にします。持出し見返しの釦穴はカフスの附目から五糎入つた處を中央として、一糎位入つた處に一糎五粍の穴をあけ、各々かゞつて置きます。片方の見返しには同じ處に貝釦一個を附けておきます。

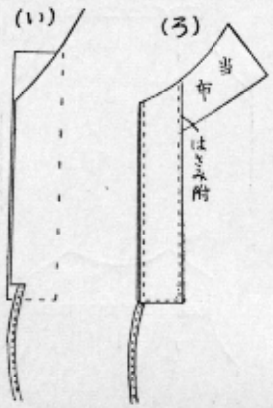


第三十九圖

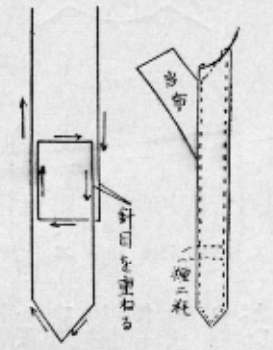
身頃

裾　前後の裾の切込みより切込みまでを三卷にします。

前明　上前には表見返し布を下前には裏見返し布をつけます。このとき胸の當布も一緒に挾みづけにします。下前に見返し布を中表に合せて、六粍の縫代にて縫合せ、縫代は見返し布の方へ倒し、表布が二粍裏側へ見返るやうに折り、更に出來上り幅二糎五粍にして際ミシンをかけます、このとき當布は第四十圖(ろ)のやうに挾み附けにします。



第四十圖

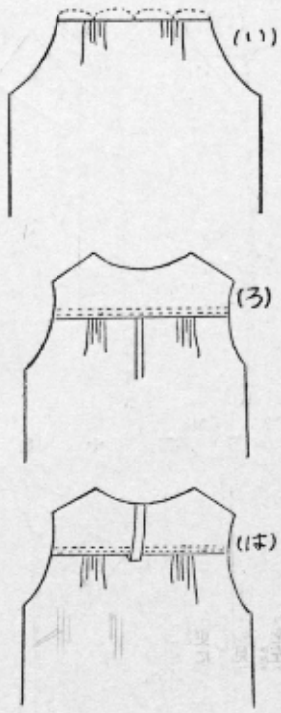


第四十一圖

上前は裏側に見返し布の表を合せて六粍の縫代で地縫をし、今度は身頃の方へ縫代を倒して見返し布が二粍見返へるやうに折り、更に三糎八粍幅に折つて飾ミシンをかけます。當布も前と同樣に一緒に附けます。飾ミシンの懸け方順序は袖の見返しと同じやうに第四十一圖左の矢印順にかけてゆきます、たゞし終り線をかけます時右圖のやうに當布を左の方へ跳ねておきます。次に後身頃へ移ります。

肩の作り方

後身頃もヨークの幅よりは廣くなつて居ますから、ヨークの幅と同寸に縫ひちゞめます。縫ひ縮めます寸法は、後幅から出來上り肩幅に加へるギヤザー幅を引いたものが、實際に縫ひ縮める寸法になります。このギヤザーは第三十九圖(いのやうに、後身頃の幅を四等分して、左右の等分線を中心として五糎のギヤザー幅に縫ひ上げます。その間へ多い寸法の二分の一づゝを適當に縮ませます。そして中央に六粍乃至一糎のテープを假附して置いて、表裏のヨークで身頃を挾み附けにします。縫代は六粍位として表から飾ミシンをかけます。この飾ミシンから五粍上へもう一度ミシンをかけます。(ろ圖參照)これをダブルミシンと申します。



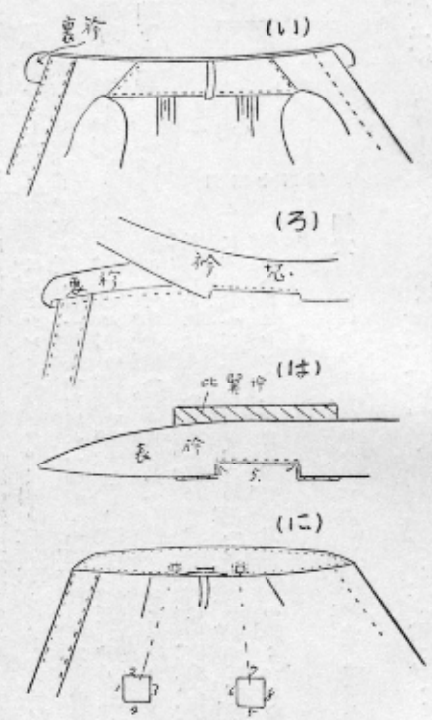
第四十二圖

前後の肩

前肩と裏ヨークとを合せます。この場合縫目は表になるやうに六粍の縫代で縫ひ、ヨークの方へ折ります。次に表ヨークを上り寸法に折り(先きに縫つた裏ヨークと前肩との縫目がかくれるだけの寸法)下の縫目に重ねてダブルミシンをかけます。ミシンの間は矢張り五粍といたします。後中心に附けたテープを二糎ほど弛めて衿刳の方へ假附して置きます。(第三十九圖(は)參照)

衿附

第四十三圖(いのやうに裏衿を身頃の裏側に當てゝ縫ひつけます。其の時身頃の方が一糎乃至一糎五粍位釣り加減にします。そして衿をおこして細かく躾をかけておき、縫代は四粍として他は拔落します。次に衿芯は中央で五糎をとり、その五糎の兩端に切込みを入れ、切り込みから切り込み迄の間を裏に折つて、裏衿の縫目の上に重ね、五糎の間だけ際ミシンをかけておきます。(ろ圖參照)



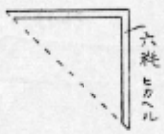
第四十三圖

表衿は(は圖のやうに中央で中表に比翼衿と合せて、芯の時と同じやうに五糎の間だけ地縫して其の兩端に切込

みを入れ、表へ返し際ミシンをかけます。次に表衿の縫ひ殘してある處を裏衿附に合せて四粍の縫代で地縫をし衿芯を平に入れて、他の三方を折り、假縫をかけて置きます。衿先きには心持丸味をつけておきます。附の方には際ミシン（五糎の處は除く）を、その他は四粍の縫代で飾ミシンをかけます。際ミシンの際（に圖のやうに、縫ひ殘した部分の兩側に止ミシンをかけます。五粍の正方形とし、ミシンの順序は圖の番號順にいたします。釦穴は中央及び左右の端から一糎入づつた處へ一つづゝ一糎五粍の横穴をあけてかゞつておきます。

袖附　袖と身頃とを中表に合せて六粍の縫代で地縫をし、縫目は身頃に折つて折り目に際ミシンをかけます。

袖下及脇　いづれも袋縫にして後身頃へ折り目をかへし際ミシンをかけます。



第四十四圖

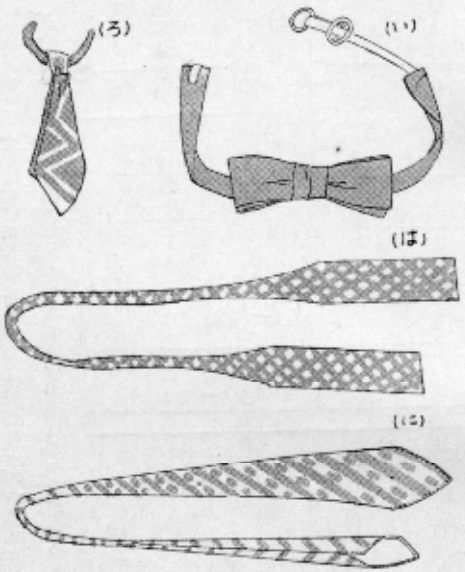
袖脇止めには全部へ力布を附けます。力布は四糎角に殘り布を切り第四十四圖のやうに六粍捻へて三角に折り、その捻へた寸法を折つて、袖又は脇止の裏へあて、三角の折山へ際ミシンをかけます。表の方は縫目の際ミシンの上からもう一度かけておきます。

釦穴　前明カラーの後中央及び前の兩端、袖先、カフスに釦穴を明け、かゞつておきます。

仕上げ　カラーとカフスには濃い加減の糊を吹き、身頃全體には薄い糊を吹いてアイロンで仕上げます。

ネクタイ

男子のネクタイは婦人の半衿のやうに衿元の美を保つ大切な役目を持つてゐるものですから、色にも柄にも心して選ばなければなりません。



第四十五圖

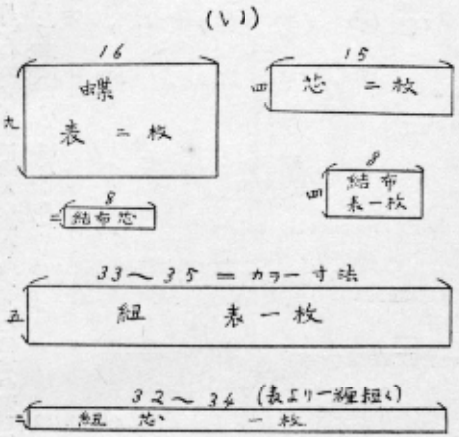
又儀式にはそれ〴〵の場合によつて形や色が定められてありますから、儀禮にはづれることのないやうにしなければなりません。

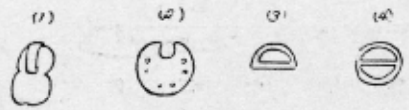
種類　形の上から分けますと、着用してから蝶形に結ぶもの、長くて結ぶもの、又結び上げてあるものでそのまゝ附ける式の物とがあります。第四十五圖（いのやうに蝶形に結び上げてあるものを蝶形ネクタイ或は一文字といつてゐますが、（はのやうに着用してから蝶形に結び上げるものもあります。（には長く出來てゐるものを着用してから結んで端を長く下げる型のもので、（ろは長く結び上げてあるものであります。

使用の區別

蝶形ネクタイ　結び上げてあるもの　柄物、縞物は平常用、黑は平常にもフロックの時にも用ひます。
　　着用してから結ぶもの　又喪服の時は必ず黑に限ります。白は燕尾服に限つて使用します。

長いネクタイ　種々の色合柄合がありますが何れも平常用であります。





第四十六圖

地質

表地としては羽二重、綾子、琥珀、練羅子など、又布地以外に編物、組糸などで作ることもあります。

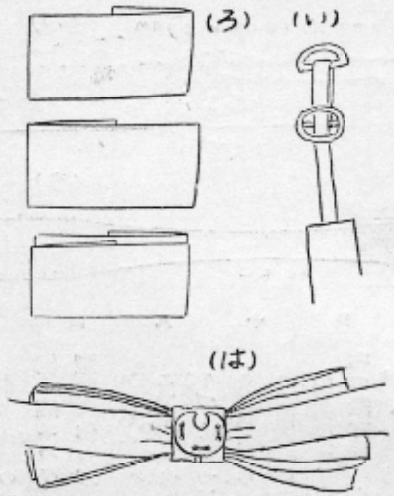
芯地には三河木綿、メンネル等を用ひます。

作り方

(1) 蝶形ネクタイ（結び上げてあるもの）

裁方　第四十六圖(い)の寸法通り蝶々の表二枚、芯二枚、紐表一枚、芯一枚、結び布表一枚、芯一枚を裁ち、別に(ろ)圖のやうな金具一組と一糎幅のゴムテープ約二〇糎を用意します。

縫方　蝶は表布の裏側中央に芯布をのせて、表布を芯布通りに折り、輻の裏側で細かくまつりぐけ、端の一方だけ（外へ出る方）出來上りに折つてまつつておきます。同様に今一つの方も縫けておきます。

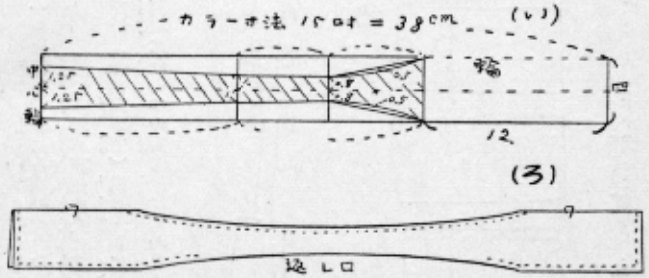


第四十七圖

結び布は表布の裏側中央へ蝶々のやうに芯布をのせて、裏の方で裁ち目を細かく芯へからげつけます。

紐は蝶と同じやうにします、但し右端の方にゴムテープを挾みづけにし、左の方に(ろ)圖(1)の金具の鈎が表側に出るやうに附けます。次に第四十七圖(い)のやうに、ゴムテープに金具(第四十六圖(ろ)の(3)と(4)を通して、テープの端を(4)の金具の裏側に丈夫にからげ附けて置きます。

各部をそれ〴〵縫ひ上げてから次のやうにまとめます、蝶々は第四十七圖(ろ)のやうにそれ〴〵表側を外にして折つたものを二つ重ねて眞中で一つ襞を



取り、裏側に紙をとぢつけ、結び布で表から巻くやうにして仕上げをし、(は)圖のやうに(2)(第四十三圖(ろ))の金具を裏側につけます。

第四十八圖　蝶ネクタイ（着用後結ぶもの）

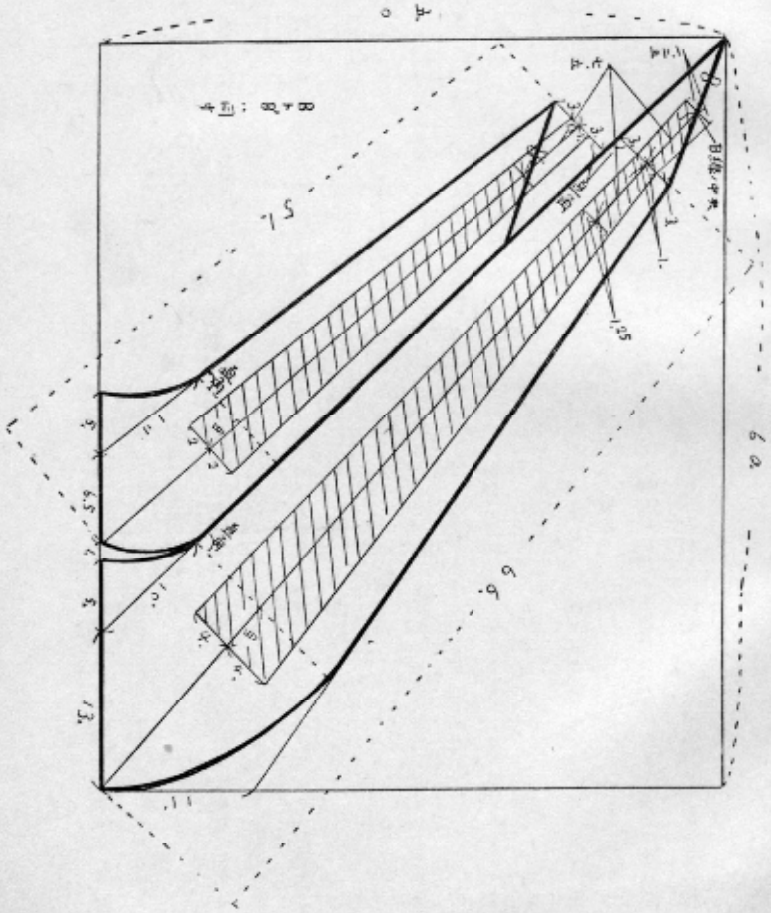
型紙の作り方　四糎幅で長さはカラー寸法だけの型紙に、第四十八圖(いのやうに右端から一二糎と標し、次に殘りを二等分したところで幅の中央から一糎づゝを取り、左端では幅の中央から一糎二粍半づゝを取つて前の一糎のところへ斜線でつなぎます。

それから貳中を又二等分してその中央で幅の中央から八粍づゝを取つて前の斜線につなぎます。一方は最初標した一二糎のところへ斜線を引いて、中央で五粍づゝ割ります。

布の裁方　八糎幅でカラー寸法の二倍の丈とし、布の幅を二つに折り、次に丈も二つに折つて、その上に型紙を當てゝ型通り裁ちます。この時端の方の一二糎のところは一方輪のまゝに置きます。

縫方　中表に合せ(ろ)圖のやうに輪のところはそのまゝにして、點線のところだけを八粍の縫ひ代で縫ひ合せ、表に返して返し口は細かく折けて置きます。表が薄地のものゝ時は芯を入れますが、その時

妻大圖



は（い）圖の中の斜線の引いてある部分が芯の型ですから、それに合せて芯地を裁つて帶の芯を入れる方法と同じやうに縫ひ代に綴ぢつけて入れます。

(3) 長くて着用後結ぶもの

型紙の作り方　第四十九圖のやうに大きい方の布の丈を六六糎にし、小さい方は五一糎にします。そしてBで二布を接ぐのでありますから、大きい方のBの寸法だけを小さい方に取ります。

芯の型は大きい方の六六糎に直角の線から上はB線を二等分した點と、横の線の中央、つまり角から三糎の點とをつなぎ、B線との交叉點で幅を左右に二糎二粍宛取り、斜線の間だけが芯になります。

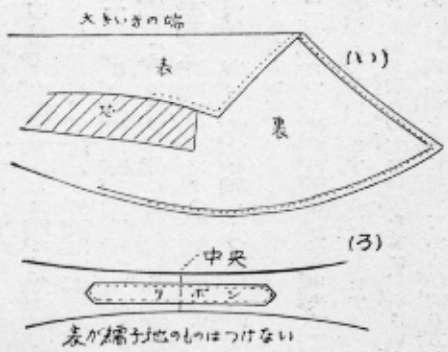
裁方　この型紙は表を見て裁つてありますから、このまゝ布の表に型紙を載せて（布目は斜に取ります）型紙通りに裁ちます。但し接ぎ代をBの部分だけに二布とも八粍つけておきます。

芯布は斜線の部分だけの型通りに裁ち、Bの接ぎも突きつけにしますから接ぎ代を入れません。

縫方　丸味の部分を細く三つ卷にかけるか、又はまつり縮にします。冬の物でしたら極く薄地の裏を附けることもあります。

二布共まつり縮が出來ましたら中央で二布を接ぎ合せます。この時縫ひ代だけづらして接ぎ合せませんと布がゆがんで接がれますから注意します。

それから表布の大きい方を右に、小さい方を左に布裏を上にして置き、芯布をその中央に据へ、第五十圖（いの）やうに向ふ側を先に折つてから手前の方を折つて芯布を包んで折り目をまつりつけます。この時芯布をも抄つ



第五十圖

て針を通します。なほ注意することは布のれぢれないやうにすることであります。

紬けトげましたら(ろ)圖のやうに中央の裏側に一糎五粍幅の繻子リボンを一五糎附けます。但し裏が繻子目の地質のものは附ける必要がありません。

リボンを附けない時でも附けたと同じやうにミシンだけ掛けておくこともあります。

(1) **長く結び上げてあるもの**

この型は今はあまりつかはれないやうですが、作り方は(3)の型と(1)の型とを取り合せたものでありますから、(1)の紙に(3)の下げる部分をつければ宜しいのであります。

附

洋服の着方に就て

洋裁に關する知識が一般に普及されて參りましたので、男子服などに就ては殆ど着方に對する注意などの必要はない迄に進歩して來ましたが、婦人子供のものに至りましては、まだ幾分の餘地があるやうに思はれますので、大體の要領を記しませう。

洋服の着方と申しましても、その要領は和服と同樣で、着物本來の目的を忘れることなく、衛生上、運動上に注意することはもとよりでありますが、更に、着物によつて、身體の恰好をよゝのへ、姿を引立たせるやうにするといふ點は和服も洋服も同樣であります。たゞこれ等の目的を一番理想的に果すのにはどうしたらよいかを研究、工夫するのが即ち作り方、着方の研究であります。

作り方の工夫に就ては本文にそれ〴〵記述しました通りですから、こゝでは着方に對する諸注意を申上げやうと思ひます。

下着の着方について

洋裝のスタイルをよくしやうと致しましたら、まづ下着のスタイルを工夫しなければなりません。上着ばかり

どんなに立派なものを着用いたしましても、下着がきちんとして居なければ上着の型はくづれてしまひます。ですから、下着に對しても型や地質、着方などについて注意を拂ふことが肝要であります。即ち

一、上着の用有が柔かな地質のときには、下着も糊氣のない生地を撰ぶこと。

二、身體にしつくり合ふやうな地質を撰ぶこと。（メリヤス類などは最も理想的な下着です。）

三、冬季用の下着はなるべく紫張らない温いものを撰ぶこと。

四、メリヤス以外の下着には袖を附けないこと。（袖が幾枚も重ると、上衣の袖がつまります。）

五、衿割はなるべく大きくしてどの下着にも用ひられるやうにすること。

六、毛織物の上着の下にはサラリとした地質の下着を用ふること。

七、スリップは和服の長襦袢のやうなものでどんな場合にも必らず用ひます。

八、その他婦人の場合にはコーセットが必要です。姿勢をよくするために是非とも必要でありますから、どんな弱るやかな上着のときでも用ひます。寸法は腹部の周圍の寸法よりも一割せまいもので、ゴム入りのものがよろしい。またお乳の大きい人及び夏季薄物の上着を用ふるときには乳カバーを要します。

九、ペティコートとコーセットカバーを一組にしたものが、スリップに當りますから、どちらを用ひてもよくまた、兩方併用しても差支へありません。

靴下、靴下吊り、靴

靴下　にはストツキングとサツクとの二種類があります。

ストツキングと申しますのは、女兒及び婦人用のもので膕までの長さのあるもので、サツクと云ふのは膝頭ぐらゐまで、或はそれ以下の長さのもので男子及び男女兒用として多く用ひられて居ります。

婦人用としては普通はストツキングで、サツクは登山や運動等の特殊の服裝の時以外には用ひません。

女兒用には季節に應じて兩者を適度に用ひます。

男兒用としては膝頭位までのサツクを用ひます。

幼兒用には、軀の中程位までのサツクを用ひ冬季だけ膝頭位までのものを用ひます。

靴下吊り　ストツキング用には帶にゴムテープ製の靴下吊りをつけたもの、又はゴムテープ製の靴下吊の上部に安全ピンを附けて下着に止めて吊るのを用ひます。然し帶式のものは腹部を締めつけますので、衛生上面白くありません。婦人用にも女兒用にも安全ピン式のものゝ方がよろしい。

サツタス用には環狀をしたゴムテープの靴下止めを用ひます。

靴　男女兒用の靴は踵の低い爪尖の幅の廣い少し弛い位の靴を撰び、短靴を用ひます。又幼兒には成る可く釦止めのものを撰びます。編上靴は男兒用に適します。

婦人用の靴は踵の高いものゝ方が姿勢をよくし歩調も大股になります故歩く恰好がよくなります。紐で結ぶ短靴は通常用とし、外出用には紐で結ばないで甲のあいてゐるものを用ひます。

尙、雨天用のゴムオーバシユースは室内にはいる時には必らず脱ぎます。

着方の順序

男児　メリヤスの肌着（或はコンビネーション）、アンダーウエアー、靴下、上着。

女児　メリヤスの肌着（或はシミーズ、エンペローブ、シミーズ、コンビネーション）チョッキ（又はウエイスト）、ヅロース、アンダーウエアー）靴下吊、靴下、スリップ、上着。

婦人　一番下は女児と同様、次はお乳カバー（或はチョッキ、ヅロース、アンダーウエアー）コーセット、靴下吊、靴下、コーセットカバー、ペティコート（或はスリップ）上着。

大體の順序は右のやうですが、寒暖により、また仕事その他の場合によつて適當にして差し支へありません。

上着　上着はどんな種類のものでも前に襟の寄ることは良くありませんから前の襟は出來るだけ除きます。止むを得ない場合には襟を兩脇に讓つて着るやうにいたします。又被つて着る上着を手際よく着るのには頸に組ハンケチを被つて着ますと髪もみだれず着るのにも樂であります。女児服や婦人服に用ふるベルトは腰部であまり締めずに強やかに落ちない程度にいたします。編物のセーターは上着の代用として用ひますから、セーターの上にまた上着を着るとか或は上着の上にセーターを着るなどのことはありません。

外套　洋服は大低單衣仕立ですから防寒のために充分暖いものを用ひます。そして訪問の場合でも、暖房裝置の完全でない室の外は外套を着たまゝで楽支へありません。但し「外套を着たまゝで失禮でございますが」とお斷りするだけの禮儀はほしいものであります。

昭和九年五月二十日印刷
昭和九年五月二十五日發行

洋裁の初歩より奥附

定價金參圓

著者　大妻コタカ
東京市本郷區元町一丁目十三番地
發行者　橋口景二
東京市神田區鎌倉町二十番地
印刷者　川瀬丙午郎

東京市本郷區元町一丁目十三番地
發行所　研文書院
電話小石川〇一九五番
振替東京五九五七五番

（三共舍印刷所印刷）

◀文部省認定▶

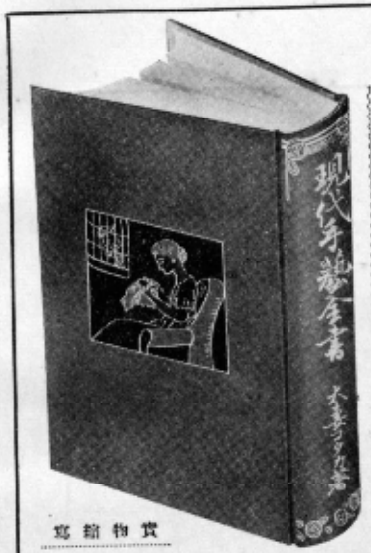
現代手藝全書

大妻技藝學校長
大妻高等女學校長
大妻コタカ先生著

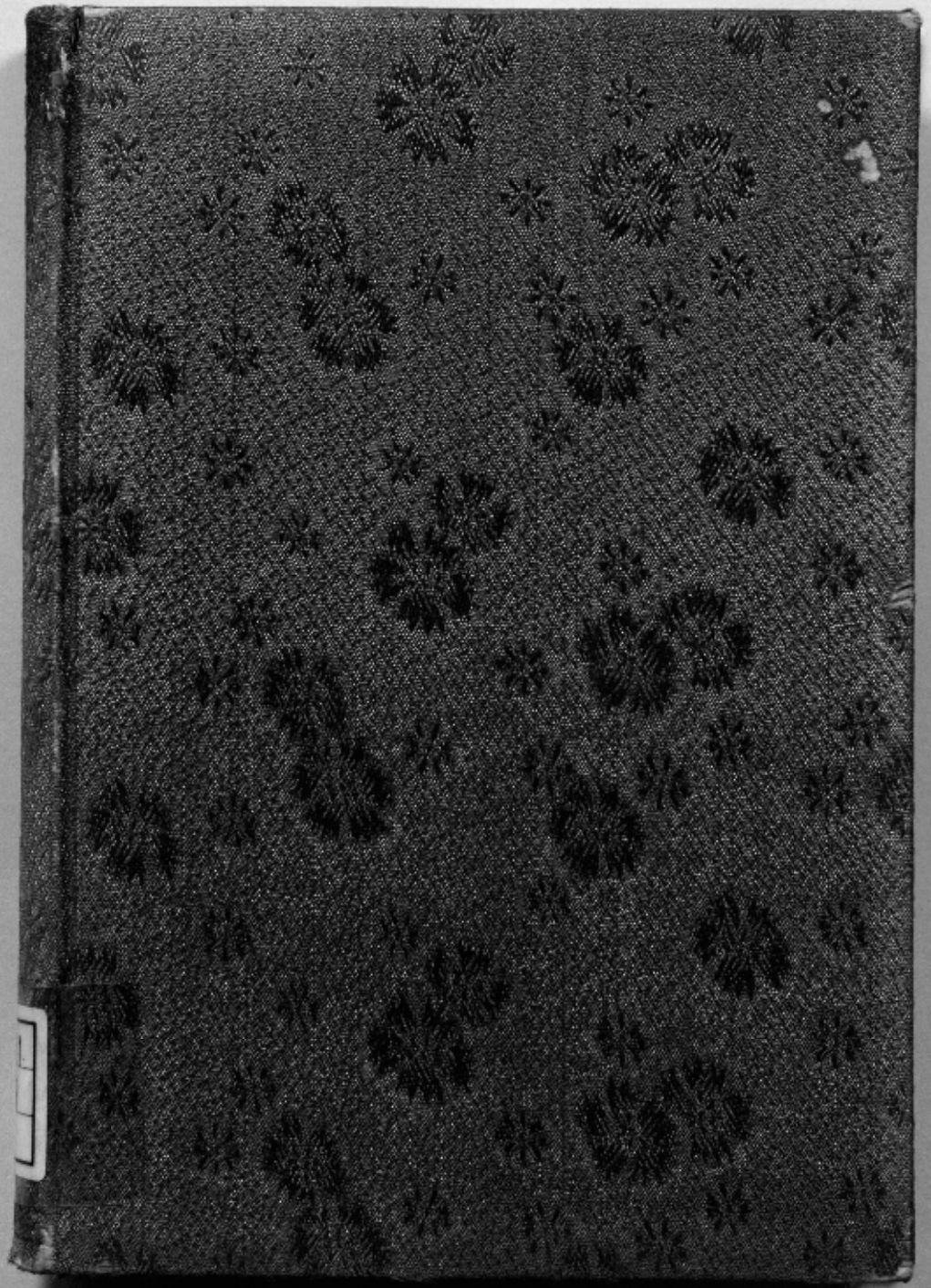
菊判總クロース裝幀美
紙質優良六百十五頁

定價 金參圓五拾錢
特價 金貳圓七拾錢
送料二十二錢

文部省認定の光榮に浴せる本書は教師にも獨習者にも絶好の親切な參考書である



實物縮寫

本書は編物・刺繍・摘畫・縫細工・人形細工・折紙水引其の他手藝の各科に渉りて、初歩の技術から其の應用に至る迄、著者多年の研究と教授上の經驗とに基き、一つ一つ實物を作りながら、要所々々には無慮一千四百の圖解を施して親切叮嚀に記述せるもの、其の場限りの無責任な雜誌の附錄等と異り組織的に統一せるものなれば、初心者には絶好の師友であり、相當心得ある方は本書によつて、其の奥儀迄極める事が出來る。

文部省認定の光榮に浴せる事實は、本書の内容を最も雄辯に證明してゐる。